



特 8

197

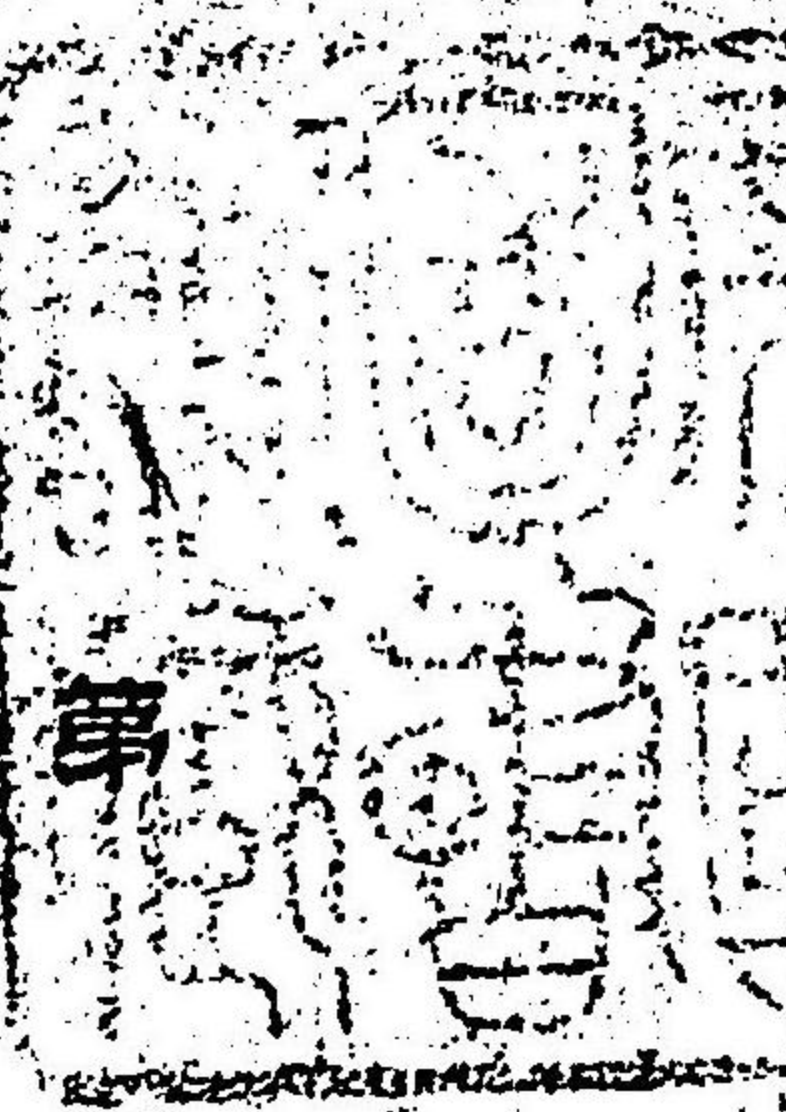




197

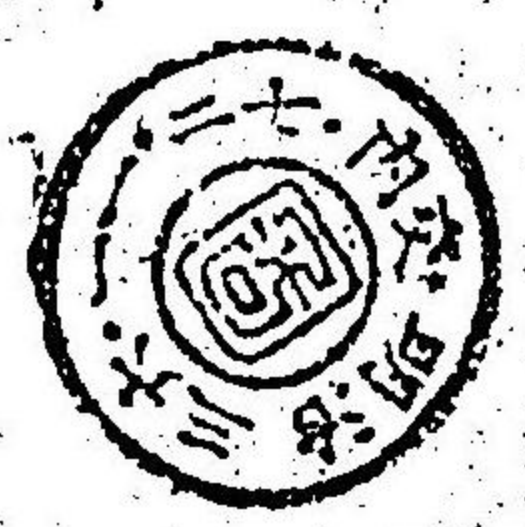
斬 番 六 十 三

水月三十一番斬



一 回

神田伯龍講演
丸山平次郎速記



一 這回柏原圭文堂主人の御所望に依りまして、伊賀の水月三十一番斬と表題を下し、結局に至りまして、寛永十一年十一月七日、伊賀の上野大手前健屋ヶ辻に於て仇討を遂げました。天下三仇討の一つ、彼の渡邊數馬に助勢を致しました。荒木又右衛門のお話に取掛るのでございます。尤も本講談は伯龍前年の書肆の注文に依りまして、荒木又右衛門と表題を下し、一度講談を致しましたことがございませぬ。併しその節は何分紙數なり冊數に制限がございませぬ。

餘り長談に涉ります所の講談は總体伺はぬやうに致しまして、大抵は手取早く、概略切詰りて申上げましたやうなことでございまして、先般の荒木又右衛門でもその通りで、その節は概略伺ひ置きました。退回は成るだけ詳しく、講座通り、細密に講演を致し呉れよとの御所望でございませう。依つて伯龍もその積りで、講座にかけます。通り、本日より伺ひますることとでございませう。尤もこの講談は、敵討も数多ございませう中に、よく伯龍輩の云草にも「二に富士、二に鷹の羽の打違ひ、三に上野の花や散るらん」とか申しました。第一が會我物語、其次が義士傳、第三が伊賀の水月と云つて、これを天下三敵討と致してございませう。その伊賀の水月に關係のある荒木又右衛門といふ仁は、寛永年間有名なる武術家の位置を占めて居りました方でございませうが、併し「梅花枯れて櫻花再び咲出す」といふの譬喩で、その本源を伺ひませんければ、物の順序が相立ちませせん。本來この荒木又右衛門が師と致し劍道を學びました仁

は、申上げるまでもなく、柳生重兵衛三郎といへるお方で、この仁は三代將軍家光公の内命を襲つて、密かに諸國を漫遊いたされまして、中國九州邊の諸大名の内實、その國の様子等を探らんと、一旦發狂いたしたといふ体裁に持成し、極秘に御廻りに相成りました。このこと前後七ヶ年の間でございませう。その旅行先に於て、荒木村を御見出しに相成りましたやうな次第でございませう。大体この柳生と申しませう御仁に就きまして、詳しくお話を伺ひますと、この重兵衛殿の父は、二代將軍秀忠公の御手を取つて御指南を致されました。柳生但馬守宗矩殿にございませう。このお方は昔の亟相道眞公の末孫に致して、前名柳生又左衛門と仰せられましたお方でございませう。此仁は上州樂輪の住人上泉伊勢守の門弟のうち、四天王の一と云はれました御仁で、上泉といふのは神陰流の元祖として武藝を弘めたる方でございませう。先づそのうちに於て有名なる御仁は前名平馬と仰しやつた羽賀一心齋、後にこの仁は備中國飯山の山中

に閉籠つたお方でございます、それに尋いて淺山三五郎一傳齋、それから塚原小太郎、後に卜傳と稱しました、これも有名な仁でございます、それに尋いて柳生又左衛門でございます、この四名が、上泉の道場の四天王と稱へられました、このうち又左衛門殿は、神陰に就きましてのお話もございます、そのうち又左衛門殿は、神陰流の奥義を極められた後、この神陰流より一派を編出し、柳生流といふものを發明なされた位、遂に武藝の爲めに一眼を失ひ、砂目とお成りなさいました、その後片目外しの正眼といふものを、工夫いたされまして、どこか、どこか、このお方は、二代將軍秀忠公天下を御治りに相成りました、御見出しに預りました、又左衛門殿は將軍家の御指南番役といふ事になり、一万石をたまはりましたのでございます、武藝を以て一万石の御知行を頂戴いたされましたのは、先づ柳生殿より他にはございませぬ、そこでお屋敷は木挽町の五丁目にありましたが、尤もこれはその以前坂崎

出羽守といふ方が送られたお屋敷でございます、如何いふもので柳生殿の手に還入ったか、と申しますと、彼の石州津和野の城主坂崎出羽守殿は、三万五千石を頂戴いたし、天晴れ武勇の家柄でございまして、然るに元和元年五月に至つて、大阪落城の砌り、二代將軍秀忠公、平野に御本陣を御設けに相成りまして、大阪をば陥さんと致された際、秀忠公の御姫君に仙姫さまと仰せられる方がございまして、これは大阪城内へ御輿入れに相成りまして、豊臣秀頼公の御簾中となつて居られました、ところが這回いよく落城といふ事に就いては、御母堂流君は、非常に御憤りでございまして、仙姫をば刺殺して、共にその身も生害をなさうといふ思召しでありましたのも、素より關東の爲めに圖られたので、その御憤怒は御有理でございませぬ、二代公もその事を御察しに相成つて、何うにか致して落城までには姫を取返したいと思召した、所謂これは親子の情愛でございませう、そこで臣下の者、その御汰沙に相成りました、尤もこの儀

に就きましては、難波戦記にて、詳しく伺うてございますから、別
段申上げまするまでもございせんが、併しお話の順序でございま
すから、筋道だけはチヨツと申上げて置きます、今日しも落城とい
ふ砌りに至つて、姫は取返す者あらば、必らず姫を遣し、その上十
万石の恩賞を取らせるといふ、ア所謂懸賞附の御沙汰でございま
す、この時坂崎出羽守に於きましては、いま火焰盛んど相成りまし
て、大阪城も陥落いたさうといふ折、その火の中へ飛込んで、やう
のことにて仙姫さまを助け出したのであります、左右するうち
終に大阪も落城いたしました、そこで二代秀忠公も、無事に關東へ
凱旋を致さうといふ際に至つて、仙姫さまも行列を立て、御歸りに
相成りまする道中途次、我良人と致されたる秀頼公は、最早討死を
致されたといふ思召しのあります所から、何となく氣も浮かず、
僕々として娛ます、道中の徒然を誰れ慰める者もなく、遂に日敷を
果ねて、東海道大井川へ御差掛りに相成りましたる時、本多中務と

いふ者を、不圖か見集りになりまして、道中筋にてこの中務を御籠
受と致されたのでございします、その後江戸表へ御歸りになりました
てからも、向本多の事を忘れられず、且夕戀慕ひ居られましたるこ
とでございします、御父秀忠公もこれを不惑に思召して、何卒本多の
許へ嫁けてやりたいものであると思召して在らつしやる、そのうち
に本多の胤を身に宿したる様子でありますから、何うも戦場にて仰
せられましたる通り、坂崎出羽守が助けたから、本来なれば坂崎の
許へ遣さんければならぬのでございします、一なれども慥く懐胎を致し
て見ますると、向以て左様な都合には参りません、そこで只々姫は
病氣といふので、遂にその儘といふ事に相成つたのでございします、
然るにこの坂崎といへる仁は、左様な事は露知らず、「吾れは命懸に
て姫を助け出したのである、その砌り二代公の御言葉もあつたが、
先づ何方かといへば、十萬石の加増は、敢て望ましいことはない、
只姫君を申受け、縁組を致したい」といふ、妙な所へ力瘤を入れた

して、度々二代公に追つて、仙姫の頂戴の儀を申込みましたるこ
とでございませぬ、と云ふが、「何分姫は病氣であるから、その儀はな
り難いが、豫て申したる通り、十万石の恩賞を取らせらるから、それ
にて辛抱を致し呉れよ」といふお諭しなとも度々あつたのでござ
いませぬ、けれども出羽守は中々承知を致しませぬ、「敢て十万石を
望むのではござりませぬ、是非姫君を頂戴いたしたいので、併し御
病氣とあるなれば、私の屋敷に引取りまして、三万五千石は悉く藥
代に入れまして構ひませぬ」と大變熱心なお方でございまして、
度々申出でますることでありませぬが何うも姫を遣すことは出來ない
といふこととございませぬから、坂崎の所望も叶ひませぬ、依つて坂
崎出羽守に於きましては、「それでは御契約が違ひます、一旦將軍の
仰せられましたる御言葉でありながら、甚だ不都合なる事を致され
るものかな、仄かに噂を承れば、本多中務なる者と、内縁を取結
んだとのこと、何うも奇怪千萬なることである」と憤怒の餘り、一

に發狂いたしまして、大膽にも坂崎は殿中に於きまして、拔刀を致
し、亂暴に及ぶといふ騒ぎでございませぬ、が、誰れもこれを取押
へる者がなかつたのでございませぬ、それをこの柳生但馬守殿が、到
頭取鏡りられましたることとありまして、お氣の毒なるかな、坂崎
出羽守は、彼の恩賞として、十万石を貰ふこともならず、殿中に
拔刀を致したといふ廉に依りまして、却つてその身所領の三万五千
石は御取上げの上家斷絶、剩さへその身切腹を仰付けられましたと
いふ、随分馬鹿な人間もあつたもので、ア伯龍輩なら、十万石の
方に傾きまして、都合十三万五千石となりませぬれば、随分仙姫さま
から見れば、遙かに勝つた女も、自由自在になることとでございま
すから、怒の方には傾くのでございませぬが、何うも往昔の人間とはい
へ、斯様な頑固な人物にかゝつて見ると、致方のないものでござい
ませぬ、そこで石州坂崎の家は没落いたして仕舞ひました、で、這回
の功に依りまして、柳生但馬守へ坂崎の上屋敷、彼の木挽町五丁目

の屋敷を下し置かれましたのでございませぬ、随分立派なものでござ
います、素より將軍の御指南番といふのでございませぬから、道場も
他の比にあらずといふ、何しろ八間四方、無柱のお道場、これ全く
將軍家の御指南番役でなければ、新様な道場といふものは建てられ
るものではございませぬ、ところがこの柳生但馬守殿には、お子様
が四名お有りなすつたのでございませぬ、御惣領を重兵衛三郎と仰
せられ、なか、このお方は、恰かなお方でございませぬ、御幼少
の御より、三代將軍になられました、彼竹千代君の御側に仕へ
まして、お小性役をお勤めなされたのでございませぬ、尤もこの重兵
衛殿でございませぬ、或は幼名長四郎と仰せられまして、後に參州
吉田に於て松平伊豆守信綱、一名智恵で充んでありました智恵伊豆
守なせ、仰しやるお方も、矢張り三代様が竹千代様でお在でなされ
た時分には、御側お傳役の一人でございませぬ、大勢お側衆のあり
ます中にも、取分け長四郎殿とこの重兵衛殿とは、竹千代様の至

つてお嬬人でございませぬ、そこで後に至つて三代の將軍となられ
世をお治めになり、徳川武蔵守家光公とならせられました時に、こ
の將軍家の台命を蒙つて、重兵衛殿は諸國漫遊をなさるのでござい
ます、これは追々伺ひます、此仁は前にも申し上げました通り、
柳生家の御惣領でございませぬ、その次は刑部と仰せられ、このお
方は早世をなさいませぬ、その次は又十郎と仰せられ、至つて御幼
少の頃は、御柔弱のお方でございませぬ、後に飛騨守宗冬
とお成りなされたのでございませぬ、その次はお女中とございませぬ
これをお梅さまと仰せられました、此女は後に志州烏羽の城主、當
時老中の一人松平左近將監様へ御嫁に相成りましたのでございませ
す、ところが四名のお子様うちに於て、重兵衛殿は天然自然武術
が身に備はつたものと見ゆませぬ、名入上手に二代なしといふ事を
能く申します、柳生のお家ばかりは、代々名入が出でまして、尻
跳が致して来るやうな勘定で重兵衛殿は御父君但馬守殿と、屢々お

試合を遊ばしても、最上二十歳の上をお越しなされ、二十四五といふ頃はひには、三本試合のうち、必らず二本までは重兵衛殿が御勝利を得られるといふ事に相成つたのでございませす、これが爲めに、「行く」我家督を譲るは、この重兵衛殿である、何卒いたして早く彼れに世を譲り、吾れは隠居の身の上となりたいたいの」と父但馬守殿はそれを樂みに思召して在らっしゃいました、ところが未だお小姓で、家光公が竹千代君と仰せられました時分から、始終重兵衛殿はこの竹千代君の御側を離れず仕へ居りまして、萬事密談を聞いてお在でなさいませす中にも、正殿の時分は主君の御爲となつて、吾れは天下に名前を揚げたいものをもといふ思召しでございませす、御願當に依つて竹千代君、三代を御相續になつて、將軍の職に御就き遊ばし、徳川武蔵守家光公となられ、茲に天下を御治めになるといふ事になりませした、尤もこの徳川の御家は、智仁勇の三徳を以て、世を治められたのでございませす、抑も初代家康公は、智を以て世を御

治めに相成り、二代將軍秀忠公は仁を以てせられませした、世の中は三尺の劍を以て治めんより、寧ろ仁を以て治むるに如かじと思召し、至つて二代公は仁君に渡らせられませした、また三代公は、殊のはか活潑な主君で、武を以て世を御治めに相成つたのでございませす、何しる部屋住でお在で遊ばす時分には、お微行で城内をお出ましになつて、辻斬までも遊ばしたといふやうなことでございませす、なか、武腰つたお方でございませした、これに依つて三代公の御世となりませした後は、一ます、武藝も隆盛といふところに相成つて参り武藝の名人も數多輩出ませしたのでございませす、どころが總休家といふものは、三代目が大切でございませして、彼の川柳などにて「貞据と唐様に書く三代目」と申してございませす、親父の代には食ふ物も喫はないで、一生懸命に金を蓄めて、何うやら斯うやらその身代を拵へませして、それを息子に譲つて世を遊りませす、大体親父は若い時分から節儉を守り、一生懸命働いて、家を興したのでございませ

すから、その悴は幼少の砌りは、當季の物も碌々着ることは出来ず
 只親父に事へて、共々に儉約をして働いて居りました者も、その嚴
 しい親父が亡くなつて仕舞つて、己れの代となりましたから、少し
 は榮もしやうと思つて居る所へ、子供でも出来ますると、自分の子
 供の砌りに、追使はれた事はツイ忘れまして、子の愛に惹かされ、
 乳母日傘といふので、蝶上花よと育上げまして、誠にその教育とい
 ふものが、忽せなものでございませうから、この二代目の悴が、段々
 増長いたしまして、ソロソロ物心が付いて來ると、金を儲へる方よ
 りは、費消ふ方にかゝつて參るやうなことで、親父はそれを心配い
 たしまして、段々異見をしますと、却つて息子は自棄になつて、
 放蕩が増長て來る、で、勘當も度々せねばならぬといふやうなこと
 になり、親父はそれを氣に病んで、終に歸らぬ旅に赴きます、一
 ア斯うなる息子とん、怖い毛虫親父が亡くなつたといふので、一
 寸先は關の世、人間僅か五十年、面白可笑く暮すが何よりと、贅澤

のあり丈を仕盡して、大抵な遊廓には足を入れ、さて己れが丁度分
 別盛りの年頃になりますと、その家藏も他手に渡して仕舞ひまして
 遂には裏屋の隅所へ引込んで仕舞ひ、折角祖父さんが拵へて置いた
 身代は、滅茶苦茶に致して仕舞ひまして、到頭「賣据と唐様に書く
 三代目」といふやうな事になりますので、一ア斯ういふ事は中流以
 下には往々ある例ひでございませう、況して將軍家に於ては、この三
 代といふのは大切なものでございまして、素より今までといふもの
 は、諸國の大名のうち、御譜代を除くの外は、何れもお客分と致し
 てありましたので、諸候も畢竟する時の勢ひに、己ひを得ず從うて
 は居りますもの、素破天下に事ありといふ時には、幾分か豊臣家
 より受けましたるその恩義の程も忘却なり難く、常時世は太平の形
 とは雖も、一ア所謂半治半亂でございまして、彼の關ヶ原或は難波
 の合戦に討死を致しましたる者等の子孫、又は殘黨の銘々、隨分
 諸方に残つて居りますこととでございまして、取分け九州地方には

彼の細川、又は日向、大隅、薩摩を領いたされまする島津等、何うもこれ等の徒のその心の奥底といふのが分らぬのでございませう、素より徳川家を大磐石に礎を固く立てられましたのは、一ツは御自身の働さしにありとはいへど、大將一人で戦闘といふものは出来ぬものでございませぬ、矢張りそれ相當に側に附従ふ者が、巧く持込んで行かないといふと、なかく、好結果の得られるのではないのでございませぬが、この徳川家に取つて、御家の輔佐といふのは、南光坊天海、大久保彦左衛門といへる二人でございませぬ、尤もこの南光坊天海といふ御方は、足利義輝公の御子様でございませぬ、併しこの御方の砌りより、出家得道を致された御仁でございませぬ、是の傍を離れたことは、身の長八尺餘ありましたさうで、何時も家康公の傍を離れたことは、法衣を授けかけ、彼の難波戦争の砌りなどは、坊主でありながら鐵棒を御用ゐるになり、また或時は家康公の名代となつて、諸軍勢を指揮して、諸方に於て功名を願ひましたといふ、後に徳川家天下統一をいたされましてより、南光坊天海は三十万石の御墨附をばたまはる事になりましたが、なかく、無慾な方でございませぬから、愚僧は決して新様なものには要らないといふので、その墨附を焼棄てよお仕舞ひなすつた位でございませぬ、そこで總て天下の政治は、この天海僧正に對して、萬事内密に御相談を致されるといふ事に相成つて一朝天下に事ある時は、必ず第一番にこの南光坊天海といふ御方がお出ましになりませぬ、お年齒は百二十歳までは覺えて居たがそれから先は忘れて仕舞つたといふ、呑氣な御出家でございませぬ、申されました事は、諸君の知らるゝ所でございませぬ、慈眼大師と大師の號を賜りましたのは、この御方か、高野山の弘法大師、彼の空海上人でございませぬ、が、彼の達磨さんも矢張り大師の號はございませぬ、餘りこの大師さんは、人々が信仰いたしません

揮して、諸方に於て功名を願ひましたといふ、後に徳川家天下統一をいたされましてより、南光坊天海は三十万石の御墨附をばたまはる事になりましたが、なかく、無慾な方でございませぬから、愚僧は決して新様なものには要らないといふので、その墨附を焼棄てよお仕舞ひなすつた位でございませぬ、そこで總て天下の政治は、この天海僧正に對して、萬事内密に御相談を致されるといふ事に相成つて一朝天下に事ある時は、必ず第一番にこの南光坊天海といふ御方がお出ましになりませぬ、お年齒は百二十歳までは覺えて居たがそれから先は忘れて仕舞つたといふ、呑氣な御出家でございませぬ、申されました事は、諸君の知らるゝ所でございませぬ、慈眼大師と大師の號を賜りましたのは、この御方か、高野山の弘法大師、彼の空海上人でございませぬ、が、彼の達磨さんも矢張り大師の號はございませぬ、餘りこの大師さんは、人々が信仰いたしません

原を糺せば大した仁でありましたらうけれども、
煙草屋の看板となつて居りまするが、彼れは何か間違つたものでございませう、併し大師號といへば、なかく大したもののでございまして、太政大臣にまでも准ずるといふ程であつて、天下の諸侯何れも恐れをなした位で、また徳川殿中に於ては、老中でさへも、この天海僧正には、頭が上りませなかつた、總て呼捨てに遊ばしても苦しうない、天下御異見番内座輔佐の臣と申して、三代公に於てすら、お師匠、師の御坊と言はれた位、御尊厳に相成つたのでございませ、と、この家光公は、將軍職を嗣いで世を御治りなすつても、矢張り中國九州の事が、氣に懸つてなりませんから、先づ中國から九州の諸大名の心腹を篤と相糺すには、密かに彼の地方へ、誰れか漫遊をさして、その上諸國の様子を探らさんといふ思召しでありませ、けれども、またそれだけの器量で以て、諸侯方の氣風を篤と見定め、ける者でなければ、このお役は勤まりません、そこでこの天

海僧正を首め、同じく將軍家御異見番の一人たる、東海寺の澤庵禪師、智恵伊豆と謂はれたる松平伊豆守信綱、この三人を御手許へお招きに相成りまして、内々御相談に相成りますと、「先づ今この役に適當といふのは、柳生重兵衛三嚴より他にはありません」と天海僧正より家光公に對して密かに申し上げました、依つて將軍家は早速重兵衛を御呼びになり、極内々でこの秘密をば申入れられたのでございませ、この時重兵衛も上様の意中を御察し申し、何か密々申上げることに相成りましたが、この後は木挽町のお屋敷へお歸りになりますと、殿中へ出仕もなく、只々且夕武藝の事のみを心に委ねてお在でになりました、ところが最う二十七八歳の頃はひには、父と三本試合を致しました、必らず三本まで勝利を取るといふ、餘程の腕前となりまして、然うなりますと、武藝に慢心の餘り、不圖發狂を致されました様子でございませ、が、これ所謂心底からの發狂ではないのでございませ、けれども發狂といふ体にて持成さぬと

いふと、九州中國その他の地方を漫遊をして、彼の秘密を探りました上、このお方が江戸表に歸つて、將軍家に申上げたといふやうなことになる、さては吾れくの國々を探られたのであるかど、却つて諸侯方の氣を不快くして仕舞ふやうなものでございませぬ、一旦氣狂となつた者が、國々を廻るとして見れば、別段に諸大名の徒も、彼れは氣狂であつたかといふので、敢て答める者もございませぬ、そこで重兵衛殿は狂人となつて内密をお探りになるといふやうなことでございませぬから、お氣の毒だが、柳生家の御相續といふことは出来ないうやうになるのでございませぬ、と思し召すから、少しも御頓着なく、只日々をそれ等の事を、御工夫あそばして在らっしゃつたが、茲に重兵衛殿いよゝゝ發狂といふことに相成ります、一段でございませぬが、チロツと一息いたしまして次回に。

第二回

さて何うも氣狂になるにも、何か事情がなければなれるものではございませぬ、自分の最愛の子を死なれて、ハツと思つて發狂する者もあれば、また多くの財産を泥棒の爲めに奪はれ、小指から發狂する者もあれば、さうかと思へば、吾の一代のうち、先づこれだけ借家も出来、當今なら保険といふものもありまして、假令類焼しても保険さへ附けて置けば、幾らかこの保険金といふものが取れますから、此金を以て直に跡へまた建てることも出来ませぬが、往昔は然ういふ所の便宜はございませぬ、依つて折角出来上つて、最上手離れ、人に貸すやうになりまして、これだけ家さへ建て置けば結構と思ふ矢先、一夜のうちにドツと焼けて仕舞つて、翌日になつて見れば、それが灰となつて居りますから、その場に腰を抜がしてその類焼後の様を見て、發狂する者もあれば、親に死別して發狂する

者もあり、さう云ふ工合に何かその原因があればこそ、一發狂を致す
ことでございませぬので、只何事もなきに、氣狂の真似をしたからッ
ても、他が承知をするものではございませぬ、依ッてこの重兵衛殿
も、一時に氣狂となつたといふのではないので、天然自然に斯う發
狂いたして來るやうな形に計うたのでございませぬから、最初の程に
然のみ異りませぬ重兵衛、コリヤ、誰を居らぬか、來いよ」とお召しに
相成りますから、御近習の長谷川金三郎といふ者、重兵衛殿のお側
へ参りますと重兵衛、オ、誰れかと思へば長谷川、最少と前に進め、
金三ハ、ッ、何か御用でござりまするか重兵衛、ア、其方に予は尋ねた
い事がある、當代武藝を以て天下の名人を謂ふべき者は誰れである
か、其方存じて居るか金三ハ、ッ、左様でござります、先づ私の考
へまするところでは、御當家様の親主公様は、當時將軍家の御指南
番、御先代様から引續き上様の御手を取ッて御指南をなさる御家柄
その御指南番を致されましますところの御父君に尊公はお勝ち遊ばす

位でござりますから、アア尊公様が御名人のやうに私は心得ませ
る重兵衛何と申す、予を以て名人といふか金三御意にござります重兵
然らばなにか、父上は予から見ると、劣ッて居られるのだナ金三御
意にござります重兵衛、イヤ予に劣ッて居られる父上が、將軍家
の御指南番を致してお在でなさるが、予はその上を越すといへば、
恐れ多いことであるが、一天萬乗の御門の御指南を申しても苦しう
ないであらう金三ハ、ッ……」と言ッたが、近習は驚きました「大
變な事を仰しやる」と思ひながら、目をバチク／＼させて、重兵衛殿
のお顔を視詰めて居りますと重兵衛如何にや、苦しうないか金三御意
にござります、それは少しも構ひませんけれども、何うも左様な事
はなり兼ねませうと心得ませ重兵衛でも予は當時天下の名人ではない
か、是非とも予は一天の御門へ御指南を申上げたいのぢや……イヤ
モウこれだけの名人になッて見ると困るわい、門人が日々増ゆる
ので困ッて居る金三ハ、エ、未だ若様には御門人が参らぬやうに心

得て居ります。重兵「イヤ、昨日も参ったぞ、備は知らぬか金三
 へ、何のやうな者が参りました。重兵「然ればである、曾我十郎祐成
 と五郎時致の兄弟が、態々出掛けて参り、私の父河津三郎と申す者
 が、赤澤山の歸途に、近江、八幡の遠矢にかゝつて、敢ない所の最
 期を遂げました。想出すも涙の程、安元二年神無月、父を撃たれた
 その後は、何卒いたして亡父の仇敵を討りたいと、その當の仇敵を
 尋ねて見れば、いま頼朝公に仕へて、羽振を利かす一老職、諸士の
 別當工藤祐經こそ當の仇敵、依つて建久四年五月二十八日を敵討の
 當日と定め、富士の裾野の獵場へ乗込んで、祐經を討取りたいと心
 得ますが、何を言ふにも兄弟は、未熟の腕前でござりますから、是
 非とも天下の名人柳生重兵衛公のお腕前を以て、お仕込み下し置か
 れたいと申して参ったが、如何なものぢや、致へてやつたものであ
 らうか金三「へー……」と長谷川も驚いて仕舞った。「なんでこんな
 妙な事を仰しやるのであらうか」と不思議に心得ましたが、別に落

語をなさるといふのもない、真面目腐つて仰しやつて在らつしや
 いますから、薩張り譯が分りません、すると重兵衛殿は「ア、今朝
 もまたく頼みに参った者がある金三「へーエ、矢張り曾我の兄弟で
 ござりまするか重兵「イヤ、然うではない、今朝参ったのは、態々外
 國からやつて来たのだ、彼の玄徳なる者が、關羽、張飛の兩名を従
 へ、吾れは這回魏の曹操を相手にして、戦争を致したいと思ふ、そ
 れに就いて臥龍孔明なる者を招くと雖も、何を言ふにも此奴雪中を
 願ひ、容易な事では出掛けて来ぬ、依つて關羽、張飛なる者は、腕
 前が柔弱であるから、是非とも何うかお仕込み下し置かれたいと
 斯う申して、玄徳なる者が態々乗込んで来て頼んで居るのだが、如
 何ぢや、これ等の者に教へてやつても構ふまいか」長谷川金三郎呆
 れ返つて仕舞ひました、曾我物語や三國志を引出して、真面目に仰
 しやつて居られるのでございませぬ、それは至極お宜しうございませ
 んと言つたところで、時代が違ふから、そんな者は來さうな事はない

妙な事を仰しやると、ますく呆れ返って居りますると重兵、コリヤ
 長谷川、豫て承はり居ったことであるが、伊豫守義経は八島松の浦
 の合戦に、八艘飛といふものを致したといふ事である、予も一つ義
 経に負けないやうに、八艘飛といふものを致して見せると、一鎧を持
 て驚いて仕舞った御家來、態々蔵から鎧櫃を取り出して、重兵衛殿
 の前に持つて参りますと、鎧櫃の側へ御寄りになりまして、忽
 ちこの鎧を着用なさいます、至つてこのお方は甲冑の着方を、
 不審から心得てお在で遊ばし、なか／＼お上手でございまして、
 の早着名人といふのは、このお方でございませう、また徳川家に仕
 へました中で、戦場であつたといふのは、この早かつたといふのは、彼
 大久保彦左衛門でございませう、この仁と重兵衛殿と鎧の着競をし
 しても、負けた事はないといふお方でございませう、大体大久保とい
 ふ仁は、鎧を着けるのは随分早い方でございまして、元和元年彼の
 夏陣の砌りのことでもございませう、家康公も然う始終闘はかり

して在らっしゃるものではございませぬ、また休戦の折は、少しは
 皆々に戦勞を休ませることもございませぬ、その時には家來の鎧々甲
 冑を脱いで、正敷裸体になつては居りませぬ、とこゝろが大久保彦
 左衛門は、然うではないので、陣中に居まする時には、禪襦一干と
 いふ、全裸体で控へて居ります、所へ折々廻陣者がやつて参りま
 するから、正敷どうも裸体で挨拶をするといふ譯にも行きませぬ、
 然ういふ場合には、彦左衛門はなか／＼狡い方で、茶張を致してご
 さいますその際に来て、裸体の上からテロツと兜だけを着まして、
 幕の間から首だけを突出し、身体は幕で隠しながら彦左、これは御陣
 中見廻り、御苦勞さまでござる」と挨拶を致します、依つて陣廻り
 の方々も「どうも大久保はよく心得たる者である、この暑熱い砌り
 ゆゑ、兜ぐらゐは脱いで居たら好からうに、なか／＼行儀正しい者
 である」と皆々感心をして、大御所公にこの事を申し上げますと、

家康公も大きに御感心を遊ばして、早速大久保を御招きに相成り、
 家康彦左、其方は陣中休息の砌りも、兜を脱いだ事はないといふの
 は、感心なことである、賞め遣すを彦左何う仕つりまして、この暑
 いのに、兜を着て居て堪るものではござりません、戦場とは違ひま
 して、休戦を致し居りまする間は、少しは身体に風を入れませんか
 身体が積まません、それで私は素裸体で、襦袢一干で涼んで居りま
 するど、廻陣者が廻つて参りましたから、嫌なく兜だけ着まして
 幕の側に参り、幕の間から首を出して、挨拶を致しましたので「家
 康公は此言を御聞きに相成つて家康それは彦左、可かぬではないか
 何うも裸体とはひさい、何時何處に合戦が起らうも知れぬ、その時
 に汝は如何する胸算ぢや彦左左様でござります、揮りながら、折掛
 りの太鼓が、ドンとなりましたれば、直さま鎧を着用いたして御覽
 に入れます」と餘りの大言でござりますから家康「それでは予の目通
 で鎧を着けて見よ」との仰せ、そこで彦左衛門はスツカリと鎧を脱

いで仕舞ひまして、これを鎧櫃に納め、襦袢一干となりましたが、
 彦左先づ此處に私は斯う坐つて居りますから」と控へて居る、そこ
 で今大鼓が鳴ると、ソソツといふので彦左衛門、突起き上るや否、忽
 ち鎧櫃の側に駐看けまして「まッこの通りでござります」と見て居
 るうちに、手早くその兜を身に纏ひましたが、その早いこといふ
 ものは、當今なれば物の二分間とはかゝりません、矢張り當今の兵
 隊さんでもその通りで、第一朝起きますと、服を身に着けますにも
 恐ろしくいたして居りまするやうなことで、素破といふ時に間に
 合ひません、假令袴下或は襦袢一枚になつて、寝台の上に轉がつて
 居りましても、不時点呼などのあつた時には、ハッ、ッ、些時の
 間に被服を纏ひます、それは熱れて來ると、なか／＼早く出來ま
 す、昔ば當今の被服とは違ひまして、或は籠手歴當又は腰甲、
 武者草鞋、兜を着ますまでの間には、随分手間の取れたものでご
 ざいます、然るに彦左衛門がそれを着けます早さと云ふものは目

にも遮らぬばかり、槍を小脇に抱込んで彦左サア御前、これで押出しませれば、最う大丈夫でござります」家康公はこの体を見て、大さきに御威心をなさいました。家康成程、汝は鎧を早く着けることには妙を得て居る、其方だけは陣中裸体を免してやる」と仰せられまして、遂に裸体御免といふ、随分我儘な方でござりましたが、その時分のこともゆゑ、正賦罰金も取られません、が、この大久保彦左衛門と鎧の着競をなすつて、負けたことはないといふ位、この重兵衛殿でございますから、鎧を着用なさいまするのは、なか／＼解かなものでございます、さて鎧を身にお着けなさいますると、槍を持つてや金三郎、立派なものであらうが、金三ハ、ツ、なか／＼御前、お立派なことでもござります、重兵衛一ツ子の前に向つて見よ、槍玉に上げてるものではござりませぬ、重兵衛、弱い奴ぢや、向ふことは出来ぬか、ハ

ハ、ハ、ハ、伊豫守義経が八島榎の浦の合戦に、八艘飛を致したといふのは、先づこのやうなものであらう」と槍を小脇に抱込んで、一後敷のうちを彼方此方と飛廻るといふ、薩隈り始末にいけません、後には罪も科もない者を「無禮者めがッ」と仰しやつて、お手討になる者も出来るといふやうな有様でございます、最う然うなると、明けても暮れても「乃公は名人だ、乃公はぬらい、天下に於て此方に尋く者はあるまい、難れでも予を打込むといふ者があるなら出て来い」と、暴れ廻るといふやうな次第でございますから「これは全く餘り武藝に固執つて、乃公は阿父上から見ると、遙か武藝は勝つて居ると、斯ういふ者へから起つての發狂であらう」と御家來方も噂を仕合ひました、御父但馬守殿は、殊のはか御心配をなさいまして「氣狂も獨りでは狂はぬ、餘り彼れに逆らひ、武藝なぞの話を致したりすると、尙發狂が増るであらう、これは寧ろ閉籠めて仕舞ふが好からう」と思召したから、そこで伴つてこの重兵衛殿を駕籠に載

三 十 六 番 斬

せまして、ヒョリッとして鏡を下して仕舞ひ、遂には大和國正木阪へ送
りまして、薄間處のお座敷の裡に押籠めて仕舞ひました、是に於て
重兵衛殿は全く發狂といふ事に定まつたのでございませぬ、然るにそ
の當時品川の東海寺の澤庵禪師と仰せられます、徳川の殿中には、矢張り南光坊
天海僧正と同様の御仁でございませぬ、これ、將軍家の御異見番の一人と
致して、老中を呼捨てになすつたといふ位のお方でございませぬ、
所謂「蛇は寸にして人を呑むの兆あり、類伽鳥はその啼く聲諸鳥に
勝る」といふ譬喩の通りで、この澤庵といふ方は、但州勝福寺の
希先和尚のお弟子でございまして、御幼少の時は秀喜と仰せられ
ました、が、子供の時分よりその才智の勝れ居りました事は、彼の京
都紫野大徳寺の一休禪師に均しい所のお方でございませぬ、依つて
希先和尚も彼れが才智には、度々舌を巻いて、御威心を遊ばしたる
ことでございませぬ、何うも秀喜の器量の底といふものが分りませぬ

三 十 六 番 斬

頓智なせは中々勝れて居りますから、一應彼れを困らしてやらうと
いふ思召しにて、或日のことでございませぬが、希光「コソ、秀喜、
ナエツと来て呉れ、秀喜、ハイ、阿師匠様、何か御用でござりますか、
希光他でもないが、彼の向ふの御立に描いてある虎めが、這出して
来をツた、私が今食事をしやうと思つて居ると、膳の側にやつて來
て、これを見て呉れ、菜の物を悉く彼處が喫べて了つたのちやが、
時々彼の虎めが悪戯を爲るのちや、其方太儀であるが、彼の虎を
縛つて、何處ぞへ連れて行つて、捨て、來て呉れぬか」と、何と答
へるであらうと思つて、眞面目腐つて仰しやると、秀喜はこれを承
はりまして、少しも驚いた顔容は致しません、併し大概な者なら、
「お師匠様、好い加減に人を馬鹿にして置きなさい、盡に描いた虎
が出て來て、膳の上に載つてある菜の物を喫ふなんて、そんな馬
鹿な事がありますものか」と、直に左様な答へも致す所でございま
すが、秀喜は然うではございませぬ、秀喜、ハイ、畏まりましてござり

ます」とお踏を致しまして、ドン／＼と葦所の方へ飛出して行きま
すから「ハア如何爲をるであらう」と、ワツと待って在らッしやる
所へ、懸て荒縄を一ト筋提げまして、天秤棒のやうな物を携へてや
ッて参りましたが、その身は向顔巻を致して、裾を端折り上げ、繩
を持ってグツと身構へを致しまして、秀喜阿師匠様、これから私が彼
の虎を縛つて御覽に入れませうから、あなた御面倒でござりますが
彼の鐵からチヨツと此處まで、この棒を以て虎を逐出して下さいま
せんか希光何だど、この棒で逐出せッ」和尚様も驚いて仕舞つた、
「人を馬鹿にして居やアがる、なか／＼その小僧、酔でも蒟蒻でも
行かない奴だ」と呆れましたが、却つて御自身は閉口込されました
のでございませす、盡に描いた虎が逐出せらるかと言へば、逐出せぬ
のが縛られるかといふやうな理屈を持込まうといふ、年齒にも似合
はぬ恰かな小僧でございませす、希先和尚は御自身から言出した事
でございませすから、正敷それはいけぬども言へません希光、コッヤ／＼

そんなに騒がないでも可い、先刻は菜の物を喫つたが、今は如何や
つて温和しくして居るから最可い、併し若し暴れ出したら、其方
に吩咐けて置く、その時は縛つて呉れるやう、それまでは如何して
置くが可からう秀喜、委細承知いたしました」と莞爾笑つて細と棒を
持つて、その場を立去らんと致します、すると希先和尚は拍手を
ホンと打ちまして希先ア、秀喜や、いま私が斯うやッて拍手を打ッ
たが、お前は中々恰かな者であるから、これは右の手が鳴つたのか
左の手が鳴つたのか、當てゝ見るが可い」とすると秀喜は、返答をせ
ず、チヨ／＼と驅出しまして、取合の唐紙を開け、懸て敷居際
に立止まりましたして秀喜阿師匠様、あなたの仰しやつた返答は、直に
私は致します、けれども私は斯うやッて敷居の際に足を二本列べて
立ッて居りますが、何方が先に出来ますか御存じでござりませすか」オ
ヤ／＼此奴アア仕様のない奴だと思召したが、禪家ではよくこの
空論といふので、詰らない事ではございませす、斯う云ふ事を問答

に致します、これは所謂頓智で、その場で手取早く答へを致します
 る者を以て、勝利と致しますするやうな譯合でございませ、希先和尚
 は子供だと思つて相手にしますと、却つてその大人が弄られるやう
 な形で、何時も師匠はこの秀喜の爲めに閉口込されるやうな事で
 さいました、果せるがな、後には天晴れ名僧智識となられ、遂に
 品川東海寺をお預りになりました、澤庵禪師と仰せられましたので
 ございませ、悟通を開いてお在でなさるから、別段貴人高位の前に
 出ましたからと言つて、ヒョコスカ頭を低げて阿諛るの、又非人乞
 食の前だからと言つて、汚口を利きなさるの何うのといふ事はござ
 いません、貴人であらうが下様であらうが、少しも異つた事はない
 といふお方でございませ、當時は徳川三代の御世と相成りまして、
 澤庵禪師も屢々御登城の上、家光公の御機嫌を伺はれますことと
 さいませ、だが氣の向いた時には、假令半年が一年でも、御登城を
 するが、氣の向かぬ時には、假令半年が一年でも、御登城なすつた事

はないのでございまして、随分氣儘なお方でございませましたが、何
 天下に事ある時には、矢張り天海、大久保同様に御出仕になりまし
 て、その御評定の席に列なられましたこととございませ、今は六
 十の坂を越えてお在で遊ばしますが、誠に壯健なことで、今日し
 も「フ」と殿中へ御出仕を遊ばした、別段出仕をなさると言つて
 も立派な乗物に乗つて、數多の供方を伴れて、行列を正してお出で
 なさるといふやうな事はないのでございませ、ホソの鼠色の御衣類
 には、柿色の法衣を着けられまして、その上には誠に粗末な麻の
 袈裟をかき、水晶の珠數をお提げなすつて、藁草履を穿き、ホソ
 と供をも伴れず只一人、御登城をなさいますのが例で、ところが
 今殿中へお出でになりますと、お坊主衆は驚きました「さては東
 海寺の澤庵禪師のお出でであるか」と、お坊主は早速前後を警固い
 たしまして「ソイヤ」といふ警蹕の聲をかけ、いま長廊架へかゝ
 ってお出で遊ばす、すると今日しも將軍の御目通に出でまして、御

斬 番 六 十 三

稽古の相済みましたるものと見ゆ、いま柳生但馬守殿は殿中を退ら
 んとして、この廊架へかゝつて参りまきと、一向ふから「ソイヤ〜」
 ツ」と警蹕の聲をかけながら、二人のお坊主が先を拂ひ、その後よ
 り徐々御出でになる姿を見ると、東海寺の澤庵禪師でございますか
 ら、ハツと柳生殿、お廊架の傍に寄りまして、平伏を致しました、
 禪師はこれを御覧に相成りますと、膝で三代公より何か御内命を蒙
 つて居られなすこととございますから、丁度好い所でお出會つたど
 思召し澤庵ホ、但馬、久しく會はぬことであつたが、今日も將軍家
 の御儀に出て御稽古であるか、大きに御苦勞ぢやのう、但馬これは禪
 師に於かせられまするか、驚しき尊顔を拜しまして、但馬身に取
 恐悦至極にござります、澤庵「イヤ、お前も變りがなくて結構々々」と
 言ひながら、熱々と但馬守殿の顔を御覧に相成つて居りましたが、
 澤庵「ア、如何かしたか、非常に顔色が悪いではないか、何か心配の
 事でもあるのか、但馬何うも恐れ入りましてござります、思ひ内にあ

斬 番 六 十 三

れば色外に顯はるゝと云ふの例ひ、實はこの節少と心配の儀がござ
 りますので、それで自然と外面に顯はれたものと見えます、イヤモ
 ウお恥かしいことにござります、澤庵「ホ、ウ、如何かしたのか、但馬御
 意にござります、實の所は悴重兵衛が、この程より發狂いたしまし
 て、取留めも付かぬ事を申し、臣下の者を手討にまで及ぶといふや
 うな亂暴な所業でござりまして、それゆゑこの節では、大和の正木
 坂の陣屋に向けて押籠めて仕舞ひました、私も最うこの年積にな
 りましたことで、當年は是非隠居を致して、彼れに道場を任さうと
 心得て居りましたところ、左様な次第になりまして、誠に困つて
 居るのでござります、そのみがか心に懸りますから、自然と面体
 にも顯れましたやうな次第でござりまして澤庵「ホ、ウ、それは誠に
 氣の毒なことぢやナ、彼れは幾歳ぢやナ、但馬「ハ、ツ、當年二十八歳
 にござります、澤庵「未だ若いナ」言ひながらも、お法衣の裡に手をお
 入れ遊ばして、ハツと何か指頭で繰つてお在で遊ばした、澤庵「成程

こりやア慢心でもしたのかナ 但馬御意にござります 澤庵にもそれ
 なら治らぬ事もないやうぢや、そんな心配しなさんナ、ア、愚僧
 がチヨツと行つて治して進げやう」呑氣な坊さんもあればあるもの
 で、チヨツと行つてやると言つても、當今なればそりやアチヨツと
 でございます、褌衣の儘で流車に飛乗つたら、直最う翌日は行かれ
 るといふやうな勘定でございます、その時分には流車の便利もご
 さいませす、何を言ふにも道中を足に任して歩いて参るのですから
 なかく、手間の取れたものでございまして、荷且にも江戸表から大
 和國正木坂までと見て見れば、何うしても十日以上十四五日はか
 ります、それをチヨツと行つてやらうといふのです、全で隣家へで
 も行くやうな氣になつてお在で遊ばす、但馬守殿も禪師の御氣性は
 知つて居られますから「何分宜しくお願ひ申上げる」と頼んで置い
 て、その日は下城に及びました、澤庵禪師は將軍御目通に出まして
 先づ御機嫌伺ひの相濟みまして後、これも東海寺へ御歸りに相成り

ました、この澤庵禪師が態々大和國正木坂へ乗込んで参つて、柳
 生重兵衛殿に御面會の上、表向き劍道極意の問答をなして、彼れの
 病氣を治すと見せかけ、其の實陣屋に暫く滞在中、密かに將軍家の
 御内命を傳へて、病氣全快の上、一度江戸表へ歸らせるといふお話
 してございます、开は一ト息御免を戴りましたして伺ひます。

第 三 回

扱て其の翌日のこととございまして、澤庵禪師は朝のお勤めが済ん
 で了ひますと澤庵これ「誰れか居らぬか」とお呼びになりますと
 お弟子は夫れに違つて参りまして「弟子」お師匠様、御用でござります
 か澤庵「ア、今日は、一寸これから大和の正木坂まで往つて来る
 から、何うぞ留守中を頼む」又始まつたと思ひました、お弟子の
 雖も慣れて居ります、氣に適いたれば、一寸と云つてお出ましにな
 り、随分長い時は物の半期も廻つてゐらつしやると云ふやうなこと

は度々あるのでございます。弟子「何の御用かは存じませんが、委細承知いたしました」とお弟子達が寺を預かることに相成りました。ところが相違ち麻の柿色の法衣を召されて、蓑の杖、網代の笠と云ふ扮装でございまして、草鞋穿き、頸には頭陀の袋を懸け、やがてトホ／＼とお出ましました。この道中筋には別段に變つたお話もございませぬ。日敷を重ねてやう／＼のことに大和國は正木坂へお出でになりましたが、一万石の市街ではございませぬが、お城とは違ひまして、立派な御陣屋でございませぬ、いま御門へお掛かりになりまして、被つて居られました網代の笠を脱つて、メイト門内へ這入らうと致しますと門番「コリヤ、坊主待て、澤庵「何ぢや、何か用かな、門番「、一見れば其方は怪しげな風體をいたして、案内もなく黙つて通ると云ふことがあるか、全體汝は何者だ、澤庵「、何者だ」と云つて、お前が見て分らぬか、圓い顔で、身に法衣を纏つて居つたら、坊主と云ふことは分りさうなものぢや、門番「黙れ、それは分

つて居るわ、澤庵「分つて居るのなら別に問ねぬかて宜いではないか、門番「ヤ、理窟を云ふな、理窟を、して何處から参つたと云ふのだ、澤庵「私か、彼方から参つた、門番「變な奴だな、汝は、何の用で全體参つたのだ、澤庵「初めから爾う云へば宜いのぢや、さうホ／＼云ふな、用があればこそ出て来たのぢや、ア、他でもないが、江戸の方から重兵衛が此方に来て居る筈だが、重兵衛は居るか、門番「控へる、野方途なことを申す奴、若殿様をつかまへて重兵衛とは何だ、呼び捨てになさ仕やアがつて澤庵「、そんなに怒るな、重兵衛だから重兵衛と云つたのぢやが何うした、重兵衛をどらへて、まさか九兵衛とも八兵衛とも云はぬぞ、門番「オヤ／＼あんなことを云つてやがる……その若殿様に何の用があつて来たのだ、澤庵「私か、私は重兵衛に是非用があつて参つたのぢや、ア、一寸爾う云つて執次いで呉れ、禪家雲水の出家が、坐禪觀法の法と、柳生重兵衛の柳生流の劍術の極意と、双方立合ひを仕やうと云ふ積もりで参つたのである、と申して

執次いで呉れ」門番も驚いて了ひました、甚るしい野方途な奴もあ
ればあるもの、何者だらう彼奴は、何うも本氣の沙汰ではない、少
し斯う發狂の氣味がある、類を以て儕を聚めるとは此の事だらう
御當家の若殿様は發狂いたして居らつしやるので、當時は此の陣屋
に在つて御養生だ、その狂人の處へ狂人が來をつたものと見ゆる、
同役、何うだ一つ此的を執次いで遣らうか、何うも事無くして御家
來方がお手付になつたこともあつたと云ふが、この坊主を一番對抗
せたら何うだらう、屹度殿様の爲めに殺られて了ふだらう、
それら宜からう」と云ふので、門番が相談の上、門番、ア一暫時それに
待つて居れ」と待たして置きました、この事をお玄關先へ執次ぎま
した、それから重役に達しますと重役「それは變な坊主が出て來をつ
た、ア一應申して見やう」と恐縮ながらソツと柳生重兵衛殿のお
ゐでなさるお居室の傍まで遣つて参りました、取合の唐紙を細目に
開いて、敷居の外に兩手を支へ重役「恐れながら申し上げます……」

とは云つたが、若しお刀の柄にでも手をお掛けなすつたら、直に逃
げ出さうと云ふので、中腰になり、前方に三分後方へ七分といふ身
柄へでございませう、重兵衛、ア一何ぢや、何用だ」そのお聲は宛ながら雷
の如く、頭と云つたら火の付くやうな頭髪をいたされまして、黒羽
二重の二蓋笠御定紋着きのお小袖、それも何時召しましたか、處々
が破れてございます、片腕を張つて、片傍の刀架には三池傳太光世
の一刀をお架けなすつと、寄らば斬らんと云ふの勢でございます、
重役「エー恐れながら申し上げます、只今御門前に禪家雲水の出家が
参りまして、恐れながら若殿様の柳生流の極意と、其の出家が坐禪
觀法の法を以て、立合ひを致したいと申して居りますが、如何取計
らひませうや、この儀伺ひ奉ります重兵衛、此方の柳生流の極意
と、坊主の坐禪觀法の法と立合ひを致したいとな、……」
ヤ、妙な奴が來をつたのう、天下の名入たる此の柳生重兵衛を、對
手に廻して立合はうとは、沙汰の限りの奴ぢや、それは大方發狂で

も致して居るのであらう。随分暢氣なことを云つて居らつしやいなす、御自身の發狂は薩張り分らぬと云ふ體裁でございますから臣下の者は驚きました。が重兵衛然らば其奴を庭前へ廻せ、予が一刀の下に斬り捨て、遣るぞ。ハッ。と答へまして御家來は、玄關の方に遣つて参ります。此方は彼の出家、門番に案内をされまして、今ま玄關前に來つて居りました。が重役「コリヤ坊主、只今御主君様へ申し上げたるどころ、庭前へ廻せと仰しやる、さ、案内をいたし遣はす、此方へ参れ澤庵左様か、それは何うも御苦勞であつたの、重兵衛は何と云つて居る、立合ふと申して居るか……ふ、それならば何うぞ案内を致して呉れ」そこで一人の近習が案内をいたして、メツとお盜所口より這入り、切戸口を開けまして、お庭前へ廻り、お椽側の端にあります履脱石のところまで伴つて参りました。禪師はヒョリと其の處に腰打掛け、やがて足を組んで坐りました。が、法衣の袖に両手をお入れおぼして、ヤツと容を端しお扣へになりました。

これ所謂坐禪の法でございます。彼の達磨大師は坐禪を組み、ヤツと坐つて居ります。こと九年の間であつたさうで、それが爲めに、お椽が腐つて了つたと云ふ、達磨には足がないと云ふやうなことを申します。が、あれは全く長年の間坐禪觀法をして居なすつたので、起つことの出來ぬやうな事になつたのださうでございます。深庵禪師は兩眼を閉ぢ、法衣の間に手を入れておぼでなさんと、その行中は、たとへ真劍を以て向つて参つても、動かさること泰山の如く、微懼もせずいたして居らつしやる。槍を以て突いて参うとも、動かさること泰山の如し、近隣から火事が出まして焼けて來ても、動かさること泰山の如し、それでは丸で焼け死んで了ふと云ふやうな勘定です。だが何しろヤツと眠てゐるやうな覺さてゐるやうな、何か斯う便ない形でございます。どころが御近習の注進に依つて、やがて重兵衛三殿殿、彼の三池傳太光世の一刀を携へ、メツと坐を起つて、ツカ、と椽側へお進み出でに相成つて、熱く、坊主

を御覽に相成ると、豫て我が秘密を御承知の澤庵禪師でございますから、さては謀し合せたる通り、將軍家よりの御密使ならんと思召したるが、其の場は「コ」までも狂人の体に持成し重兵「コ」ヤ坊主、面を掻げよ、汝この重兵衛に向ひ立合ひを致さんと云つて乗り込んで参つたのは、甚だ大胆な奴である、定めて汝は發狂でも致して、左様なことを申すものに見ゆるが、此方は天下の名人だぞ、其の予に向つて立合ひを仕たいなと云ふのは、大胆至極な奴である、全體劍道は何流を使ふのぢや、又いつれの土地に於いて修行をいたしたさ、其の修行の場所と、汝の使ふ流名を申せ」すると次の室で御家來を首め何れも唐紙越しに兩人の様子を「ヤ」と窺うて居りましたか、
 ○何うだい、若殿様の仰しやることは薩張り分らぬぢやないか、自分の發狂は分らないで、坊主に向つて發狂して居るかど云ふか問ねは、随分面白いぢやないか、何方が勝つだらう、狂人同士の睨み合ひだ、何う

なることであらうかと、堅唾を呑んで見て居りますと、禪師は「ヤ」と兩眼を見開き、重兵衛殿の姿を熱々御覽なさいましたが、成るはど是れなら親父但馬守が心配をするのも無理はない、餘ほを烈しい發狂の如く見ゆると思召し澤庵「コ」ヤ重兵衛、其方は聊か柳生流が使へるとは云ひながら、餘り大言を吐くな、今我れに向つて修行の場所を問ねたことであるが、此方は日本六十餘州廣しと雖も、何れの土地といたして廻らぬ處はない、日本は扱置き、唐土天竺に至るまで悉く修行を致して廻つたのである、成る時は流砂川にて水練をなし、又地獄へ行つたる時には、閻魔大王を首めと致して、視る目喚ぐ身、馬頭牛頭の扇を降参させたることもあつたのぢや、唐土四百餘州は廣しと雖も、廻らぬ處はない位、大抵は修行をいたして歩いたことである、又武藝十八番、弓馬槍劍は申すに及ばず、或は鎖鎌、又は薙刀、柔術、手裏劍、棒の手、總ての事を皆修行を致したことである、汝のやうに柳生流一流ばかりを聊か學び愛せしめて、

自慢を致し居るのは、取るに足らぬことぢや、當代天下の名人と云ふのは此の出家であるぞ、この一言を聞いて大きに驚きましたな、家来の銘々は何うでござるな、この調子では餘は坊主の方が、若様から見ると熱が高いやうでござるな、と袖を引きながら小聲で噂を致して居ります、柳生重兵衛殿は彼れが大言を聞くと、大にお憤りに相成りし体にて重兵衛の瘦坊主奴、身の程を知らず大言を吐くとは不埒な奴、其の儀なれば望みに任せて勝負を致して遣る、我れは此の傳太光世の一刀を以て相手をする、其方望みの品があるなら、何なりとも申せ、さ、用意を致せ、澤庵ハ、ハ、ハ、ヤッ大層な勢ひであるが、重兵衛、汝は定めて殺いと思つて居らうが、劍道と云ふものは活藝であつて、上の上のあるものぢやぞ、何處に何のやうな強い者があるかも知れない、なか、天下は廣大なものにして、汝に上超す者はないと心得て居るだらうが、汝のやうな腕前の者が向つて来て、一人と一人との勝負なら随分他に打勝つこともあるで

あらうが、其方に上超す者を兩人にて汝に向つて参つた時には、如何いたして夫れを遁れるか、その返答をいたせ、重兵衛、たどへ此方のやうなる者が兩人向はうとも、此の重兵衛は腕に覺がある、依つて是れなる三池傳太光世の名刀、抜くより早く一刀兩断、梨子割に下り斬げて了ふのは造作はないわい、澤庵ハ、ハ、ハ、それは何うも豪いな、して見ると重兵衛は天下の豪傑ぢや、だが重兵衛、天下は廣大なるものにして、兩人ならば成るはど汝が然うして打勝つかも知れぬが、若し夫れに倍して四人掛かつて来る時には、汝は如何いたして夫れを防ぐか、その返答を致せ、重兵衛、さればである、四人掛かつて参る時には、柳生流の極意の中、水月と云ふ手を以て、敵を撃取るのは造作もないことぢやわい、澤庵成るはど、して見ると、なか、重兵衛は天晴な者ぢや、なれども天下は廣大なるものにして、四人ならば夫れで宜いが、若し夫れに倍し八人掛かるときには、汝は何うして夫れを撃取るか、重兵衛、さればである、其の時は三光雷到と

云ふ手を以て、八方に斬り拂つて了ふのは造作はない澤庵成るはと
 ヤッ重兵衛は豪い、天下の豪傑だ、だが天下は廣大なるものにして
 若し夫れに倍し、十六人挑つて来る時には何うする重兵衛、されば十
 六人挑つて参つた其の時は、柳生流天地人三巻の中、柴隠れの一手
 を以て撃取るのは何でもないことぢや澤庵成るはと、重兵衛は豪い
 な、天晴なることで、感心いたす、が併し天下は廣大なるものにし
 て、それに倍して三十二人挑つたれば、汝は何うする稽りぢや重兵衛
 されば其の時には、同じ三巻の極意のうち、木の葉隠れと云ふ手を
 以て撃取るのは容易きことである澤庵成るはと、ヤッ感心なことぢ
 や、さすがは重兵衛は天下の名人であるだが、天下は廣大なるもの
 にして、三十二人なら夫れで宜からうが、若しも夫れに倍して、六
 十四人挑つて来る時には何うする重兵衛、ヤア様々なることを吐す奴だ
 其の時には真劍白刃取りと云ふ手あり、其の手を以て撃取るのは造
 作はないわい澤庵成るはと、ヤッ豪い、ア、重兵衛は天下の豪傑だ

だが天下は廣大なるものにして、若し夫れに倍して百二十八人挑つ
 て来る時は何うする重兵衛、ヤイ坊主、汝は何邊まで全體追及けて行く
 のだ、仕やうのないことを申す奴だ、百二十八人挑つて来れば、其
 の時は柳生流天地人三巻の極意を以て、腕と目釘の續くだけ、斬つ
 てく斬り倒し、万一敵はぬ其の時には、討死を致して了ふ分のこ
 とである、馬鹿なことを申すな澤庵何ぢやと、敵はぬ時には討死を
 する、ム、一、さては重兵衛、汝は何のくらゐな腕前の者かと思つ
 たら、イヤハヤ取るに足らぬ奴ぢや、汝の剣道は百二十八人と定ま
 った剣道と見ゆるな、コリヤ重兵衛、この雲水の出家なとはな、先
 づ謀略を帷幕の内、に運らし、勝つことを千里の外に知ると、彼の兵
 法にも云へる如く、一遍腕を拱いて計略を思ひ着く時には、壁へば
 茲に百万の強敵があつて、其の者一時に斬り挑つて参らうとも、先
 づ思ひが二本の指で、其の百万の強敵を一寸斯う摘むのぢや、それ
 を手の掌の上に載せ、上から手でボンと打碎き、それをフツと一吹

斬 番 六 十 三

き吹けば、忽ち其の張は粉塵埃となつて飛んで了ふが、何様なもの
 ぢや」庭の垣根の外方、お坐敷の次の室などに、ヤツと忍んで聞い
 て居りました柳生家の臣下の銘々は何れも呆れて了ひました。「何
 うだいな各々、こりやア愈々坊主の方が高か、これでは若様が負
 けるかも知らぬ」と皆々呆氣に取られながら聞いて居りますと、こ
 の時柳生重兵衛殿は故意と怒れる面地にて重兵衛殿に、「予に向つて様
 をなる悪口を致す坊主、それは汝が天晴なれば、さア速に真劍の
 勝負をいたせ、卒で此方が斬り捨て、呉れん」と既に庭に飛び下り
 んど致すを澤庵ア待て、さう何も願ふには及ばぬ、汝は先程か
 ら動ともすれば一刀の柄に手を掛け、勝負を好むやうやが、これ
 名人とは聞へぬ、所謂匹夫の勇ぢや、取るに足らぬ、總て名人たる
 べき者は、刀の柄に手を掛けての勝負を好むやうではならぬ、さは
 ど汝が名人と思ふなれば、こゝに武藝の極意と云ふものを悟る歌が
 ある、汝その極意の歌を存じて居るか、何うぢや重兵衛なに、馬鹿な

斬 番 六 十 三

ことを申すな、我れ天下の名人でありながら、それしきのことを知
 らいでならうか「山川の流れに木の葉沈むとも、身を捨ててこそ浮
 む瀬もあれ」澤庵ハ、そのやうな小さなことでは役に立たぬ重兵衛
 然らば「さまぐ」と教への道も多けれど、撃込むところ真の一刀」
 澤庵「イヤ、それでも小さい、左様なことが武藝の悟りとなるか、
 今こゝに此方が武藝の悟りと云ふものを開くと云ふ、その眼目の歌
 を書いて取らせる、汝に夫れが悟れるか重兵衛なに、白痴たことを申
 すな、汝如きの坊主、たとへ何のやうなことを認めやうと、分らぬ
 やうなことがあるか、何時でも悟つて見せる澤庵ハ、その口を忘
 れるな、アアこりや、誰を来いよ」オヤ、大變なことを云つてや
 がるぞ、次の間で家來は驚きました、應てそれ一人怖々ながら
 出て参りました家來ア何ぞ用か澤庵ハ、料紙を持って「甚るしい
 野方途な坊主もあるものと思ひました、やがて料紙硯を持つて参
 りますと、怯めず臆せず「ア」と其の處へお認めになりました一

首 澤庵、重兵衛、武藝の極意を悟ると云ふ眼目は是れぢや、汝分
 るか何うぢや重兵衛何と猪牙才な」と其の紙を取つて讀んで御覽なす
 つたが、薩張り分りませせん、妙なことを認めお出しなすつたので
 「たゞすむな行くな戻るな居坐るな、寝るな起さるな知るも知らぬ
 も」作むなと云つたら、立つて居ては悪いのでございませぬ、行くな
 と云へば行つても悪い、戻るなと云へば戻つても悪い、居坐るなと
 云へば居坐しても悪いのでございませぬ、寝て起さても悪い、最終
 には知るも知らぬも、サッぱり何だか譯が分りませぬ、さしもの重
 兵衛殿も困つてお了ひなすつた澤庵何うぢや重兵衛、分るか其の歌
 が汝に、ムウ重兵衛、ヤッ印答は成り兼ねる、篤と考へて置いて返答し
 て遣る澤庵、ハ、ハ、情ない奴ぢや、併し其の歌が分れば可し、若し
 分らぬ時は、汝の首は胴に付けて置かぬぞ重兵衛、なに猪牙才な、ヤア
 誰れかある、この坊主を遣さぬやうに致せ」と夫れ儘、ツと起つて
 這入つてお了ひなさいませした、これ所謂禪家の悟りから出ました、

道歌と云ふやうなもので、一畢竟する道理上を歌に縮めまして、これ
 で對手を窮らせるると云ふやうな形でございませぬ、併し幾分か此の歌の意味を考
 へさせ、本人の氣を其の方へ轉らせまして、この發狂を直して遣る
 といふ表面上の禪師のお計ひ、されば重兵衛殿の立去りました跡、
 澤庵禪師は悠々と椽側から昇りになりましたが、これが爲めに遂
 に重兵衛殿の御病氣は全快といふことになり、一度江戸表へ立歸つ
 て、暫らく時節を見合せて居りますら、又々病氣再發と見せか
 け、何處までも重兵衛は狂人なりと、まんまと世人を欺いて置いて
 さればいよく、諸大名の心底を探らんものと、江戸表を發足に及ぶ
 といふ、重兵衛殿が苦心の上、に苦心を重ねられますお話し、开は
 一寸一息御免を敷きまして、次回に委しく申上げます。

第 四 回

さて前回に伺ひましたる如く、重兵衛三殿殿は彼の澤庵禪師から一
 首の歌を認りて差出しましたる紙片をば手に持つと其のまゝ、御自
 身のお居室へ引取つてお了ひに成りました、するど此のとき次の室
 に在つて隙見をして居りました家来の輩は、何れも大きに驚きまし
 て「大變な坊主が乗込んで来たぞ、彼の様子は何うだ、何うやら坊
 主の方が問答に勝つたらしい」と皆々がヤ／＼云つて居ります、
 澤庵禪師は左様なことには少しも頓着なく、お椀側に腰を掛けられ
 まして、自ら草鞋の紐を解き、そのまゝ椀側からオイとお上りに相
 成りまして、一室へお通りになると、ヒタリと其の所に着座を遊ば
 したが、忽ち膝組をなして、矢張り座禪を遊ばしたまふ、法衣の袖
 の内へ手を入れて了ひ、兩眼を閉ぢてお扣へに相成りましたが、全
 体何者とも相分りませんから、變な坊主もあればあるものと、家
 の輩は可怪しく思うて居ります、と、このころが最う其のうちに午
 過ぎといふ頃はひに相成りましたが、家来の輩は誰れ一人として禪

師の側へ参りません、するど禪師はやがて兩眼を見開いて、少暫四
 邊を見廻してお在で遊ばしたが澤庵、ユリヤ誰を居らぬか、来いよ、
 誰を参れ、この聲を聞き付けて驚いたのは柳生の家来「オヤ／＼坊
 主が大變なことを云つて居やアがる、何とどうだい、主人が二人出
 来たやうな鹽梅式だ、誰れか行つて見る」といふので、やがて一人
 が其所へ出掛けて参りました、○何だ、何か用があるか、禪師は之
 れを御覽に相成りまして「澤庵左様だ、用があればこそ呼んだのであ
 るが、全体汝達は何刻だぞ心得て居る、最う午刻が過ぎて居るでは
 ないか、なせ時分が来たら、此方から催促をせんでも食事を持つて
 来ない、早々食事の用意を致して持つて来い」大變に何うも野方途
 な奴だとは思ひました、家来は「實は只今食事を拵へて居るので
 あるが、して御出家は何か、精進物でなければ可かぬであらうな、
 澤庵左様だ、精進物に致して呉れれば結構だが、然うするのが面倒
 ならば、魚類でも苦しうない、人間の食ふ物なら何でも喫ふぞ、○」

「ヘー……」 妙な坊主もあればあるもの、思ひながらも引取りま
したが、やゝ暫時経ちまして、膳部を其所へ持つて参りました、禪
師は早速食事を致されましたる後、澤庵、ア、重兵衛は何を致して居る
定めて先程の歌を考へて居るであらうな。○左様だ、一室に在つて
一生懸命に彼の歌を考へて居らつしやる。澤庵「ハ、左様であるか」
指を屈つて何か斯う考へておるで遊ばしたが、澤庵「まづ今日から五日
だ、五日ばかり考へて居ると、彼れの發狂も癒ることであるから
左様相心得よ」と仰せられますと、柳生の家來の輩は、
「ハア變なことを云ふもの」と不思議に思つて居ります、話頭轉
つて此方は重兵衛三蔵でございませうが、豫て申し合せてあることで
ございませうから、禪師の書かれたる歌をば前にお置きなすつて、
ウム〜と唸りながら重兵衛行むな、行くな戻るな居坐るな、寝るな
起きるな知るも知らぬも……ハア妙なことを認めたまもの」と餘念な
く其の意味を考へて居られます、そのうちにお刻限になつて來

ますると、家來はソツと唐紙を開いて膳部を持つて這入らうとしま
するが、重兵衛「コリヤ〜」開けるな、閉めて置け、予は考へ事を致して
居るのだ、開けられると心が散つて宜しくない」とあつて、なかく
食事どころの騒ぎではございませぬ、たゞ一心不乱に此の事をのみ
考へて居らつしやいまする様子、其内にモウ夕景になつて來ました
が、幾ら忠義の爲めとは云ひながら、食はず飲まずに居らつしやる
から、何分腹が空つて堪りませぬ、重兵衛「コリヤ〜、誰を参れ家來ハ、
ア、御用でございませうか、重兵衛、握飯を持つて参れ、そして燭を
點けよ」やがて家來は燭を点け、握飯を持つて参りますると、重兵衛其
處に置いて去け、跡を閉めて置けよ、又々餘念なく考へて居らつし
やる、そのうちに愈々腹が空つて堪らぬやうになりますと、右の握
飯を喫べ、尙もお考へなさいませうが、段々夜が深けるに従ひ、睡
氣が催したものと見ゆ、遂に其のまゝコロリと横になつてお寢みに
なり、さて翌日になつて目が覺めますると、又々右の歌を前に置い

斬 番 六 十 三

て、一生懸命に考へ、腹が空つて來ると、握飯を吩咐けて、それを召上つては又々考へると云ふやうなことに、殆ど五日の間といふものは寢食を忘れて考へておろでになりましたが、大體重兵衛殿が發狂をされたと云ふのは、當時天下の中に於て、我れに敵對する者は豈夫あるまいと云ふ慢心からでございまして、畢竟明けても暮れても武藝の事のみを考へておろしやいまして、それが爲に遂に精神が錯亂いたしたと云ふことに我うてございすから、それが縦合五日の間でも、武藝の事を全然忘れて了ひ、一心不乱に歌の意味をお考へなすつて、其の方へ心を轉じた爲めに、追々と氣が静まつて、遂に眞の狂病が治つたと云ふやうに持て成されました、丁度五日目のことでございまして、重兵衛殿はお室屋に在つて、故意と怪訝な顔を裝り重兵衛、コリヤ、誰ぞ居らぬか」と呼ばはりますと、次の室からソツと唐紙を開けて家來「ハ、ツ、お召しでござりまするか重兵衛、其所では談話が出来ぬ、苦しうない此室へ退入れ」家來も十

斬 番 六 十 三

分用心を致して居ります、迂乎り傍へ近寄つて、若し手討にでもなりましたら、詰まり殺され損と云ふやうな形でございすから、容易に進めません、殊に今日は一層變な顔をしてお在でになりますから、お手討になりはせぬかと思ひ、唯モロくするとのみで、能う這入りません重兵衛苦しうない、此所へ參れ」主人は苦しうないか知らぬが、此方が苦しうないのでございす、やうく其室へ這入りまして、尻を盛立て居ります重兵衛其方に尋ねるが、當家は全體何處の屋敷である家來「左様でござります、此家は大和正木坂の御陣屋にござりまして……重兵衛、ハ、ア、さては國許正木坂の陣屋であるか、家來御意にござります重兵衛して、予は何が爲に斯様な所に參つて居るのぢや家來「恐れながら申し上げます、主公には先頃より御發狂おとばし、それが爲に既にお手討等もありまして、大體様は殊の外御心配を遊ばされ、遂に當正木坂の陣屋にお送りになりました、吾

々に主公の御看護仰せ付けられたる次第でござります重兵衛何と申す
 然らば予は發狂いたして、それゆゑ國許に送られたとあるか……ア
 ・面目次第もない、實に我が身ながら耻ぢ入ることである、併しな
 がら安心を致して呉れ、最早や病氣は全快いたしたることであるぞ」
 家來は之れを聞くと大に悦びまして「して見ると此の間から坊主が
 彼此云つて居つたのは、皆眞固であるか」と非常に驚きました重兵
 衛これに就いて其方に尋ねるが、予は四五日以前のやうに心得るが、
 病中ながら一人の出家と問答を致したやうに思ふ、左様なことはな
 かつたか家來御意にござります、丁度五日以前、一人の出家が参り
 ました、が、主公は其の者と御問答の末、取送すなど仰せられました
 に就いて、只今以て一室に閉ぢ籠めあります重兵衛、一その御出
 家こそ實に天晴れ尊き御名僧ならん、ア何は兎もあれ、今一應改
 めてお目に懸るであらう」とありまして、そこで湯に浴つて身體を
 深め、衣服を更めましたる上にて、彼の禪師がお控へに相成つて居

りをする居室へ遣つて参りましたが、出家は片傍の柱に凭れ、坐禪
 を組み、法次の袖の間に手を入れ、兩眼を閉ぢて、アツと控へて居
 られます、この體裁を見ると、重兵衛殿は遙か下坐に着いて兩手
 を支へ重兵衛アイヤ御出家、柳生重兵衛でござります」この聲に禪師
 は兩眼を見開き、アツと重兵衛殿を御覽に相成つて澤庵オ、重兵衛
 さては病氣が全快いたしたか、何より以て結構々々重兵衛ハ、ア、お
 蔭を以ちまして病氣全快仕りました、これまで長らくの
 間、我が身の事も薩眼り覺はしませんでござります、これまで長らくの
 見れば、實に面目次第もなきことでもござります、就きましては、毎
 公は天晴れ御名僧と心得ますが、何卒御名前のほをば仰せ聞け
 られませうなれば、有難き仕合に存じ奉ります、澤庵イヤ、名前を
 問はれて名乗るほどの者でもないが、實のところは此の間久々に
 上様に御目通りを致さんとして、殿中へ伺候いたしたる砌、汝の父
 但馬に面會を致したのだ、ところが非常に但馬の顔色が悪い、依つ

て何うしたと云つて譯を聞いて見ると、汝が發狂いたしたに就いて
 非常に心を痛めて居るとのことであつた。依つて兎も角も予が参つ
 て癒して遣らうと云ふので、能く此處まで出掛けて参つたやうな次
 第である。愚僧は品川東海寺の澤庵であるぞよ」と仰せられました
 この一言を承はると、重兵衛殿はハッとはかりに驚きし體にて、忽
 ち後方へ飛び退つて重兵衛殿は品川東海寺にござる澤庵禪師にあら
 せられまするや、知らざることに申しながら、存外の失禮を仕り
 御無禮の段平に御容赦のほどを願ひ奉ります」と申す中々この澤庵禪
 師といふ方は、前にも伺ひました如く、御老中をも呼び捨てに遊
 ばすと云ふ、大變な勢ひの坊様でございますから、柳生重兵衛殿は
 比目魚のやうに平伏してお了ひなすつた、これを見ると云ふと、柳
 生の家來は皆々驚きました、主人の重兵衛が斯う比目魚の如くにお
 なりなすつたから、家來の面々は夫れから二三疊も後方へ退つて、
 今度は木葉魚の如くになつて、皆々其の處へ縮かまつて了ひました

まさか其様なこともありませんが、家來の獲も同じく後方で平伏
 をしながら、〇何と昔さん何うだい、通常の出家ではないと思つて
 居たが、これが東海寺の澤庵禪師様だよ、△サア御者も最初から
 變に心得て居つたのだ、何うも唯の出家ではないと思つて居たんだ
 が、道理で時々御法衣の脇から後光が輝して居つた……〇オイ、
 虚言を吐け、まさか其様なことがあるものか」と頻りに低聲でガヤ
 ンと呻をして居りました、そのうちに皆々これまでの御無禮を詫
 びると云ふことに相成りました、すると禪師は「ア、何うやら
 汝の病氣は癒つた様子ぢや、餘り此の後は慢心をするなよ、重兵衛殿に
 何うも恐れ入りましたとござります、澤庵イヤ、何より以て結構々々、
 最早や汝の病氣が癒れば、我れは當地に在つても用のない身である
 それでは是れにて歸らう」と云ふので、様々お止め申し上げるのを
 禪師は更にお聴容れなく、早々暇を告げて御出立といふことに相成
 りました、今は重兵衛殿も致し方なく、然らば初めて粗茶一服献じ

参らせたしとあつて、一室に伴ひ、重兵衛殿と唯御兩所にて御茶事
がございませしが、繼て御出立と云ふので、重兵衛殿はお玄關まで
お見送りになりましたが、禪師は御自身に草鞋を穿いて、愈々御出
立おそばされんとする時、玄關式臺へ飛び下りて参つた重兵衛殿、
「アイヤ禪師、一寸お止まりを願ひます、澤庵何ぢや、何を意向があ
るか、重兵衛左様でござります、侍ひな、行くな戻るな居坐るな、寝る
な起きるな知るも知らぬも」と云ふ、この武藝の極意を悟ると云ふ
お歌でござりまするが、此の中より私も一生懸命になつて考へまし
たが、何うも其の意味が相分りません、何卒極意を悟るところを、
お聞かせあらんことを願ひ奉りまする、これをお聞きに相成ると、
禪師はお笑ひなすつて、澤庵重兵衛、汝は猶だ夫れを氣に致して居る
か、あれは何うか汝の病氣を癒して遣りたいと思つて、はんだの時に
取つての戯れ同様、マア謂はゞ禪家の道歌と云ふやうなもので、全
く其方の氣を轉じさせるが爲に認いたので、此方とても些しも譯が

分らぬ」と仰しやいました、背後に控へた柳生の家來は、之れを聞
くと驚きました、それでは幾ら主人が考へたどて分りさうな筈はな
い、奇いた御當人でさへ分らぬものを、妙な坊様もあればあるもの
と、皆々呆れ却りましたが、されば澤庵禪師は、其のまゝ品川の東
海寺へお歸りに相成りました、正木坂の陣屋に於きましては、やう
く主人の狂病が癒つたと云ふので、臣下の面々は大きに悦びまし
て、早速江戸表の大殿へ此の事を注進に及びますと、直に江戸か
らお迎へが参りました、重兵衛殿は茲に眞面目に相成つて、江戸表
へお歸りに相成りましたが、その後一寸半季ばかりと云ふものは、
何の事もなかつたのでござります、ところが重兵衛殿は、又々病氣
が發りました、と云つて、別段無暗に暴れ倒すの、裸體で戶外へ駆
け出して行くの、又他人を撲つたりなぞするかと云ふに、そんな事
はないのでございまして、唯時々仰しやる事が間違つて居りまし
て、武藝などの話になりませど、或は唐土から玄徳が遣つて來たの

西塔武蔵坊辨慶が参つたの、平家の侍大将悪七兵衛景清が門弟になりに来たなと云ふやうなことを仰せられまする、斯うなつて見ると、何うも柳生の跡目相續をさせると云ふ譯にはなりません、お家を相續しますれば、將軍家のお目通りへ出まして、お手を取つて御指南を申さんければならぬのでございます、然るに高位高官の前に出で、何時この病氣が發でるやも圖り難い、斯くては御用も勤まらぬ道理と、御父但馬守様も殆ど御迷惑をなさいましたることでございます、そこで三代將軍に對して「悴重兵衛の發狂は、一度澤庵禪師の御骨折に依つて全快しましたとは雖も、今以て折々彼は妙なことを申します、依つて跡目相續の儀は覺束なきやう心得ます」と申し上げました、尤も但馬守が將軍家の前に出ますると、折々に「最早や汝は老る年であるから、早く重兵衛に跡目相續をさせて汝は隠居をいたせよ」と仰せられたこともございます、就いて、斯くは言上いたしましたのでございます、そこで三代の上様より、

「彼は予が幼少の頃はひから、手許に在つて小性役を勤めたる者であるから、如何にも儼かしくも思ひ、惜しくも心得るけれども、左様な病氣があるもあれば致し方がない、緩容保養をさせるが宜からう」と云ふ盛命が下りました、そこで柳生家に於きましては、又々彼を正木坂へ送らんと、その用意を致し居りますこととございます、又ぞろ斯く發狂と見せかけましたのも、これ重兵衛殿の御苦心のところ、表面上は、柳生重兵衛と云ふ仁は、劍道は日本一で、御父但馬守様から見ると一層優つて居らつしやるが、惜しいかな發狂いたして、此のお方は生涯埋木でお果てなさる、癡に態々澤庵禪師が正木坂へお出でになつて、その御骨折で一度は全快をいたされなければ、矢張り其の時分が來ると、狂病か發つてならない、惜しいものであると、諸國の諸大名に知らしめたのでございまして、内實は前にも申し上げました通り、三殿殿は三代將軍家光公より極秘密の盛命を繋つて、偽狂人となつたのでございまして、其等の

秘密を存じた者は、天海か、東海寺の澤庵か、或は天下一の智慧者と謂はれたる伊豆守か、この三人の外には誰れ一人としてないの
 べきさいまして、素より父子の間柄でありながらも、御父但馬守様
 にも此の事は些しもお明かしはないのでございませぬ、そこで御父但
 馬殿も、これでは逆も跡目相續をさせる譯にはなりませぬと、上様
 に此の事を御披露に及びました、三代の上様も、さては重兵衛は
 眞個の狂人と成り済ましたることであるか、最早や近々に當地を發
 足するであらうと思し召し、彼れが誠忠のほどを感心して居られま
 したることでございませぬ、そのうちに重兵衛殿は遂に屋敷を飛び出
 しまして、九州地方を漫遊され、密に彼の地諸大名の意中を探り、
 これを詳しく將軍家に言上いたされると云ふことに相成るのでござ
 いませぬ、併しながら其のお役が首尾よく済みました後、例の狂病が
 治つて了つて、重兵衛は全く狂人ではなかつたと云ふやうなことが
 諸國へ知れますと、さては公儀に於ては、吾々の心中を疑つて、

諸大名の心を損する時は、却て内亂の因であること云ふので、重兵衛
 殿は其の咎も矢張り狂人と成り済まして、遂に柳生のお家相續もせ
 ず、大和に隠居して、生涯埋木となつてお終りなすつたのでござい
 ませぬ、依つて將軍家は益々御感心あそばされまして、隠居料とい
 して三千石のお手當を下し置かれ、尙は將軍家の特別の思召に依つ
 て、紅葉山の園中に在りましたる富士見の亭と云ふのを重兵衛に下
 し置かれました、これは三方どもに玻璃を以て張り詰めたる障子を
 建てましたもので、當今なれば此様なものは何でもございませぬが
 その時分玻璃張りなご、云ふのは大したもののでございませぬ、新様な
 結構なものまでも下し置かれましたと云ふのは、將軍家に於かせら
 れても、深く重兵衛の誠忠を御感心あそばされたからでございませ
 ぬ、扱つてこの重兵衛殿が正木坂に御隠居いたされ、御一生を終られるま

でにお取立てに相成つたる門弟は、一万三千六百有餘人といふもの
 ございまして、その中で有名なのは、本講談「伊賀の水月」の主
 人公荒木又右衛門巖村でございまして、この又右衛門に對して、柳
 生流の極意天地人三卷の書をお譲りに相成つたのでございませ
 ぬ、この又右衛門をお取立ての講談を伺ひまする筈でございませ
 ぬ、それは後々詳しく伺ふことと致しまして、この荒木よりも古くから
 重兵衛殿のお側に從いて居りまして、その極意を授かり、後に父の
 仇討を致して名前を揚げましたる人物といふのは、津輕家の臣鈴木
 源三郎と申す者でございませぬ、けれども、此の仁の名前は、荒木はど
 には世間に知られて居りませぬが、重兵衛殿に於きましては、この
 源三郎の志を感じたされまして、遂に此の者に仇討をさせてお遣
 りなさいました、されば此の鈴木源三郎の傳に就いて講談がござい
 ます、依つて先づ順序として此の源三郎の傳記より、一息御免を蒙
 り、講談に取掛ることを致しますから、その思召を以てお聽取り、

否な御愛讀のはせを願ひます。

第 五 回

お話前に戻りまして、扱て重兵衛殿御病氣全快の上、江戸表にお歸
 りの後と云ふものは、以前のやうに烈しいことはございませぬが、
 何分武藝の話になりませぬ、兎角御自慢が止みませぬ、矢張り是れ
 は體裁の好い狂人だと、世間の者も噂を致し、柳生家の臣下の面々
 も、皆々心配をいたして居りましたることでございませぬ、然るに其
 の年も経ち、翌年の春の中ばに至りまして、いよ／＼國許へ隠居さ
 せやうと云ふことに相成りましたが、或る日重兵衛殿は思ひ出した
 やうに「予は是れから一寸其邊まで出るぞよ」と仰しやいました、
 二蓋笠の御定紋着いたる黒羽二重の小袖に、仙臺平の袴を穿き、羽
 織は黒縮緬でございまして、御秘藏の三池傳太光世の大刀、及び小
 刀を腰に手佩み、福草履を穿いて、別に旅行のお支度とてござい

ませず、飄然とお屋敷をお出ましになりましたが、抑もこれが九州
 地方漫遊の御發足でございませす、やがてアヲく、と品川の方へ遣つ
 てお出でになりましたが、この宿端の松林へ掛つて参りますと、
 此方の道の片傍に一挺の駕籠を据ゑまして、客待を致して居りまし
 た。二人の駕籠屋、重兵衛殿の姿を眺めまして、
 「オイ、相棒、好
 い客が遣つて来たぞ、立派な服装ぢやアないか、一つ勸めて見よう
 ではないか」といふので、やがて一人は手拭を鷲掴みに致し、重兵
 衛殿の前に來り小腰を屈めまして、
 「〇エ、旦那、如何様でございま
 すか、お駕籠は、お駕籠に召して頂きなする譯になりませすまいか、お安
 く参ります、定めて川崎のお大師様へ御参詣と見なするが、お供
 を願ふいふ、譯には参りますまいか、重兵衛、お、汝は何だ、
 「〇ヘエ、私共はこの道中を働きまする駕籠屋でございませす、重兵衛、ア左様か
 それでは乗つて取らせよう、
 「〇ア、何うも有難うございませす……オ
 イ相棒、旦那が乗つて遣らうと仰しやるからお供をしやうぢやない

か、
 「△それは何うも有難い、何うぞお召なすつて」と、駕籠の垂れ
 を揚げて、布いてある蒲團をボンと拂つて直しますと、重兵
 衛殿はツカ、ツと傍へお寄りになつて、そのまゝ駕籠にお乗りな
 さいました。〇何と相棒、直段も極めずにお乗りなすつたが、この
 まゝ昇いで行つても宜からうか、
 「△けれども行き先さだけは聞いて
 置かなければやア困るぢやアないか、
 「〇成程、それも然うだ、エ、旦那
 様に申上げませす、何處まで昇いで参りませう、重兵衛、左様さな、ア
 汝達の氣の進んだ所へ昇いで行け、
 「〇冗談仰しやつらやア困ります
 貴方は、全体何所へ行らつしやるお積りでございませす、川崎のお大師
 様へ御参詣でございませすか、重兵衛、左様さな、ア其の邊へ行くのも宜
 からう、それから又向ふへ出抜けても苦しいのだ、
 「〇ヘエ、ぢやア鎌倉から江の島の方を御見物なすつては如何でございませす、
 重兵衛、如何にも汝の申す通り、斯ういふ長閑な春季になると、その邊
 の見物も随分宜からうな、
 「〇至極お宜しうございませす、重兵衛、ぢやア其

何だらう。○然うたなア、何うも餘程御身分のあらつしやるお方と見ゆるな、眞更斯う見たところでは陪臣者とは思はれぬ、マア天下の御直參旗本でも、餘程の御大身と見ゆるせ、△「それなら一人づらゐは御家來が從いて居さうなものだが、何ういふものだらう。○それがな、彼アいふ御身分のお方は、何うかすると、御微行で密りお出ましになることがあるから、大方お一人お微行でお出ましになつたものと見ゆる、併し大變永く休息をしたではないか、川崎邊で晝飯に又一杯馳走れるとして、ボツ／＼行かうではないか、△「それが宜からう」と兩人はやがて盃を納めますと、重兵衛の側へ還つて参りました。○「エ、旦那、大變永く休息を致しました、私共も十分頂戴いたしました。が、何うでござりますか、ボツ／＼と行らつしやいましては重兵衛左様か、それぢやア出掛けやう。○「エ、私共も先程から彼方で頂戴を致しました。が、一寸何うか當家の勘定をお遣り下さいませるやう重兵衛ナニ勘定、それは汝の方で立替へて置け。○「

……オイ相棒、旦那が立替へて置けと仰しやるが何うしたもんだらう。△「何うせ旦那が持つて在らつしやるのは判金か何かで、取替るのが面倒だと思召すんだらうよ、ナア熊、汝昨夜大變勝つたではないか。○然うだ、マア近年にないことを乃公やアやつたんだ、一寸一兩二分ばかり勝つて、茲に持つて居る。△「ぢやア其のうちで立替へて置け、斯ういふ御服裝をして居らつしやるお方だから、豈夫間違ひはあるまい、僅か精進料理屋の勘定ぐらゐで、此方等が存なことを云つて、旦那に愛想を盡かされるやうなことをあつてはならない、マア／＼立替へて置け」といふので、そこで一人の駕籠屋は重兵衛殿が召上つた勘定と、自分達の飲んだ勘定とを合して八百ばかりの勘定でございませう、漸うそれを拂つて了ひまして。○「ぢやア旦那、ボツ／＼と参りませう重兵衛左様か」といふので、駕籠にお乗りになりませうと、兩人の駕籠屋は當家より昇ぎ出しまして、やがて大森を背後になし、ド／＼と道を急ぎまして、程なく六郷の

渡船へ掛つて参りました、すると渡船錢も矢張り駕籠屋が立替へるといふことに相成りまして、尙も追々と急いで参りまするうちにもうやがて午刻でもあらうと云ふ頃はひに川崎へ遣つて参りました、

○旦那、當所が川崎の驛でござります、何うでござりますか、御休息なさいましては重兵左様だ、何處か美しいものを食はせる所があるか、

○左様でござります、まづ當所では萬年屋でござりますね、重兵「ぢやア其家へ案内を致せ」程なく萬年屋の前へ遣つて参ります、若い者女中は夫れへ出迎へまして女中「入らつしやいませ、お早うさまでござります、何うぞお通りなすつて」といふうちに、これれも威勢よく通庭へメツと駕籠を入れまして、座敷の縁の所に、

○旦那、重兵衛殿はメイとお出ましになりました、座敷へお通りになります、駕籠屋はヒョムスカ頭を下げてまして、

○當家は随分美しい物を食はせます、先程は精進料理でありましたから、定めて不美うござりましたらう、如何でござります、御盡食に又一

杯召上りましては重兵左様か、それでは澤山美しいものを持つて来るやうせ申せ、そこで駕籠屋から、女中に云付けますと、程なく御膳の上に一すお銚子を附けて持つて参りました、重兵衛殿は女中に給仕をさせながら、召上つて在らつしやいます、そのうちに兩人の駕籠屋も店の間に於いて漸う晝の食事を済ませましたることとでござりました、

○旦那、今度は旦那が勘定を拂つて下さるだらうと思ひながら、

○旦那様、何うでござります、お晝食が済みましたらボツ、行らつしやいましては重兵「ア、それも宜いな、

○旦那、勘定を一つ拂つてお遣り下さいましては如何でござります、重兵「勘定か、マア宜いや、其方立替へて置け、

○旦那、オイ虎、何う仕やう、又た立替へて置けと仰しやるが、△仕方がないぢやアないか、僅かなことで氣を見られても詰らない、汝に無いのなら兎も角も、汝持つて居るから、拂つて置け、

○旦那、そこで仕様がなから、又々晝食の勘定も熊鷹といふ駕籠屋が拂ひました、やがて重兵衛殿が駕籠にお乗りなさ

いませると、何うも有難うございます、お静かに行らつしやいませ」
 といふ當家の者の挨拶の言葉を背後に聞き流して、トシ／＼と祝籠を
 昇き出しました。祝籠の中なる重兵衛殿は「ア、何うも好い景色
 である」とキョロ／＼四方を見廻して居らつしやる。○旦那、これ
 からズツと大師河原の方へ参りませうか、但し又江の島鎌倉の方を
 先になさいませるか、重兵衛様さな、江の島鎌倉の方が宜いな。○お
 やア相棒、大師河原の方は後にすると仰しやるから、鎌倉の方へ行
 かうぢやないか。そこで大師河原の方へは出さして、神奈川の方へ
 遣つて参りました。丁度生麥村へ掛つて参りましたが、其の途中、
 ○ね、旦那、何うでございます、今晩は神奈川の驛にお泊りなさ
 いまするか、但しは金澤まで行つて了ひませうか、重兵衛然うだな、斯
 う見たところで海の景色も随分好い……ア何處でも宜いから汝達
 の好いた所へ昇いで行つて、澤山美しい物を食はせて呉れ。○へ……
 オイ相棒、ア一寸祝籠を下して呉れ、何うも可怪しいせ。△何が

可怪しい。○乃公やア先刻から何うも變に思つて居るんだ、此様な
 又温順な旦那といふものはあるもんぢやアない、乃公達の云ひ儘次
 第になつて在らつしやる、そこで大森の山本の勘定も亦川崎の萬年
 屋の勘定だつても然うだ、無暗に立替へて置けく」と云つて、この
 上今晩の宿料も亦立替へて置けと仰しやるだらう、と、ここで一時に
 繼めて貰はうといふ時になつて、實のところは一文も持つて居らぬ
 といふやうなことを云はれて見ると、それこそ眞個に馬鹿を見るや
 うな話した、よつて旦那に、眞個に金子を持つて在らつしやのか、
 在らつしやらぬのか、一通聞いて見ようと思ふんだが何うだらう、
 △成程、然う汝が云やア、乃公も先刻から變に思つて居るんだ、そ
 こで祝籠の中を覗き込んで見ると、酒の酔ひが十分運つて来たもの
 と見ゆまして、後に凭れ、兩眼を閉ぢ、好い心持にスヤ／＼寝入つ
 て在らつしやいます、△モ、旦那、旦那、重兵衛、ム、ム、ム、ア、
 好い心持だ、今夜の泊りには尙と美しい物を食はせる所があるか、△

モシ旦那、斯様なことを申しては済みませんが、相棒が夜前一寸馬つたものですからね、マア少しばかり持合せがあつたので、是れまでの御勘定をお立替へ申しました、大体この野郎は氣の小さい奴ですから、お立替へ申して置いて、跡で知らぬなと仰しやつては困ると、大變心配をして居りますから、斯様なことを伺ひましては恐入りまするが、旦那の持つて在らつしやいます金子といふのは、判金でござりますが、二分金でござりますが、その邊の所を何うか私共に一寸聞かせて頂くといふ譯にはなりません、重兵何だ、余が懐中に持つて居る金子を見せるといふのか、△「イエ、別に檢めるといふのではないのでござりますが、マアお立替があるのですからこの野郎が左様に申すのでござりまして、重兵、ハ、ア左様か、持つて居れば余は拂ふのだが、實は余は一文も持つて居ないのだ、△「エ、ソ……、キ、此様なことだらうと思つたんだ、相棒、何うも可怪しいせ……、旦那、御冗談仰しやつちやア可けません、只今に至つて無

いつてなことを仰しやつては、甚だ困るぢやアございませんか、重兵、でも無いから無いと申すのだ、前に汝達が駕籠に乗つて呉れいといふから、余は乗つて選つたのだ、すると當所で物を喫へよといふから余は喫へた、汝達は餘程親切なもので、何でも余の望むものを喫はせて呉れる、今晚の泊りも、何方でも汝達の氣に遣つた所へ伴れて行け、併し余は何にも持つては居らぬぞ、△「大變な願ぎだせ、オ、イ……、其様なことを今更云はれましては困ります、ぢやア最う江の島鎌倉へ行くことは止めて、寧ろこれから江戸表へ歸りましてお屋敷へ早いで参りました上頂くとしませう、別段餘計なものを貰はうとは思ひません、お立替へ申したものと、駕籠賃とさへ頂戴しますれば夫れで宜いのですから、重兵、キ、ウ、ぢやア何か、汝達は余に屋敷へ歸れといふのか、△「左様でござります、重兵、それはマア歸れといへば何うも致し方がないがな、汝達は余を屋敷へ伴れて歸るといふと、汝達の命がないぞ、○「其様な冗談なことを仰しやつちやア

困るぢやアございませんか、何だつて左様なことになるんでござい
ますか重兵尋ねるなれば申して聞かせるが、余は江戸表で高祿を頂
戴いたす天下の旗本の伴だ。△へエ、そりやアア御服装から見
ましても然うだらうと思つて居りました重兵「ところがな、此方をお
生みなすつた阿母さまといふのは、余の幼少の頃はひにお亡くなり
なすつて、そこでお父上は跡へ後妻をお迎へになつた。△へエ、
重兵「ところが其の後妻に子が出来たのだ、それが爲に其の義理の母
といふものは、自身腹を痛められた我が子を大切に致して、余のこ
とをお父上に對して様々に悪く云つて、余を追ひ立て、弟に跡目
相続をさせやうとするのだな。△へエ、成るはせ、能くあるや
つですぬね、然ういふことは、で殿様は何うなすつた重兵「だから此
方も黙つては在られまい、義理の母とは云ひながら、其様な無法な
ことをなさるから、ッイ先月のことだつたが、父上のお留守を幸ひ
と思ひ、乃公やア義理の阿母を取捉まへて、ふん縛つて遣つたんだ

△へエ、ッ、お縛りなすつたか重兵「ッ、するどキヤア、聲を立
てるものだから、手拭で猿轡を嵌めて、庭の隅の所にある古井戸の
中へぶら下げて遣つたのだ。△へエ、大變なことをなすつたんで
ございますね重兵「ところが其所へ對して此方の父が歸つて參つて、
母を捉へて何たる無法なことをすると云つて、無暗に此方に打つて
掛つたから、此方も自暴になつて、遂に親父の襟頭を引捉んで、庭
の泉水の中へ投げ込んで遣つたのだ、すると用人給人を首め中間に
至るまで大勢が出来て来てアがつて、到頭此方を取捉まへてふん
縛つて了つたのだ、その上座敷牢へ打込みやアがつたのだ。△へエ
ッ、そりやア殿様、貴方も其様な無法なことをなさいますから、其
様な目に遭ふのでな重兵「ところが何時までも其の中へ投げ込んで置
くから、此方も残念で堪らぬ、そこで到頭その座敷牢を破つてな、
逃げて出る時に、斯うして置けば宜からうと思つて、マア服装だけ
はチャソと斯うして大小刀まで持つて出たが、金子を持つて逃げる

の扮装にて、立派やかなるところの陣笠を戴き、御馬上にて手綱を
 握り、従容にお出でになりました。これぞ其の頃天下の御老中
 をお勤めに相成る、三州吉田の城主松平伊豆守信綱殿でございま
 す。全く三代の上様の御用を帯びて、鎌倉鶴ヶ岡の八幡宮へ御参詣を致
 されまして、今江戸表へお歸りに相成らんとするところでお見
 ました。重兵衛殿は駕籠の中よりヒョイツと首を出して見てお在
 りました。重兵衛殿は「重兵衛、オイ、豆州、豆州」と大聲に呼ば
 りました。人の駕籠屋は「ハッ」と驚いた。また伊豆守様のお側に
 従いたる近習の輩も大きに驚きました。此方は駕籠の中から首を突
 き出して「重兵衛、此所だ、何うだい、久しく會はなんだな」と
 宛も馴れくしい御挨拶でございませう。當將軍家が未だ
 竹千代君と仰せられ、西丸に在らせられたる頃は、御近習の中
 第一のお氣に適りといふのは、この重兵衛三殿殿を首めとして、
 田三四郎、或は大内長四郎、また阿部小平次などいふ人々で

さいまして、何れも幼少の頃は、ひのお友達でございませう。尤もこの
 方々は何れも後年に至つて大したものにお成りなさいました。阿部
 小平次と仰しやるお方は、後年に阿都豊後守忠秋と成られました。
 尤も一旦は三代公の御不興を蒙つて、満三年の間といふものはお言
 葉さへも下らなかつたさうでございませう。然るに或る年隅田川に
 水がございまして、遂に夫れを乗り切り、漸うのことに三代公の御
 機嫌を取直し、後年には天下の御老中の一人とお成り遊ばしまし
 ました。三代公と仰しやるのは、これは春日のお局様の御子息でありま
 して、爾は竹千代様とはお乳兄弟でございませう。このお方は後年
 に下総印旛郡佐倉に於て十八万石、堀田加賀守とまで御立身なさい
 ました。その後三代公御他界の砌り、追腹を切つて殉死をお遂げな
 さいました。併し御子息上野殿の代に至つて、善くない家來があり
 まして、餘り領分を取立の殿しかつたところから、遂に領分二百
 二十九ヶ村の人民の總代となつて、佐倉宗五郎なる者が上様へ直訴

斬 番 六 十 三

を致すといふやうなことに相成りましたのでございませう。さて又大河内長四郎といふのは、父を大河内金兵衛と申しまして、幼少の頃はひより至つて家光公の御意に適りてございまして、それが人となりに及んで、三州吉田の松平家へ養子となりまして、今では伊豆守信綱と仰しやつて、殊に天晴れ器量ある御仁でございませうから、智恵伊豆と謂はれて、御老中の中ではなかく、喧ましいお方でございませう、餘事は捨て置きまして、駕籠の中から豆州と呼ばれりましたから、伊豆守殿はヒョイトと御覧なさいませうと、幼少の頃は、最も親しく遊ばした御友達の重兵衛殿でございませうから、ハツと驚き、早連馬から下り遊ばしたることでもございまして、伊豆オ、これは重兵衛殿、思ひがけない所で御面會いたしました、御貴殿は久しく御病氣の由を承はつて居りましたが、何うやら御全快なすつたといふことで、誠に何より以て結構であります、して何方へ全快お出掛けになる積りで新様な所へお出でなされた重兵衛殿、別

斬 番 六 十 三

段拙者は病氣といふのではないのであります。何だか他人は拙者を見る病氣だくと申すが、頓ばり拙者には譯が分らぬ、何うも屋敷にばかり居つては退屈でならないから、今日は鬱鬱晴しに出掛けました。伊豆ハ、ア左様か、これから何方へお出掛けで重兵衛殿、ア別に的はないのだけれども、日本六十餘州には靈山聖地も数多あるから、ア夫れ等を見たいと思つて出掛けたいやうな評だかな、今此所まで乗つて來ると、これなる駕籠屋が路の片傍に籠を下して、拙者に金子を持つて居るかと思つて居るから、金子は持つて居ないといふと、それでは是れまで立替へたものもあるから、今無いと云はれては困りますと云つて是非共拙者を屋敷へ伴れ歸らうとするので、拙者も殆んど困つて居るのだ、ア豆州、お身金子を持つて居られるから、少し貸して呉れ玉へ、之れを聞いて驚いたのは伊豆守殿、矢ッ張り未だに狂病が癒らぬことであるかといふやうな思入れをなさいます、コッコリと打笑ひ、伊豆ハ、ア左様であります。

ますか、イヤ宜しい、それでは拙者が暫時お貸し申さう」と仰しや
つて、何か家來に取語をなさいまして、己れは斯様な發狂者の相手
になつて居ても仕方がないと思ふので、そのまゝ馬にお乗りなすつ
て、前へズン／＼行つてお了ひになりました、すると一人の家來が
跡に残りまして、やがて重兵衛殿のお駕籠へ來たつて家來「エ、恐
れながら申上げます、拙者ことは松平伊豆守の家來下村藤左衛門と
申す者にござります、この度先生御旅行の由を承はりまして、主人
より餞別を差上げよと、只今申し付けられましたこととございま
して、是れは甚だ失禮ではござりますが、御道中の御旅費に御受納
下し置かれませうなれば、有難き仕合せに存じ奉ります」と金子
百兩といふものを、紫箱の服紗に包んで重兵衛殿の前へ差出しま
した、重兵衛殿は其の金子を服紗のまゝお受取りに相成りまして、
重兵衛「オ、これはく千萬辱じけない、何うぞ豆州殿へ汝から宜しく
申しておいて呉れ家來「委細心得ましてござります、何か尙だ他に御

用等がござりますれば、何卒仰せ付けられますやう願ひ奉ります
る重兵衛「イヤ、これさへ貰へば、最う他に頼むことはないぞ、マアこ
れだけあつたら六十餘州を廻ることは出来るだらう、何れ二三日の
内には江戸表へ立歸るから、何うか豆州に宜しく申して置いて呉れ」
藤左衛門は變に思ひました、矢ッ張り發狂者だ、眞面目な顔をして
居らつしやつても、仰しやることに少々間違つて居ると呆れて居り
ます、先程からこの様子をマツと見て居りました兩人の駕籠屋も
「何うも妙な殿様もあるものだ」と目を圓く致して尙も眺めて居り
ます、重兵衛殿は今受取つた金子を、服紗包みの其のまゝ駕籠
からお差出しになりまして重兵衛「ヨリヤ／＼」駕籠屋「〇へエ、エ、
何か御用で重兵衛汝達は何に金子を見せよといふから、無いと云つた
ら、無ければ江戸へ歸るといつて、大層金子を慾しがつて居つたな
ら、〇へエ……重兵衛「おア之れを遣る、納つて置け」と云ひながら、
おイと投げ出されました、兩人の駕籠屋は大きに驚き、〇マ且那樣

斬 番 六 十 三

御元談ぢやアとさいません。此様な澤山頂かうと申したのではないので、たゞお立替へ申しましたのと、駕籠賃さへ頂きましたら夫れで宜いのでござります。重兵左様か、イヤ何うも汝達は正直な奴だ、ぢやア今晚宿屋へ着いたら、細かい錢と替へて拂ひを致してやる、
 ○ア、何うも有難うござります」と駕籠屋は大きに安心をして再び駕籠を昇き始めました。そこで重兵衛殿は伊豆守の家來に別れを告げて、いよ／＼東海道筋を上るといふことに相成りましたが、まづ其の晩は神奈川にお泊まりなさいまして、是れまで駕籠屋が立替へましたものを悉くお拂ひに相成つたることでござります。そこで翌日になりますると、兩人の駕籠屋は是非ともお供を願ひたいとありますから、矢張り其の駕籠にお乗りなさいまして、まづ鎌倉へお行でになり、それより江の島と、兩三日の間といふもの、この界限を彼方、此方と見物をなされ、そのうちに旅の支度を十分調へられましたることでございまして、そこで駕籠屋をばこの江の島より歸

斬 番 六 十 三

してお了ひなさいまして、それからには御一人にて、アア／＼と東海道筋をお上りに相成り、まづ藤澤の驛へ出まして、遊行寺などへ御参詣をなすつて、これから右へ曲りますと、彼の大山石塚の街道へ出まするが、それを曲らずに真直に参るのが東海道の順路でございまして、丁度南郷の松原へ差掛つて参りますと、是れも上方へ行くものと見ゆまして、一人の若年の武士、紋付には小倉の袴を穿きました、勿論剣道修行のものを見ゆ、その道具類を引擔ぎまして袴の股立を高く取上げ、重兵衛殿の跡になり前になりました。セク急いで往來を致して居ります、どころが重兵衛殿は江の島でお購めになりましたものを見ゆ、貝細工で以て、一寸斯う五色糸と止木に鳥が止まつて居る至極好く出来たものどを手に提げて在らつしやいましたか、何うも今は却つて是れが邪魔になる、どいつて、折角購めたものですから、空しく投つて了ふといふ譯にもなりませず、頗く思ひながら持つて存らつしやいましたか、やがて彼の若武

士が後方から遣つて参つて通り抜けやうと仕ますると重兵、オイ、其所へ参る武士、一寸待つて呉れ、聲を掛けられまして彼の者は振願つて見ると、なか／＼服装は立派でございまして、殊に手には色々、の貝細工を持つて在らつしやる武士、ハ、ッ、何か御用ですか重兵、左様だ、予は之れを購めて持つて来たが、今となつては厄介でならぬ、其方太儀ながら之れを持つて呉れんか、その上供を申し付けるから一緒に来い、これを承はると彼の者は驚きました、飛んでもない野方途なことを云ふ奴もあるものと思ひました、根が温順な人物であまり人に逆らふことを好まぬものと思ひまして、別段腹も立てず武士、折角の仰せではござりませんが、拙者は些と前途を急ぎまするのでありませうから、何うぞ御免を蒙りたうござります重兵、ナニ、其様に云はんでも宜からう、汝が急げば余も急いで遣る、兎も角も之れを汝に持たすぞ、武士、これは又怪しからぬことを仰しやる、何分至急の用がござりますから御免下され、と早や行き過ぎやうとします

から重兵、コソ、何で汝は其様に急ぐのだ、武士、さればでござります、ア何でも彼でも今日のうちに箱根まで参つて、拙者の會ひたい者が、すでに關所を通つたか通らぬかといふことを、關所の役人に尋ねんければならぬのでござりますから、失禮ながら先へ御免、と其んなりてソソ／＼と急いで行つて了ひました、重兵衛殿は「不埒な奴もあればあるもの、彼奴は失敬極まる奴だ」と御立腹に相成りました、これが何方が失敬か、重兵衛殿の方が餘程甚いのでござります、彼の若者は漸う一二丁先へ通り越しまして、ホッど一息を吐き、背後を振願つて見て「妙な武士もあるものだ、儂ッ程彼奴は失禮な奴だ」と思ひながら、尙も路を急いで参ります、ところが向ふの方から何れも二十七八になる倔強の武士か三人、十分酩酊を致して遣つて参りました、不圖彼の若武士が方へ来るのを見ると、〇何うだ、向ふから来る奴は物に成りさうだぜ、△然うだなアこれなら真更可かぬこともあるまい、吉川、一番打突かつて遣れ、

といふので、遂に此の三名の武士が、彼の若武士に喧嘩を吹掛け、すでに真剣の果合ひにも及ばうとする所へ、後れながらも柳生重兵衛殿が乗り込んで参り、其の中へ這入つて口をお利きに相成りましたのが、一つの縁となりまして、津輕の家臣鈴木源三郎なる者が、第一番に重兵衛殿の門弟と相成り、遂には重兵衛殿の御仕込に依つて首尾よく父の仇を討つといふ、是れから重兵衛、源三郎出會ひの一段に引移るのでございしますが、今は一息いたしまして次回に申し上げます。

第 六 回

さて前回に伺ひました、彼の若年の武士は、柳生重兵衛殿の無法なる難題を聞いて、亂暴なことを云ふ奴もあるものと思ひましたが、敢て取合ひもせず、そのまゝ二三丁といふもの先へ通越して丁ひました、今南郷の驛の手前まで参りますると、丁度南郷の方から、年

輩二十七八の倔強の武士三人、何れも非常に酔前いたして、大聲擧げて談話をしながら、此方へ遣つて参りましたが、〇オイ吉川、向ふから遣つて来る武士は未だ一向年は行かぬ様子だが、餘程有つて居る鹽梅だ、何うだ一つ小當りに當つて見ようか、盲く行けばお慰みだ、△オッとお合点だ」と吉川といふ男はやがて先に進んで参りまして、彼の若武士と擦れ違ふ途端に、グイツと腰を捻つたもので、から、自分の手挟んで居りまする刀の錆が、彼の刀の錆にカチリッとお當りました、ハッとお若武士は驚きながら、振願つて見ますると此方は素より仕組んだこととございますから、少しも猶豫は致しません、吉川待てッ、汝は何だ、この廣き往來に、態ッとお拙者の前を通行いたして、鞘當てに及ぶといふのは甚だ不埒な奴だ、大方何か遣恨があつて致したことであらう、拙者は汝のやうな者に遣恨を受けらざることはない、何がなみに鞘當てを致した、武士の鞘當ては容易ならざるものであるぞ、サッ、この上からは尋常の勝負に及べ」とす

でに一刀の柄に手を掛けました。所へ餘の二人も違つて参りまして
 ○「オイ、吉川、何うした。吉川、イヤ御兩所、お聞き下さい、拙者
 がこの所を通りかゝると、これなる若武士が擦れ違ふ途端に鞘當て
 を致したのだ、よつて向ふも二本手扱ひものだ、このまゝ勘辨する
 といふ譯にも相成らぬから、尋常の勝負を致さうといふのだ。○「何
 だ、此奴が鞘當てを致した、怪しからぬことを致す奴だ、こりや
 ア一番遣るべしだ、大いに遣り玉へ、朋友の情誼を以て我々兩名、
 いかにも貴公に助太刀を致さう」といふので、兩人の武士も同じく
 其所へ身拵へを致さんとしませう、この体を眺めまして、彼の若年
 の武士は非常に驚きました。武士暫時お待ち下さい、別段私は貴下方
 に遺恨があつて、左様なことを致したといふ譯ではございませぬ、
 素より私は避けんと致しましたところ、何ういふ途端か新様なこ
 とに相成つたのでございませぬ、なかく、以て私は未だ若年者にござ
 いまして、貴下方に對して眞劍の勝負を仕るなといふやうなことを

は到底成り兼ねます、重々私の粗忽のところはお詫びを致します
 から、お腹も立ちませうが、何うぞ御勘辨のほどを願ひます。吉川、
 れ、武士に鞘當てを致して置さながら、御勘辨を願ひます。済むと
 思ふか、是非とも勝負に及べ、我々三名に於ては何うあつても勘辨
 相成らぬぞ」と云つて居ります。何がさて東海道の往來の
 ことでございませぬから、西から來るもの、東から往來するものが、
 五人八人と其の所に立止まりまして、見て居るうちに十人二十人と
 追々人が集つて参りました。○「オイ、何だ、大變なことが始
 まつた、武士同士喧嘩だ。○「フーン、△「東から遣つて來た彼の一
 人の若武士を、この酔拂つて居る三人の武士が相手取つて、これか
 ら眞劍の果合を遣付けやうと云ふんだ。○「そいつア何うも大變なこ
 とが起つたな。△「大体あの三人の武士は悪い奴だ。○「フム、何う
 して夫れが分る。△「ナア、今乃公が南郷の立場で一杯飲んで居たら
 あの三人の武士も類りと奥座敷で酒を飲んで居たのだ、するといふ

と、卒さ勘定をせんといふ前になつて、何か下女が粗相を致した、
 勘辨ならぬと吐して、到頭長い刀を引ッて抜きやアがつたんだ、
 フム、△その体を見て茶屋の家内の者は驚いて、皆々戸外へ逃げ出
 した、するといふと跡で色々な大言を拂つて、徳利だの小鉢などの
 類を打ち破つて、其んなりで勘定も仕ないで飛び出して了やアがつ
 た、また此の所へ来て彼の若武士に文句を付けて居やアがるが、
 らかの酒手にするんだらうよ」と見物のものはワイ／＼云つて居り
 ます、と、このころへ柳生重兵衛殿は例の貝細工を手を吊提げて遣つて
 参りましたが、何がさて黒山の人衆り重兵衛、何だ、退いた、と大
 勢の人を押分けて中へ這入つて見ると、今果合ひが始まらんといふ
 有様でございます、重兵衛、ホ、ウ、甚いことが起つたな、全体何うした
 んだこれは、すると見て居る見物の中から、X、イヤ、これは旦那で
 ございますか、是りやア今あの若いところの武士が是れへ通りかゝ
 りますと、態々三人の武士の方から鞘當てをしたんです、それで

武士の鞘當は重いとか云つて、真剣の果合ひをしるッて云ふんでは
 がね、と、このころが彼の若い方のか武士は、未だ腕前が鈍いから、何う
 を勘辨をして呉れと云つて詫まつて居るんでございます、それに可
 憫さうぢやございませぬか、なか／＼あの三人の奴等は悪い奴でし
 て承知をしません、私共も一つ中へ這入つて口を利いて選りたいと
 は思ひますが、何分町人のことでございますから、何うすることも
 出来ません、お見受け申せば貴方は立派なお武士でございます、
 何なら此の中へ這入つて仲談をしてお遣りなすつたら何うでござい
 ませう、重兵衛、ハ、ア左様か、そりやア何うも面白い、別段仲談も何も
 要らない、何うせ武士同士の鞘當てと云ふんだから、こりやアマア
 果合ひの勝負をするのは當然だ、何れ斬り合ひが始まつたら、強い
 奴が勝つて弱い奴が負けるといふことは極つたものだ、双方共確か
 り遣れ、なか／＼此いつア面白い、誰れか煙草の火を付けて呉れる
 者はまいか、身共は此の所に在つて見物をして遣る」と、路の片傍

の松の根方に腰懸けをして、悠々と構へて見物を仕やうといふ有様でございます。「オヤ、く、雑返しの武士が来やアがつたぞ、全体これは何う納まりが着くであらう」と見物はロヤ、思つて見て居りまするうちに、三人の武士は下緒を外して棒十字に操り、手拭を取つて後鉢巻に及び、
 ○「サッ吉川、確かり遣り玉へ、貴殿が危いその時には、我々兩人が屹度助太刀をするぞ」と云ひながら若武士の方を向いて、
 ○何を猶豫いたして居る、汝も腰に二本手挟んで居るではないか、早く支度を致せ」三人の者は何れもすでに居合腰になりまして、身構へましたる時、彼の若武士は荷物を片傍へ下しまして、大地に兩手を支へ、武士の御立腹は御道理ではございませうが、先程から申して居りまする通り、何分若年の修行中の者でございませうか、如何やうともお詫びは仕ります、何卒其許等御兩所より御仲裁下し置かれまして、この場を無事にお納め下されうなれば、有難き仕合せにございませう、たとへ何と仰せられませうとも、到底私は眞

劍の勝負などいふことは思ひも依らぬことでございませう、何卒御辨勘下し置かれませうやう、偏へに願ひ上げます」と段々と詫び入るどころから、三人は互に顔を見合せて居りましたが、
 ○「オイ、吉川、一寸待て、何うも我々が斯うして身支度を致したところで、相手がこのやうな腰振なれば如何とも仕やうがない、マア兎も角も我々兩人に任せ玉へ………オイ、其所なる若武士、それぢやア汝は何うもつても真劍の勝負は出来ぬといふのか、武士何うも恐入りましてございます、何を申すも私に於きましては未熟の者でございまして、素より貴下方に意趣違恨とでもございませう、それゆゑ斯くお詫びを致すのでございませう、
 ○「ハ、意氣地のない男だ、汝は、それはせままでに詫びるとあるなれば、勘辨して貰つて遣らぬでもない、マア詫びるなら詫びるで宜いが、それなら夫れだけの証跡を立てさつしやい、武士ハ、証跡を立てますと云つて、如何やうなことを致しましたら宜しうございませうか、
 ○「さればである、別段証跡を

立てると云つたところで、何も詮状を認め、吉川に渡せと云ふので
はない、實は我々は細川家の浪人者で、汝が精當を致したのは吉川
半六といふ者だ、また拙者は同藩中の山口傳十郎、是れは松井藤之
進といふ者であるが、武術修行の爲めに斯うして三人が國々を廻つ
て居るんだ、自慢ではないが、何處の道場へ参つても、唯の一度と
致して不覺を取つたことはない、何れも一流の奥義を極めたもので
ある、ところが我々三人は永年道中を致して居つて、路用が乏しい
のである、其所が相談だが、汝が真劍の勝負をすることが出来ぬと
いふやうなこともなら、内済で以て済まして貰つて遣るが、何程持つ
て居るか知らないが、汝は定めて路用の金子を持つて居るだらう、
よつて能料と致して其の路用の金子を渡らす我々に預けさつしやい
然うすれば吉川へ我々が詫びをして遣る、然も無い時には勘辨は出
來ぬぞ、若武士は之れを承はりまして武士何と仰しやる、然らば各
々方に於ては拙者に路用の金子を出せと仰しやるか、○如何にも左

様だ、武士へ、ア、して見るといふと、これは最初から各々方が仕組
んで掛つた仕事であつて、若年の拙者と侮り、態々と貴殿の方から
精當を致して置いて、真劍の勝負に事寄せて、強借詐欺に等しきこ
とをなさるゝものとお見受け申した、然らば拙者も一旦はお詫びを
致したるもの、左様相分つて見れば、最早お詫言は仕らぬ、如何
にも其の許達のお望みに委せ、真劍の勝負を致すでござる、云ふよ
り早くツツと起ち上りまして、これ又下緒を外つて手早く櫛を掛け
後鉢巻を確かと締めまして、一足後方へ飛び下り、腰を捻つて腰な
る一刀をスツリとばかり鞘拂ひに及んだ、武士「サッお相手を致す、こ
の上からは一度にお掛りなさい」とヒタリと一刀を中段に構へまし
た、ところか彼れの一刀は、鏑際から鏑まで一点の曇りもなく、明
皎々たる利刀でございます、こいつを眺めた大勢の見物は大きに驚
きました、「こりやア大變な願ぎになつて來たぞ、到頭若い武士が怒
り出した、いよく斬合が始まるわい」と何れも往來の者は堅睡を

三 十 六 番 斬

呑んで其の様子を見て居りますと、先程から片傍で見てお在でに相成りました柳生重兵衛殿は、ツカ／＼と彼の若武士の傍へお寄りに相成つて重兵衛よりや若武士、我等先刻より彼なる所に在つて様子を居る居るところ、何うやら三名の奴等は其方を若年と侮つて、強借強談を始め出したところ、年齢に似合はず其方は真劍の勝負を致さうといふのは、天晴れ見上げたものだ、遣れ／＼、確かり遣れ、身共が助太刀を致して遣はずぞ、武士は相見互といふことがあるから武士これは先刻一寸か見受け申しましたか武士でありませぬ、思召しの程有難うござります重兵衛如何にも助太刀を致して遣らうが併し最初から身共は出ぬぞ、其方は彼れなる三名の武士と、一身の外に味方なしと心得て十分に斬り合ひを遣れ、助太刀があると思ふと、ツイ鉢が鈍るものだ、拙者は此の所にあつて勝負を見届け遣はす、万一方が不幸にして三人の者に殺られるやうなことがあれば其の跡に於て、身共が此の場を去らず仇を討つて取らせることであ

三 十 六 番 斬

る、よつて心置きなく真劍の勝負に及べ、この一言を承はつて彼の若武士は大いに悦び、武士誠以上に有難き仕合せにござりますその御一言は私の爲りには千人力、ツツお三方、御用意好くば何れからなりともお打ち込みなさい、とヒツツと其處へ付けました、此方は柳生重兵衛殿、行司でもするやうなお心持に相成つて、長さ一尺三寸あらずといふ立派な鐵扇でございまして、親骨は金の象眼を用ひ、降ふと見て、積らぬ先に拂へかし、雪には折れし青柳の枝と、斯く御歌の認めてありますをお握り詰りに相成つて、グインと三人の武士を御腕め付けに成りましたが、身体に些しの隙もございませぬ、すると此は抑も如何に、初めの勢ひは何處へやら、俄かに三人の武士は棒鉢巻を外つて了ひ、何れも其の所へ大小刀を投げ出して吉川まづ少時お待ち下さい、誠に以ちまして存外なる心得違ひを仕りました、なか／＼以て私共は貴下方に遺恨があるの何うのといふやうなことはないのです、はんの今あの南郷の驛で三人が飲

みまして、少し飲へ過ごしたるところから、酔ひに乗じて斯様な詰
らぬことを申しましたのでございませう、お腹立ちでもございませう
が、一闘はゞ酒興の上で真剣の勝負なごいふことを申したのでござ
いまして、ア漸う只今目が覚めました、斯くの通り大小刀を投げ
出してお詫びを任りますから、何うか御免しあらんことを願ひま
す」と、三人の者は真若者に相成り、ガク／＼慄へながら詫び入ると
ころの有様でございませう、すると彼の若武士は一刀を引抜いてヒヤ
リと其所へ付けて居りましたが、漸う其の一刀を鞘に納めまして、
武士然らば其許達は別段遺恨あつてするのではない、唯だ酌酩の上
致したと仰しやるか……イヤ遺恨はないと仰せられるか、それでは
素より拙者に於ても遺恨はござらぬから、承知を致しました、拙者
が幾らお詫びを致すといへども、其許達が何うしても勘辨ならぬと
仰しやるから、止むを得ず斯様な場合に至つたのでござらぬか、其許
達が左様仰せられるれば夫れまでのことである、また先程のお話に、

路用の金子が乏しいと仰しやつたが、それは定めて御困難でありま
せう、拙者も多く貯へがおりますれば、ア餘計に差上げたいと思
ひますが、お互に道中のことで不自由を致して居るから澤山なこと
は出来ぬが、お宿賃ぐらゐは持つて居りますから、何うにかしてお
進げ申しませう」と云ひながらも、懐中の紙入から些かの金子を取
出して、之れを紙に包み武士これは少々ではあるが拙者の志し、お
納め下されば誠に我等も満足に思ひませう」と彼等の前へ差出しまし
た、三人の者は大きに恐縮いたしましたして吉川「イヤ、誠に何うも失禮
を致しました、その上ならずも斯様な御心配に預かつて有難き仕合
せにございませう、左様なれば折角の思召しでございませうから、御辭
退いたさず有難く頂戴いたします」とやがて右の金子を貰ひまし
て、其んなり三人の者は東の方へドン／＼と駆け出して去つて了ひ
ました、大勢の見物は呆氣に取られまして「何と何うだい、初めは
無暗に威張つて居やアがつたが、あの有様は何だ、意氣地のない奴

もあればあるものだ」とガヤ／＼云ひながらも、東西へ立去るといふことに相成りました。すると跡に於て彼の若武士は柳生先生の前へ罷り出でまして、懇懇に両手を支へ、武士實に只今は有難き仕合せにござります、貴方よりお言葉を下し置かれましたればこそ、彼奴等三名は這々の体で逃げ去つたやうな次第でござります、それが爲めに私も真劍の勝負を致すに及ばずして、何うやら斯うやら無事に納まりましたることとござります、何でも御禮の申しやうがござりませぬ重兵衛、して汝は當年何歳に相成るか、武士左様でござります、私は本年十八歳に相成ります、重兵衛成程、若年と見たが十八歳と申すか、ア、何うも年若に似合はず落着き拂つたものである、吾れ先程よりの様子を見て居りしに、初めのははははははは、中ばに至つて武士の度胸を見せ、遂に先方の詫るに伴れ之れを免して取らせ、その上聊かの金子でも遣はしたといふのは、天晴見上げたる心底である、誠にも男もあり義もあり又た仁もある汝の取計らひ、實の

武士は左様な心掛けが無くてはならぬ、この上からは何れの者かは存せぬが、此方の供を申付けることであるから、兎も角も今より我れに従いて参れ、武士ハ、誠に仰せは有難う存じます、先程貴方に出席ひましたる節申し上げましたる通り、私は少し前途を急ぎまするものでござりますから、その儀ばかりは御免を蒙ります、重兵衛、何と申す、前途を急ぐといふか、全体その方は如何なるところの身分の者であつて、また誰れかを尋ねると申して居るが、して何者を尋ねるのであるか、武士左様でござります、私は柳生重兵衛大先生に是非御目通りを致したいと思ひまして、その御跡を慕ひ参りますものにとござります、兎角申して居るうちに、時刻が移りますから御免を蒙ります、重兵衛、ア、稀代なことを申すことである、然らば汝は柳生重兵衛に會ひたいと申すか、その汝が會ひたいといふ重兵衛三郎は此方であるぞ、これを承はりますとハッとはかりに驚きまして、武士さては貴方が柳生の大先生であらせられますか、と

は知らずして是れまで段々との御無禮の段、御立腹もござりませうが、平は御容赦下し置かれませうと只管詫入りませうこと
でございます重兵、只今の汝の言葉に、是非此方に會ひたいと申して
居つたが、さては汝は何か望みのあるものであるか、全体我れに會
つて何用があるか、その用件の次第を申せ、都合によれば又た余が
力になつて取らせることである、殊に先刻汝が三名を相手として、
斬り結ばんとして鞘挿ひに及んだるもの一刀、一点の曇りもなく、明
皎々たる有様を見ると、天晴れなる心掛けのものに致して、何か心
中に望みのあるに違ひない、その仔細を遠慮なく申せ、武友ハ、ッ、
誠に恐れ入り奉ります、御眼力、この上からは何をか秘みませう、
私ことは奥州弘前の城主、津輕越中守の家臣にござりまして、五百
石を頂戴仕りました鈴木源左衛門の倅、同苗源三郎と申す者でござ
ります、兄弟は三人ござりました、兄なり姉の兩名は不幸に致し
て、幼少の頃は病死を遂げました、よつて父源左衛門は跡に残つ

た私をば一入不憚がりました、大切に育て呉れましたることござ
ります、然るに昨年の秋のこととござりましたが、父は同藩の東軍
流の指南を致します早川典勝と申しますものと、聊かの園基の
争ひより遺恨を生じ、遂に父源左衛門は早川の非道の及に罹つて相
果てましたることとござります、その後早川といへる奴は國許を逐
電いたしました、それが爲めに鈴木の家は断絶にもならんと致し
ましたのを、漸う御家老に絶つて殿にお願ひ申し、仇討ちの免状を
頂戴いたしまして、一人の母をば親戚の者に預け置き、昨年の暮れ
に國許を出立いたしました、素より仇の早川は武藝の指南を致す
はどのものでござりますから、若年の私の腕前では到底討ち取るこ
とは叶ひませせん、よつて何うぞ致して十分腕前を磨いた上、仇を討
ちたいと思ひまして、態々江戸表へ出て、少時滞在をして居ります
るうち様子を承はりましたところ、當時天下の御名人と仰がれま
するの、柳生重兵衛先生を除いては外にはないといふこととござ

りましたから、何卒先生の門下に加はつて御教導を願ひ奉らんと心得、熊々木挽町の御屋敷へ罷り出でまして、御願ひ申し上げましたところ、すでに今回何れへかお出ましに相成つて、何日か歸りにならざるも分らないこのことでござりました、如何はせんと途方に暮れて居りましたところ、圖らずも豆州公御家中なる知人に會ひ、承はれば生麥表にて先生をお見受け申したか、多分上方筋へ赴かれ、様子のこと開は有難しと、取る物も取敢へず、直に江戸表を出立いたしまして、お跡を慕うて参りましたか、兎も角も箱根の關所まで参つて、大先生が御通行に相成つたるや否やといふことをお尋ね申さうと心得まして、漸う當所まで参りましたところ、當所にて先生に御目通りを仕りますといふのは、何より以て私の幸福、仔細といふは右様の譯柄でござりますれば、何卒今より私を門弟と成し下されまして、改めて御道中の御供を仰せ付け下さいましたれば、如何ばかりか有難き仕合せに存じ奉ります」と涙を流し

て段々ど頼み込みに及びました、先程よりサツと之れを聞いてお在でになりまして重兵衛先生「よ、い、然ういふ次第であつたか、先程途中で出會つた時から致して、汝は何か大望を懐くものであると心得たることであるから、それゆゑ供を致せと申したやうな次第である、實は余は此の度思ふ仔細あつて、まづ上方より中國、九州と國々を遍歴いたさんと心得る、旅中ながら劍道は教へ取らせることである、併しなから今其方に改めて申し聞かせ置くといふのは、餘の儀でもない、汝の身体は謂はゞ、大切なる身の上である、然る大望を抱へて居ながら、只今のやうに無益なる真劍の勝負を致さうと爲したるは、甚だ以て心得違ひ、若し彼れ等の腕前が言葉の如く確かなるものであつて見れば、それが爲めに汝は無益に一命を捨てなければならぬやうな次第である、總体大望を抱へしものは堪忍を第一とせんければならぬことである、この後は縦令何のやうなことがあらうとも、真劍の勝負などいふことは決して相成らぬ、能く我

が言葉を守り居れ、然る代りには何時汝が仇早川典膳に出會はうと
も、汝が及ばざる時には、必ず余が助勢を致して取らせらるから、一岐
度この儀を守れよ」と、呉れ、も教訓を致された、源三郎は
嬉し涙に惹れまして、源三郎に以て有難き仕合せにござります、必
ず先生の御教訓を守りますることにござります、重兵衛、最う然ら
ず、源三郎、それでは改めて此の具細工を持つて呉れ、源三郎委細心得
ましてござります、そこで具細工その他のお荷物までも携へまして
御供を致すといふことに相成りました、先づ大磯へ参りまして、當
所で中食の砌り改めて師弟の御盃を下し置かれました、さて翌日に相成りま
いまして、その夜は小田原の驛に泊りました、さて翌日に相成りま
して此の小田原を背後になし、やがて箱根へお掛りに相成りました
ることでもござります、何分この箱根は七湯と申しまして、湯本は申
すまでもなく、氣賀、塔の澤、葦の湯を首めとして、湯が澤山とさ

いますから、これへ湯治に来るものも多く、従つて方々に宿が澤山
ございまして、丁度頃合ひな季節でもござりますから、それで此の
箱根へお出でになりますと、湯本に一週問ばかり御滞在なさいまし
て、御入湯といふことに相成りました、そこで萬事鈴木の起居動作
を御覽なさいますと、なか、若年ながらも感心なことに、柳
生重兵衛殿を主人の如くに敬ひまして、少しも其の言葉に逆はず、
神妙に働きますから、重兵衛殿は一入不憚に思召して、源三郎々々
と、お心置きなくお使ひに相成ります、なほ其の上夜分お寝みにな
る砌りには、軍學等のお話をなさいまして、劍道の奥義は斯様なも
のであると云つて、その形なとをば教へてお遣りなさいますこと
にござります、何がさて當時天下の御名人と謂はれる柳生重兵衛大
先生の御教訓でござりますから、一言として無駄なことはござい
せん、それを一々その身に會得の参りますまでお伺ひ申して、胸中
に込み込むといふのでござりますから、源三郎の伎倆は日々に上達

を致します、斯くて當所に丁度七八日御滞在になりましたが重兵衛
 うだ源三郎、この所の湯治も厭いたではないか源三御意にござりま
 す、私も十分入湯をさして頂きました重兵衛、それでは出立をしやう
 といふので、その翌日遂にこの湯本を御出立に相成りまして、畑の
 驛から箱根権現へお出でになりましたして、これへ御參詣を致され、そ
 れより下り阪に相成り、蛇腹峠から今山中の驛へ下りやうと致しま
 したる折しも、一人の婦人が病苦に惱んで居るのを助けましたのが
 縁となつて、三島の驛へお出でに相成り、當所にて圖らずも重兵衛
 殿大病に取合はされるといふお話しでござりますが、一寸息御免
 を蒙ります。

第 七 回

さて柳生重兵衛三殿殿は、鈴木源三郎を供にお伴れに相成りまして
 今蛇腹峠から麓の方へ下りやうとなさいますと、道の片傍で一人

の婦人が、癩を發したものと見なしまして、類りに苦しんで居るとこ
 ろの様子でございます、その傍で駕籠屋と見なしまして、其の所に一
 挺の駕籠を下し、二人の者が婦人の背後に廻つて背中を撫で擦り、
 ウロウロしながら介抱をして居ります、なか／＼癩は納まりま
 せんか、ハハハと歯を咬み緊り、眼を白黒いたして惱んで居りま
 する、〇ヤイ相棒、確かりしろい、△路棒め、乃公を叱つて何うす
 るぬ、お内儀さま、氣を確かにお持ちなさい、たゞ／＼二人はウロ
 〳〵いたして居るとのみでございます、ところへ廻り掛つた柳生重
 兵衛殿、この体を御覽に相成つて重兵衛、さて此の婦人は癩のため
 苦しんで居るか、〇へエ且那樣、頓ばり手が着けられませんか、私共
 も此様なまな激い癩に出會つたことはないのございまして、實に
 困つて居ります重兵衛、〇へエ、なか／＼何うも甚い力量な
 グイツと肩の所を押へて居れ、〇へエ、なか／＼何うも甚い力量な
 んでございまして、なんば二人掛つて押へましても徹へませぬので

重兵源三郎源三ハ、ア重兵何處かで水を求めて参れ源三長まりまし
 た。そこで腰なる御印籠より薬をお取出しになりまして、齒を咬ひ
 緊つて居りますのを、漸うのことに開けさせお薬を其の口中へ含ま
 せられましたる所へ、源三郎は水を汲んで参りました重兵源三郎、
 其方水を一杯口に含んで、是れへ吹込んで遣れ。迷惑ながら源三郎
 は、師の言葉でございませうから、漸う彼の口中へ水を吹込んで遣
 りますと、それが爲めに薬はマツと咽喉を通りました、すると餘程
 の妙薬と見なしまして、暫時に致して婦人は氣が付きました様子、之
 れを見て葱籠屋も大きに安堵の思ひをなし、頻りに身体の汗を拭い
 て居りますと、やがて婦人は兩眼を見開き、女全体委は何うした
 んだね。○御内儀、貴方ア何うしたとこの願ぎぢやアございま
 せん、實はこのお武士様が結構なお薬をお呉んなさいましたので、
 お癒りなすつたんでございませうが、大体貴方は先程から瘰をお發し
 なすつたものと見なしますが、私共は何の位困つたか知れません。こ

れを聞くと女は大いに驚きました、片傍を見ると、立派なお武士
 が二人在らつしやいますから、婦人は大きに悦びまして、女誠に御
 親切に有難うござりました、妾には斯様な持病がありました、時々
 發つて困ります、すでに一命にも關はるところをお助け下さいまし
 て、有難うござります、重兵何うだ、氣分は快くなつたか、女有難う
 ござります、お蔭様を以ちまして、すつかり快くなりました、重兵ア
 、夫れは結構、余も少々然ういふ持病があつて、大きに困ること
 ある、して汝は何れのものである、女ハイ、妾は此の麓の三島の驛
 の者でござりまして、明神前に住居を致します、伏見屋作兵衛の
 家内すみと申しします、この中から時々斯様な病氣が發りますと
 こるから、保養の爲めに箱根の方へ湯治に行つて居りましたので
 ござります、ところが此の度宅に用事が出来まして、宅より驛の廻
 屋が迎ひに来て呉れましたので、今日歸らうと思ひまして、漸う當
 所まで出て参つたんでござります、誠に危いところを御助け下さい

まして、有難うござります、就いては恐れ入りましてござりますが、
今晚三島にお泊りなさいますならなれば、一陋苦しうはござります
が、何うぞ妾の宅へお出でを願ひたうござります、重兵衛、それは
千萬辱しけないが、別段汝の宅は旅籠屋といふ譯でもあるまいから
それでは却つて迷惑であらう、三島の驛には幾らも宿屋があるから
ア兎も角も其の宿屋に泊るとしやうすみではござりませうが、今
日の御禮も致したうござりますから、是非とも御越しのほを願ひ
まする」と云つて居る所へ、一組の駕籠屋が空駕籠を昇いで箱根の
方から下りて参りました、「オイ權兵衛、何をして居るんだ、〇オ
兄弟、好い所へ来た、お内儀、丁度幸ひですが、この旦那に乗つ
て頂させようかすみ、ア、何うぞ然うして貰つてお呉れ、〇旦那様
幸ひ駕籠も参りました、却つて此の下り坂は足を痛めるものでござ
りますから、是非何うかお乗りなすつて、御一緒にお出でを願ひま
す」そこで重兵衛殿も折角の勤めでござりますから、それではと云

ふので、此の駕籠にお乗りになりなされた、されば駕籠脇には源三
郎が附き添ひまして、遂に二挺の駕籠はこの所を出立いたし、その
日の未刻頃はひに三島明神前伏見屋作兵衛の宅へ到着いたしました
見るといふと間口は七八間もござりまして、なか／＼の大家でござ
ります、尤もこの伏見屋は呉服物を商ひまして、まづ此の三島では
一二を争ふ金満家で、數多の奉公人が居りますこととござります
「ソレ、御内儀がお歸りになつた」といふので、店の奉公人は早速
このことを奥へ知らせますると、亭主の作兵衛は夫れへ出て参りま
した、すると女房のおすみから「實は途中に於て是れ／＼新機々々
の譯合でござりまして、彼のお武家に大難を助けて頂きました」と
其の次第を委しく物語りました、作兵衛は非常に悦びまして、まづ
重兵衛殿主従を奥へお通し申し、駕籠屋には賃錢の外に何程かの酒
手を取らせて之れを歸して丁ひ、やがて家内の者に申し付けて酒肴
の用意を致させ、御兩所を饗應すといふことに相成りましたが作兵

失禮ながら先生様の御姓名は何と仰せられますか」と尋ねられまし
 たが、何うも柳生重兵衛と云ふのも如何はしいと思召して重兵衛者
 は入木忠兵衛といふ者である」と出鱈目の名前を仰しやつて、その
 日は當家の家内の者の靈應に預かり、十分御酩酊の上、お疲れも出
 ましたることをごさいますから、お寝みに相成りました、ところが
 何ういふものでございませうか、その夜、夜半頃はひより、重兵衛
 先生の身体に非常なる大熱が發して参りました、それが爲めに重兵
 衛殿はウソく、と唸り始めました、源三郎は大きい驚き源三先生、
 何うか遊ばしたのでござりますか、重兵衛先程より身体にこのやうな熱
 氣が發して参つて、何うも頭が重くツツて困る源三「それは容易ならぬ
 ことでござります、お風邪でも召したのでござりませう」と種々介
 抱に及びました、そのうちに夜が明けまして、當家の家内の者も
 其所へ來つて、これを見ると大きに驚きました「何か召上つたもの
 が中つたのでござりませうか」と非常の心配でござります、そこで

捨置く譯にもなりませんから、豫てこの伏見屋へ出入を致して居り
 まするお醫者を招びまして、早速容体を診させましたところ、「こ
 れは中々の大病でございまして、餘程大切に看病をせぬと、この熱
 が今少し激しくなつたら、遂には餘病を惹起すやうなことが出來ま
 すから、汝して油断はなりません」とあります、依つて先づ大切に
 介抱を致すといふことに相成りましたが、實に源三郎の心配と云ふ
 ものは如何ばかり、夜の目も寝ずに種々雑多に介抱を致しまするが
 何分病氣の染つて参るときといふものは致し方のないもので、いく
 ら良薬を用ひましても、却つて夫れが身体に逆ひまして、頓と受附
 けぬのでございませうから醫者が何様な名人でも徹へませぬ、だが病
 人の方では然うは思ひませぬ、彼の醫者の薬は一向効かぬといふと
 ころから、他のお醫者と取換る、それでも癒らぬと又取換へます、一
 どころが癒り小口になつて参ると、醫者が其様に骨を折らなくつて
 も、天然自然に癒るといふやうな勘定でござります、丁度お醫者も

三四人取扱へまして、色々介抱を致しましたが、何分にも御病氣は益々暮るとばかりでございます、そこで源三郎は少し先生の氣の鏡まつて居らつしやる時、他人の居ない折を考へまして、「ズイツと枕許へ進み寄り源三先生、如何なものでござりませう、万一のことがありましてはなりませんから、寧ろ木挽町の御屋敷へこの事を注進いたしませうか重兵「イヤ」それには及ばぬ、初めより柳生重兵衛と申して泊まつたのでない、ほんの一時の偽りを述べ置いたることであるから、今更病氣に罹つたからと云つて、實は柳生重兵衛であるといふのも耻ぢ入る次第であるから、「ア」と仰しやいますからにして置け、真更死ぬやうなこともあるまい」と仰しやいますから源三郎も致し方なく、尙も色々介抱を致して居ります、そのうち「早や一月ばかりも経ちました、ところか漸う病氣も癒り小口となつて参りましたものを見ね、この頃では一枚紙を刺がすやうに、日々快くなつてお出では相成りますから、源三郎は大きに悦びま

して、お側に在つて尙も怠りなく介抱いたして居ります、ところが或る夜重兵衛殿は、不圖目を開いて御覽に相成ると、何うしたとにか、源三郎は枕許に居りません「彼れも此方の病氣ゆゑに、餘程心配して居るものと見て、この頃は眼も落凹み、顔色も常ならぬ有様、夜も碌々寝入もせず、神妙に介抱いたし呉れることであるから介抱勞れの出るも無理はない、大方今夜は次室へ下つて臥して居るのであらう、ア、彼れは若年者ではあるが、その志は誠に感心なものである」と大いにお悦びになりましたが、その儘又々心地快げに「エヤ」と寢込んでお了ひなさいました、然るに源三郎は少時経ちますると、寒氣の時候とは云ひながら、寒疾を立て、唇の色も變りアルく、慄へながら、然あられ体にて、密と次の室より還入つて参りました、枕座に座り、重兵衛殿の様子をヤツと眺めて居りました、たが「ア、有難い、さては先生には大變お心持快くなつたと見えて熱くお寝みになつて在らつしやる、この御様子では、最う程なく御

全快遊ばすことであらう、ア、想ひ出せば先月南郷の驛外れに於て先生に危き所を助けられ、その上ならず有難きところの仰せを蒙りそれよりといふものは、唯々先生を杖にも柱にも頼んで居りしに、圖らず此度御病氣に罹らせられ、醫者共の言葉には、御一命も危ないこのこと、あの御様子では、我が望みを遂げんも如何あらんと、種々に心を痛めたることであるが、神も我が志を感じ玉ひしか、この頃では先生の御病氣も日に増し御快方に越いて参られ、何より以て有難いことであるが、この上ながら、何卒一日も早く先生の御病氣御全快遊ばすやうに致したいものである」と、師を懐ふ心の篤き源三郎、重兵衛殿の快癒に越かれるのを悦び、嬉し涙に暮れて居りまする、その内に寒疾も取れ、唇の色も常に復し、身体に少し温氣も出ましたものと見ゆすが「ア、最う夜半過ぎ、明日の朝まで待たうとは思ふが、實に腹が空つて堪らぬやうになつて来た……オ、はんに、今夜も御亭主の御心付け、見れば此の菓子鉢に餅菓子か深

山入れて置いてある、切めて是れなりともお相伴に……」と、餘程空腹であるものと見ゆ、源三郎は密と手を伸ばして、片傍に在りまする菓子鉢の餅菓子を取り、これを一口口中へ投り込みました、併し「んや、云はして先生の目を覺ましてはならぬと思ひましたか、遂に其のまゝ菓子を咀嚼もししないで、呑み込んで了ひました、續いて又た一口口中へ投り込んで、いま呑み込もうとしました、が餘り慌てたものですから、咽喉に塞つたものと見ゆ、眼を白黒させて苦しんで居ります、この時重兵衛先生は不圖眼を覺まし、この様子を御覧になると、ツと起き直り、グイッとお睨め付けになりまして重兵衛「源三郎、汝は何を致し居る、よ、甚だ不作法千萬ではないか、不埒者奴」と殊の外の御立腹でございます、源三郎はハッとはかりに驚きながらも、漸う口中なる菓子を呑み込みました、疊に眼を擦り付け源三郎「ハ、ツ、誠に以て恐入りました、新様は新しいことを致しまして、實に何共お詫びのしやうもござりませ

ぬ……重兵衛、源三郎、汝は若年なれども大望を抱へた身の上、殊に常日頃より心掛の宜き者である。此度の我が病氣に就いては、寢食を忘れて段々との介抱、此方に於いても大いに満足に思ひ居ることである。余は敢て菓子なりとも、他人の寢息を窺つて盗み食ひをなし、合一つの菓子なりとも、他人の寢息を窺つて盗み食ひをなし、咀嚼しもしない。密と呑み込む心根にては到底望みを達せんこと思ひも寄らぬ。見下げ果てたる其の心根、他の事とは違ひ、然る申しき不作法の致し方、然る卑しい心根にては到底望みを達せんこと思ひも寄らぬ。見下げ果てたる其の心根、他の事とは違ひ、然る申しき根性の者と見たる上は、片時も我が側に置くことは成り難い。早々出て行け、師弟の縁は絶つたぞ」と重兵衛殿は何時にも御立腹もなく、恐入つて差俯ひて居ります。折しも取合の唐紙を密と開いて、當家の亭主伏見屋作兵衛は其室へ這入つて参り、重兵衛殿の前に着座をなし作兵衛、深夜に貴下方のお話半ばへ罷り出でまして

誠に相済みませぬが、私も目を覺まして便所へ参りました。歸るに頻りに先生の御立腹のお聲が聞えました。と云うところから、源三郎殿が何か都合なことをなすつたのではあるまいかと、實は先程から次の室に在つて、委細のことを行聞きを致して居りました。源三郎殿は斯ういふ温順な方ゆゑ、何事も仰しやいませんが、實に先生の御病氣この方といふものは、源三郎殿は夜の目も寝ずの御介抱、その上ならずもこの中より、すでに今日まで七日の間といふもの、深夜先生の御寢みの隙を窺ひ、密かに裏の井戸にて水垢離をして、一心に三島明神様に先生の御全快をお祈りなさいまして、それのみならず其の間は断食と堅く仰しやいまして、何一つとして召上りませぬ、今宵は最早満願のことでもあり、大きに御衰弱なさいました。る様を見て、餘りのお氣の毒さに、御夕飯の砌り、少しにても食事となさいます。やうと、段々とお倦り申しましたが、何うぞ先生の御全快遊ばすやう、御冥護下さいませますやうと、折角明神様に御願

ひ申したることゆゑ、今夜夜半過ぎて、今日の縁の切れるまでは、
 決して食事は致さぬと、何うしてもお上りになりませぬ、それなれ
 ば先生の御枕許にお菓子を用意とさますから、若しお腹が空いて堪
 らぬやうになりましたら、あれを召上つて在らつしやい、そのうち
 に夜も明けませうから、食事を差上げますと申して置きました、
 それゆゑ之れを召上がつたものと心得ます、何も源三郎様が卑しい
 心で盗み食ひをなすつたといふ譯ではございせんから、何うぞ今
 晩のところは御免し下さいまして、これまで通り御側にお置き下さ
 いまするやう、私よりも共々にお願ひ申しますと、亭主は段々ど
 取成しを致しました、先程から熱々始終の様子を聞いてお在にな
 りました重兵衛殿は、思はずホロリと涙に暮れ重兵衛、源三郎、
 ては汝は夫れはどまで此の重兵衛の身と思つて呉れるか、とは知
 らずして我れ些かの事を立腹いたし、谷め立てをなしたるは我が過
 り、能くも其方は、この寒中をも厭はず水垢離をなし、尙は其の上

断食までもなして、我が病氣の全快を神に祈つて呉れた、ア、其の
 志は實もつて辱しけない、先程よりの無禮の段は、此方より詫びる
 ぞよ源三ハ、ツ、何う仕つりまして勿体ない、それではお免し下し
 置かれまするか、ア、この上の喜びはござりませぬ重兵衛、必ら
 す心配するな、この上ども余に従いて居れ、余は命に代へても其方
 の力になつて道はずぞよ源三ハ、ツ、ア、誠に有難き仕合せに存じ
 奉つりますと、源三郎は涙に暮れて悦びました、その内に夜
 はホノノと明けましたから、早速亭主は家内の者に申付け、食事
 の手當を致させて、源三郎に侷めましたることとでございます、され
 ば彼れの志を神も感應ましくしたるものと見ゆ、遂に日ならずして
 重兵衛殿の病氣御全快といふことに相成りました、よつて源三郎を
 首り伏見屋家内の者の悦びは如何ばかりでございませう、そこで何
 時々々までも當家に厄介になつて居ても氣の毒なる次第、最早近々
 に當地を出立いたさうといふので、その御用意に及ばれましたるこ

斬 番 六 十 三

とでございませう重兵衛源三郎、最早明日あたりは當所を出立いたさうか源三郎如何にも夫れがお宜しうござります、就きましては先生の御病氣御全快の御禮参りと致して、明神様へ参詣をさして頂きましても掛ひますまいか重兵衛それは苦しうない、併し出る時には大小刀はならぬ、無刀で参れ源三へ……重兵衛といふのは、其方は大事を抱へた身の上である、若し途中に於て間違ひ等の出来たる時は、腰に大小刀があれば、刀の手前退引ならぬといふやうな場合なきにしてもあらず、だが無刀なれば詫びて歸つても差支へはない、よつて参詣するならば無刀で行け源三有難うござります、それでは先生、一寸御禮参りを致して参ります」と伏見屋の家内の者に萬事頼んで置いて無刀のまま、家を出でました、やがて三島の明神へ参ります、先生先生の御病氣全快の儀に就いて、改めて厚く御禮を申し上げました、このことでございまして、それより明神の境内うらと彼方此方と見廻りまして、遂に裏手の方から出でまして、一二町横町へ廻つて参り

斬 番 六 十 三

ますると、一軒の家で頻りにボン／＼と竹刀の音が聞えて居ります、から、ヒョイツと近寄つて見ますと、横手の方に櫛子窓がありまして、これが道場と見ゆ、その内方で竹刀を打合せて立合を致して居ります、内方の様子を見て、幸ひ窓の障子が開いてございまして、傍へ立寄つて、内方の様子を見て見ると、道場の正面には、先生と見ゆ、頻りに指圖を致して居ります、その前で二組に分れて「お面、お籠手、お胴へ一本参ります、未だ、お面だ、ソレツお胴だ」と掛聲激しくボン／＼と聲合つて居ります、源三郎は大きに驚きました、大變な立合もあればあるものだ、あれでは少しも剣術にはなつて居ない、双方が戦ひ合ひを致して居る、あれでも剣術であるか」と思ひながら、餘り不器用なる立合が可笑しさに、頻りに内方の様子を眺めて居りました、その身は柳生重兵衛先生のお側に

斬 番 六 十 三

従いて居りましたして、別段手を下して稽古は致しません、緒始軍學
 のお話を承はりましたして、之れを十分會得を致して居りますから、彼
 れ等のをかしたな腰付を見て、思はず知らず笑ひました、すると正面
 に扣へた先生は「ヒョイツとこいつを見付けまして、非常に立腹を致
 した先生「コリヤ、其所に行つて居るのは何だ、武士たるものゝ表裏
 我々が劍術の稽古をして居るのを覗いて、高笑ひをするといふのは
 無禮千萬な奴だ、此所へ這入つて来い」源三郎は根が温順な男です
 から、大きに悪いことをしたと思ひまして、其んなり黙つて逃げ歸
 るといふやうなこともしませず、兎も角も道場へ這入つて詫びをし
 て歸らうといふ積りになりました、表の玄關の方へ廻つて来ます
 と、立派なる表札が掲げてありまして「東軍流指南尾形軍次兵衛道
 場出張所」と認してございますから、我が仇の早川典勝も東軍流で
 あるが、此奴は仇と同流であるなど、立止まつてヤツと表札を見て
 居りますと、内方から「ラ、ラ、ラ、と二三人の門弟が飛び出して参り

斬 番 六 十 三

○「先刻格子外で笑やアがつたのは汝か、サツ従いて来い、何うし
 ても先生が伴れて来いと仰しやるんだ源三誠は何うも済まぬことを
 致しました、何うぞお免しを願ひます ○此所で詫まつたつて仕方
 がない、詫びるなら道場へ来て詫びる源三「へ、ぢやア左様仕りま
 せう」と門弟に伴れられてやがて道場へ這入つて参りますと、彼の
 先生と思しきものは此方に向ひまして軍次「コリヤ、汝はこの道場に
 於て稽古いたして居るところを見て、何が可笑しくつて笑つた源三
 何う致しまして、笑ふなせ、いふことは決して致しません、唯々
 稽古を拜見いたして居りましたので……軍次「黙れ、如何やうに汝が
 申すとも、高笑ひを致したに違ひない、我々の立合を見て笑ふとい
 ふところを見れば、定めて殺分か腕に覺があるものであらう、サ
 ツ、覺があるなら一本立合へ源三「なかく、以ちまして、立合ひな
 せ、いふことは到底出来ません、第一劍術といふものをば存じませ
 ぬから軍次「汝は全体何處の奴だ源三「へ、私はこの三島の驛の伏見

屋作兵衛の宅の召使ひの者でございます置次「何だ、伏見屋の召使ひだ、この野郎、町人の身を以て剣道の立合ひを見て笑ふといふのは、甚だ以て不届き千萬な奴だ、サツ、一本立合ひをせい……オイ小林、支度を致して立合はつしやい」今がて小林といへる者は身支度を致して夫れへ出ました小林「サア来い、一本立合つて遣らう」斯う云はれて見ると、鈴木源三郎も今は断るといふ譯にもなりませんし、そこは年が若いから、實の所は一本立合つて見たいのでございませす源三「それはとまでに仰せ下さいますなら止むを得ませぬ、剣術は存じませぬけれども、如何にもお相手を致しませう」と早速身支度を致しまして、一頭合ひな木剣を持つて其れへ出でました、そこで双方十分位取りを致しましたが「ヤツ」と聲を掛けて小林が、上から激しく撃ち込んで参りましたるを「心得たり」とガツキを受け止り、反す竹刀にて「お面」と云ふより早く一本撃ち込みました、その腕前は中々小林などの及ぶところではございませぬ、これを受

け止りやうと致して、小鬘のところに甚かに撃たれ「参つた」といふので、這々の体で退りました、源三郎は面白くつて堪りませぬから源三甚だ恐れ入りましたが、今少々お強いところをお願ひ申したうございます置次「ナニ、少々お強いところを願ふ、巫山殿たことを吐しやアがる吉田、尊公出なさい」「ハッ」と答へて、竹刀を提げて出ましたのは、これは小林から見ると餘程出来る男です吉田「サア来い、乃公は當先生の高弟だ、吉田惣次郎の腕前を見よ」と激しく打ち込んで参つた、凡そ五六本もボツ／＼撃ち合せて居りましたが、そのうちに源三郎は「お胴ッ」と一本撃ち込みました、何條もつて堪りませうや、忽ちバツ／＼吉田は其處へ倒れました、その跡へ出まする者は何れも撃たれるといふので、凡そ八九人といふものは、みな源三郎の爲に不覺を取りました、先程から此の有様を見て居りましたる常道場の先生、尾形軍次兵衛に於きましては、非常に憤りまして、忽ち後鉢巻玉禱の用意に及び、袴の股立を高く取上げ、四

尺もあらうといふ程の棒を携へ、マイツと其の所へ出でました軍次、
 マツ町人、此所へ来い、汝ア不埒な奴だ、先程から見て居ると、町
 人とは申したが相當に遣り居る、實は我が道場を破りに参つたんで
 あらう、この上からは尾形軍次兵衛が直々に相手をして遣るんだ
 源三郎は得物を片傍へ捨てまして源三なく、以ちまして、貴下に
 お相手などいふことは到底出来ません、何うぞお免しのはせを願
 ひます軍次、黙れ、今更詫びたところが決して免すべきところのもの
 ではない、是非とも来い源三、それはせまでに仰せ下し置かれますれ
 ば、一本御教導に預かります」と云ひながらも、右の竹刀を取つ
 て中段に構へまして源三何うかお手柔かに願ひます軍次、生意氣なこ
 とを吐すな、手柔かく立合つて役に立つか、成るだけ手強く遣つて
 やるぞ」と彼の棒を振振りました、源三郎は中段に付けたまふ、少
 時双方腕み合つて居りましたが、流石に尾形は道場を開いて居りま
 するだけあつて、これは門弟のやうな具合ではありませぬ、源三郎

が中段に構へて居りまする奴を、此方は上段から激しく撃ち下して
 参りました「心得たり」とガツキリ受け止めましたが、此は抑も如
 何に、彼の四尺ばかりの棒の先から、怪しげな鎖に着いた分銅が飛
 び出して、源三郎の額にゴツンと中りました、何かは以て堪りませ
 うや、眉間は破れ、血汐はバツと其の所へ進つた「アッ」と云つて
 額口を押へ「参つた」と云ふうちに、早くも胴へ撃ち込みましたか
 ら堪りません、バツとリ其所へ倒れまします、軍次兵衛は起しも立
 てず續けさまに七八本撲り付けました源三参つた、参つた、参つた
 と頻りに聲を立て、居ります軍次何うだ、何うした、斯様な未熟の
 腕前を以て、能くも我が門弟を大勢打ち据ゑたな、甚だ以て不埒な
 奴だ、汝は此方の道場へ疵を付けに來せた奴だな、勘辨なり難いと
 ころではあるが、今日のところは命だけは助けてやる、早く歸れ痴
 漢奴、以來は此方の道場の前に立止まつて笑つたりなせ致すと、そ
 の分には助けて置かぬぞ、御門人、彼奴を玄關から摘み出し玉へ」

源三郎は懐中から手拭を取出して眉間の傷口を押へながら源三郎大に先生相濟まぬことを仕りました、何うもハヤ恐れ入つた貴方の胸前なれども新様なことを伺ひましては恐れ入りませうが、貴方の棒の先から妙な物が飛び出しまして、私の眉間に中りましたか、これは全体何といふ棒でございますか、後學の爲めに汝が聞きたいといふならば教へて置いて置るから、併し生意氣なことを吐すな、其方如き町人に是れが分つて堪るか、併し後學の爲に汝が聞きたいといふならば教へて置いて置るから、併し堤山城守入道いたしたる後、賢山と改名いたしました、その堤賢山が工夫を凝らした、これは寶山流の振杖と申すものだ、以來もあることだ、能く覺て置け、これは其の昔太閤秀吉公に武藝を御指南申し上げたる、無念ながら傷口を押へて尾形の道場を出されたが、ア、残念なことである、併し面体に斯くの通り傷を受け、若し先生に見付

かつたら何様に叱られるか知れないと思ひまして、再び明神の境内へ這入つて、まづ手水鉢の水を以て額を洗ひ、血の止まるを待つて、一寸傷口に紙片を張りまして、何うぞア先生に知れぬやうにと思ひながらも、やがて伏見屋へ歸つて参りますと、裏手の方へ廻りまして、コソコソと這入つて参りました、折りしも椽側へ出てお在でになりました重兵衛殿は之れを御覽なすつて重兵衛「コソヤ源三郎、何を全体いたして居つた、大層遅くなつたではないか、源三郎に先生、遅刻を致しまして相濟みません、ツイ境内うちを彼方此方と見て居りまして、それゆゑ酷く遅うなりましてございます、何うぞ御免を願ひます」と傷口を見られないやうと、横へ向けて、其んなり裏口より這入らんと致しました時、目敏くお見付けなすつて重兵衛「コソヤ、源三郎、待て、其方眉間を何うした源三郎、これは其の何でござります、只今歸りがけにツイ慌てましたものですから、鳥居に行き

當りまして、斯様な傷を受けましたので……重兵、黙れ、其方は若年
 なれども随分心掛のある奴だ、夜分ではあるまいし、斬る白晝に鳥
 居に打衝かつて眉間に傷を受けるやうな馬鹿があるか、誰れかと喧
 嘩を致したんだな、なせ其様に偽る、誰れかに打たれたのであらう
 有体に云へ源三、何うも先生恐れ入りました、實は斯様々々斯様の次
 第でござります、と尾形軍次兵衛といふ、剣術遣ひの道場を覗いて笑
 ひましたばつかりに、尾形の爲に斯く打たれましたといふことを、
 委しく物語りを致しました、これを聞いて重兵衛殿は「汝が、東軍
 流とあるから、仇の流名と同じと心得立合を致したとあれば、それ
 を強ち咎めるといふのではないが、汝は失望を抱へたる身の上では
 ないか、殊に武士たる者が面上に傷を受けて歸るなどいふことは
 大いなる耻辱である、大体其方が道場を覗いて笑つたり何かするか
 ら宜くない、けれども立合に及んで眉間を破られるといふ筈はない
 が、全体先方は何ういふものを用ゐたのである、源三誠、夫れが不思

議でござります、四尺ばかりの棒でござりまして、最初向ふが八組
 に振被つて、私は中段に構へて居りました、ところへホカリーと撃
 ち下して参りましたから、ガツキと受けました、すると其の棒の先
 から鎖に附いた分銅のやうなものが飛び出して、夫れが眉間に中つ
 たのでござります、重兵衛、ウ、さては賢山流の振杖を用ゐたんだな
 源三、ヘ、不思議な流名であると云つて尋ねましたら左様に申して
 居りました、重兵衛、何といふ奴だ、源三、表札には尾形軍次兵衛と認
 ざりました、重兵衛、不埒な奴だ、門人の立合を見て笑つたからと云つて
 籠手の一本も撃ち込めば夫れで宜いのに、面体に傷を付けるなどい
 いふは、甚だ以て無法な奴だ、何うも此のまゝに容赦をするといふ
 ことは相成らぬ、我が目から見るときは虫類同様の奴だ、速かに此
 方の案内を致せ、此方が参つて仇討をして遣る、源三、誠に以て恐れ入
 ります、重兵衛、イヤ、苦しうない」と根が柳生重兵衛殿の御氣象で
 ござりますから、少しも猶豫なく、早速源三郎に案内をさせて、尾

斬 番 六 十 三

第 八 回

形軍次兵衛の道場へ乗り込みに及び、こつ酷くお撃ち据ゑに相成るといふ一段、一寸一息。

エー引續きまして、前回の續きを伺ひますることでありましたが、彼の鈴木源三郎は、今日しも師匠の病氣全快のお慶参として、三島明神へ参詣を致したるその歸途、圖らず尾形の道場に於きまして、寶山流の振杖の爲めに、眉間を破られ、その傷口をばやうく手拭にて抑へ立歸つて参りました、然るにこれを師に見付けられましたところから、最初の程は詐つて居りましたが、段々重兵衛殿のお尋ねにございますゆゑ、據るなくありし次第を具さに物語を致しました、併しこれが尋常の立合を致して、怪我の途端に眉間を破られたといふのならば、柳生殿も左様に御立腹なざる筈もございますまいけれども、寶山流の振杖を、本人に得心もさせず用ゐたる上、被れ

斬 番 六 十 三

が面上を打破り、その上大勢の門人に大聲を發して笑はせたこのとでございますから、殊のはか重兵衛殿は御立腹を致されまして、重兵衛それだから常々汝に異見を致してゐるではないか、大事を抱へた身を以ちながら、何故左様な所に立寄つた、甚だ以て心得違ひである、なれども尾形といへる奴は、劍道の法を知らざる奴である、卒さこれより吾れ早速参つて、以後の見懸、そのやうな奴は、充分に懲らしてやらうと心得る、また寶山流の振杖に向つての立合といふものは、斯様な譯といふ事を、其方にも見せて置いてやるから、吾れを同道を致して、予の腕前をよく見て覺悟を置け、源三有難うござります、重兵衛併し彼れが道場へ参つたら、斯様々に申入れよと早遣身支度をなさいまして、源三郎の案内に伴れ、彼の尾形の道場へ御乗込みに相成りました、源三郎は玄關にかゝつて、源三か頼申す頼まうと案内を乞ひますと、程なく其處へ執次の者が出ましてよく見ると、先程の若者でございますから執次オ、お前は先

斬 番 六 十 三

刻参ッた伏見屋の手代ではないか、何の用だ源三、一、只今罷出でま
 したるは、先刻當家の先生の御手並を拜見いたし、早速立歸りまし
 て、彼の賢山流の振杖の事を、私の友人に話を致しましたところ
 然ういふお胸前なれば、是非一本お稽古を願ひたいと申しますから
 只今伴れて参りましたのでござります、何うか宜しくお執事の程を
 願ひたうござります、執事ハ、ア、それではなにか、當家の先生と、
 いま一本立合を致したいと言ふのか源三、左様でござります、執事、暫時
 控へて居れ」と云ひ置いて奥室へ這入りました、尾形にこの事を
 申入れましたるものと見ゆ、やがて再び其處へやつて参りまして、
 執事「なか、其方共は執心な者である、何本なりとも立合つてやら
 うと仰しやるから、此方へ這入るが可い、源三有難うござります」と
 重兵衛先生を案内を致して、道場へ乗込んで参りました、見ると、
 正面に尾形軍次兵衛、振の上に着座を致して居ります、重兵衛先生
 は其處にお坐りもなさらず、只突立つた儘、彼の尾形といへる者の

斬 番 六 十 三

顔を睨み詰めて居られます、軍次兵衛はこれを見て「大變失敗な
 奴だ」と思ひながら軍次「なにか其方が此方の振杖を稽古として貰ひ
 たいと言つて参つた者か」今まで重兵衛先生は一言をもお發しはな
 さいませんでしたが、餘り彼れが舌長なる言葉でござりますから、
 憤然となされたものと見ゆ、重兵衛如何にも然うだ、尾形軍次兵衛と申
 す奴は貴様か、此處へ出る、予が一本教へて取らせると、軍次「ナ、ッ
 飛んでもない事を申す奴だ、汝は亂心者か重兵衛、黙れ、餘計な事を
 言はないで、早く出る、軍次、汝れ不埒な事を申す奴である、その儀な
 れば用捨は致さぬ、支度を致せ、立合つてやるから、重兵衛何を餘計な
 事を申すか、汝如き小奴の相手をするのに、支度も何も要るものか
 此方はこの儘で居るから、何處なと貴様が勝手な所から打込んで参
 れ」と道場の眞正中へお出ましに相成つて、驕つて腰なる一尺三寸の
 鐵扇を抜取り、重兵衛「サア、乃公はこれで澤山だ、來い」尾形はこれ
 見ると、烈火の如くに憤りまして、軍次「ます、不埒な奴である、最

う許し置く譯には相成らぬ、汝そのやうな大膽な事を申して、次第に依れば命がないが好いか重兵素よりのこと、未だく汝如き小奴の爲めに、命を落すやうな者ではない、打てるなら何處からでも打込んで見よ」と重兵衛殿は突立つた儘でございませぬ、軍次兵衛は襟巻の用意を致し、例の寶山流の振杖、取より早く、怒ち八相に振被つたることにございませぬ、ヤツとばかりに双方位を定めて、四時晚合ひに及びました、柳生重兵衛殿は、只々八方破れの構備といふか、身体は何處も彼處も、皆隙だらけでございませぬから、いよ下して参りましたる軍次兵衛の早業に、危哉打たれしかと思ひのはか、ハッとして体をか懸しに相成りまするや否、飛鳥の如く忽ち彼れが手許へ飛込みましたが、尾形に空を打たして置いて、籠手を強か鐵扇で打振るましたる事と、いませすから、何條以て堪らうや、振杖はその處に打落されました、拾ひにかゝるそのうちに、

の邊りを一ツ蹴飛ばしたから堪らぬ、彼れはドンとその處に尻餅を突きました「降参た」と言ふ聲も發することか能ひませぬ、その間にお持ちになりましたる鐵扇にて、尾形軍次兵衛の面上を、發矢と打ちなさいませると、眉間は破れて、その處に血が迷出つた、アツと言ふ間もあらばこそ、襟頭を捉つて、道場の板の間に、グイッとお引据ゑるに相成りまして重兵衛コリヤ、汝は他流試合を致すのにその法式を辨へぬ奴だ、何故此方の門人を欺撃同様な事を致して、眉間を打破つた、寶山流の振杖なぞも申して、飛道具に均しい物を以て、卑怯にも面体を打破り、その上ならずも悪口に及んで、尙大勢の門弟をして笑はせるなぞは、怪しからぬ奴だ、汝ッ以後の見懲、これを喫へッ」と肩口の所から脊中にかけて、折檻の爲めとあつて、發矢々々とお打ちになります、實に尾形は身体も何も碎けるばかり、聲を揚げることも出来ず、虫のやうな息で軍次ア、降参た、降参ました」と幽かに聲を發しました、側で見て居る大勢

の尾形の門弟は、只呆氣に取られまして、誰れ一人と致して、聲を發する者もない、誠に何うも尾形の有様は、見苦しかりけること、ございませぬ、重兵衛殿はこの体を御覽になりまして、少し心地の好さことに思召したるか、重兵衛「コリヤ尾形、なんと其方少しは骨髄に徹へたか、汝のやうなる卑怯な奴は、助ける奴ではないが、吾れ今日には格別の情けを以て、一命は免して取らせる、また汝れのやうな奴に我名前を名乗るは、如何な事ではあるなれど、名乗つて聞かして置いてやるから、後學の爲めに忘れるな、予は恐れ多くも將軍家の御手を取つて御指南を申上げる、柳生但馬守の一子、柳生重兵衛三殿と申す者である、よく予の顔をば見覺へ置け……源三郎、總てこのやうな卑怯な得物を以て打込む時には、決して受けべきものではない、手許に飛込んで、如彼いふ工合に致すんだ、汝に於てもよく覺えて置け」この時尾形軍次兵衛は「さては有名なる所の此仁が柳生大先生であるか」と、やうく今となつて氣が付きました、が、な

かく起きることも出来ませぬ、その儘平蜘蛛の如くに頭を低げまして軍次誠に何うも恐れ入りましてござりまする、斯かる大先生といふ事を知らず、無禮を仕つりました段、平に御勘辨に預りたうござりまする」と段々ど當人は詭言を致します事にございませぬ、門人の徒も、只々目ばかりバチ／＼致して、互ひに顔を見合はせ、「道理で最初から滅法界お強い仁だと思つたが、強い筈だ、當時日本に於て、武藝にかけては、一と謂つて二と下らぬ柳生重兵衛の大本先生だ、剣道も色々段の遠ふものであるが、大体言つたら當家の先生が悪いのだ、彼のやうな卑怯な道具を用ゐて、剩りに悪口をしたものだから、自業自得、斯様な目に遭ふんだ」と門弟一統の者は、何とも言様がございませぬが、併し師弟の情愛でございませぬから、二三人の者は其處に出まして、門弟何卒先生お腹も立ちませうが、平に御容赦の程を願ひます」と皆々口を揃へて詭言を致しました、重兵衛「コリヤ源三郎、先刻汝道場で眉間を破られたる時に、何奴等が

笑ッたんだ 源三「へエ…… 重兵大勢の奴が笑つたと言ふぢやアないか
 源三「左様でござります 重兵「それでは今更此方が返報を致してやつた
 んだ、で、其方も返報だから、笑つてやれ 源三「へエ…… 重兵「へエで
 はない、笑へ 源三「笑へど仰しやつたつて、然う勝手に笑へるもんぢ
 やアござりませせん 重兵「何で笑へぬ、笑へぬ事はなからう、早く笑へ
 源三「へエ…… 重兵「何といふ無力だ笑様をする、最少と大さ
 い辭を發して笑へ 源三「でもこれがギリリ、決着でござりまして、最
 うてれしか可笑くは笑へませせん 重兵「仕様のない奴だナ手前は、然ら
 ば乃公が笑つてやると大口を開いてか笑ひなすつた、尾形を始り
 門弟の者共は、誰れ一人として頭を掻ける者もござりませせん 重兵「こ
 ゝヤ軍次兵衛とやら、武藝といふものは活藝と言つてナ、上の上の
 あるものだ、必らず以來は振杖なぞを用ゐることはならぬぞ」と懸
 々と御異見を致されましたることにござりまして、遂に源三郎をお
 伴れになり、彼の伏見屋作兵衛方へお立歸りになつて仕舞ひました

が、跡は門弟の徒、馬鹿々々しいやら、尾形に對して氣の毒である
 やら、何とも言様がござりませせん、皆々それとはなく、一人歸り二
 人歸り、狐鼠々々と引取つて仕舞ひました、最う斯うなると、流
 石の尾形も、この三島に道場を出して居るといふ譯にはなりません
 それから兩三日のうちに、遂に道場を閉切めて了ひ、諸道具萬端を
 賣拂ひまして、夜逃同様、何處にもなく立去つて仕舞ひました、さ
 て悉く相成りますると、矢張り當地にも武藝執心の者も澤山ござい
 まして、天下の名人柳生重兵衛先生が、伏見屋方にお在でなさると
 いふので、追々とお稽古を願ひたいと言つて、大勢の者が頼みに參
 りまする事でもござりませぬから、誠に重兵衛先生も厭煩く思召して、
 「何れ歸途の節は、暫く當處に足を留めるかも知れぬ、その砌りに
 は各々方にお教へ申す事もあらう、這回は圖らず病氣の故にて、當
 家に於て滞在を致したのである」と断つて仕舞ひ、最早病氣も全快
 を致したる事でもござりませぬから、漸く當地を御發足といふことになり

ました、そこで當家へそれ相當の手當料等もお遣しに相成り、伏見屋夫婦の止めるのを聞かま、遂に當家を御出立に相成りました、さて重兵衛殿は、源三郎をお伴れに相成りまして、名所古跡などを彼方此方と御見物を致され、追々上方の方へ御乗込みと云ふことになりまして、別段急いで急かぬ旅でございませうから、大概日に五六里位お歩さなすつて、道中筋を隈なく御見物を致されながら、またそのうちに氣に適つたる土地がありませうれば、三日五日と御逗留をなさいます、やうく、の事に日を累ね、尾州路の方へ御掛かりに相成りました、丁度今日しも鳴海手前までかゝつてお出で遊ばしたのが、これから鳴海の驛へ這入らうといふ左側の處に、一の墓あり」と認めてございませうから重兵衛、源三郎、何でもこの邊に今川義元公の討死を致した桶狭間の古跡があると云ふ事を聞き及んだが、さては此處に今川義元の墓ありと致してある、兎も角

も一廻行つて見やうではないか源三郎、お供を致しませう」そこで細路を傳つて、二三丁やつて参りますと、路傍に一ツのお墓がありませう、これは御館塚と稱へまして、今川義元公の死骸を此處に埋めたといふのではございませう、ホンの標の石がこの處に建つてあるだけでございませう、それも廣々たる原野の中、殊に松原に致して、他には別段これといふ物もございませう、誠に淋しい處でございませう、これが所謂駿遠參三ヶ國を領されたる、今川義元公のお墓であるか」と暫時は墓前に在つて、手向の經文を唱へて居りました、が重兵衛、何うも早や、百万石の大名も、世の末となれば、氣の毒なものだ、些か一日の合戦に、織田信長公の小勢に破られ、遂に討死を致されたが、その砌り彼の木下が天晴れ功名を顯したる合戦もこの邊りにあつた事であるか」と傍の松樹の根盤に腰打掛け、鑿道具を取出して、カチリカチリと火を鑽ちながら、お煙草を召喫つて、重兵衛殿は源三郎と二人、お話を致してお在でなされる、所へこれも

今お出でになつた彼の街道筋から、サックと出掛けて参りました者、一人の旅僧でございませう、その身は鼠木綿の衣類を着まして、尤も腰法のやうな物を身に纏ひ、白の脚絆に甲掛草鞋でございませう、然うかと思ふとこの坊主、腰に木刀のやうな物を一本穿し、して、網代の笠を阿彌陀に被り、凡そ酒なれば、一升五六合も這入らうといふやうな、大きな瓢箪を引擔いだることでございまして、彼の義元公の墓の前に立つて暫時これを眺めて居りましたが、僧ア、何うも久しくこの邊へ来た事はないが、如何だ義元公、相も變らず貴殿は、ボンヤリと野中に生れた一本杉、固くなつて立ッて在らつしやる、定めて淋しからうと思つて、不圖今日は通りかゝつたものだから、少し休息を致して参らうと、態々立寄つたのだが、坊主も永らくこの邊に参つた事はない、如何だナ、一献召喚らぬか、此方も一ツ貴殿の前で一杯飲まして貰はうと、前の草原に控乎と平倒つて、笠を取ッて傍に置きましたが、瓢箪の塞をば取り、懸て腰に

吊下げて居りましたる木剣の酒杯のやうな物を取出し、満々といつへ酌ぎまして、グツと一杯飲んで、數舌を致し、僧ア、好い心持だ、如何だ今川氏、一杯進上いたさうか」と言ひながらも、その酒杯へ満々注ぎまして、義元公の石塔の頭に打注けました、この杯を先程から二人の者は見て居りましたが、源三郎は呆氣に取られて、して源三先生、全体彼れは何者でござりませう、氣狂ではござりませう、すまいか、重兵衛殿は何も言はず、莞爾笑つてお在でなされると、不圖彼の僧は氣が付いたものと見ゆ、横手を回首りまして、僧オウ、これは仕たり、其處に誰れか居られたか、マア、同連がありやア結構だ」と、懸て坊主は手に酒杯瓢箪などを掲げまして、二人の側へツカ／＼とやツて参りました、僧如何だ、一杯献かうか」と、重兵衛先生の前にメツと器物を差出しますと、ヤロリと御覽なすつた重兵衛先生、莞爾とお笑ひなすつて手を出してお取りになりますると、そいつへ満々瓢箪の酒を酌ぎましたから、物をも言はず、

グツと一口召喚りまして、盃を坊主に返しますると、僧イヤこりやア何うも、よく飲んで呉れた」と受取りまして、坊主は一杯酌いで飲みました。が、また重兵衛先生に献す、此方も受けて飲むといふ工合に、互ひに彼の器物の献酬を致して、三四杯づゝ飲みました。源三郎は驚いた。「呑気な坊主もあるものだ、また先生も先生だ、御挨拶なくして、召喚つて居られる、妙な坊主が来たわい、全体彼れは何者であらう」と思つて居りますと、やうく、數杯召喚つたる重兵衛先生は、好い心持になりましたから、重兵衛ア、時に御出家、何だ、重兵衛貴僧いまこの義元公の墓へ、何が爲めに酒を注いだか、これには何か仔細がありませうか、僧イヤア、別に仔細はない、手向の水をしゃやうにも、水の持合せがないから、併し其許は餘程お酒が好きと見えますナ、僧左様サ、酒は至つて好きだが、其許も大分飲めると見ゆるナ、重兵衛別に餘計飲めるといふ事はないが、アア態々此處に參つ

たもの、茶店はなし、咽喉が渴いて居つたから、幸ひ其許が献して下された酒、水の代りと思つて、飲んだやうな次第、だが、大きに御馳走でありました、僧ハ、ハ、ハ、何うも見受けたいところがない、源三郎の顔を見て居りました、僧ハ、ハ、ア、此方の若い方は門弟か、ム、ウ……未だ一向出来ぬと見ゆるナ、源三郎此言を聞いて大さに立腹を致しました、「甚だ失敬な奴だ、此奴全く先生の如名前も知らず、通常の人間だと思つて、威張つて居やアがる」と思ひながら源三アイヤ御出家、全体其許は何と言はッしやる御仁だ、出家のやうにも見受けられし、また腰に木刀を佩んで在らッしやる事を思ふと、地体譯の分らぬ御仁だが、お名前は何と仰しやる、僧ナニ、恐僧の名前を聞くと言ふのか、オイ、お前は如何に年積が長かぬからとは言ひながら、少とは向先を見て物を言へ、先づ他の姓名を聞かんと欲する時は、己れの名前から名乗るといふ事があるやア

ないか、然う言ふ貴公は全体何者だ源三成程、こりやア何うも失禮
 をしました、此處にお在でなさるのは、如何にも貴僧の仰しやる通
 り、拙者の爲めには大切なるお師匠様で、柳生但馬守様の御子息に
 致して、柳生重兵衛三嚴公と仰せられる大先生にて、また拙者事は
 その門人、鈴木源三郎と申す者であります、道回師匠は日本六十餘
 州を御漫遊の爲めとあつて、愆くお出ましになつて居るので、拙者
 はそのお供を致して居るのでござる、坊主はこれを承はつて、僧ハ
 、、、左様か、イヤこれは何うも大きに失禮を致しました、さ
 ては其許が、いま天下に名を知られたる、柳生重兵衛先生でござつ
 たか、これは仕たり、何うも左様なこととは知らず致して、誠に色
 々の失禮、お免し下され、其許の阿父上とは至つて悪意に致したこ
 とであつて、また但馬殿の御子息重兵衛三嚴殿といふのは、御若年
 なれども、なか／＼天晴れ達人といふ事は、素より承知は致して居
 つたので、併し縁なくして、今日までお目にかゝつたことはなかつ

たが、貴殿とは露知らずでありました、平に御容赦の程を願ひたい
 重兵衛殿は此言をお聞きになりまして、重兵衛何と仰しやる、拙者の親
 共と相識と仰せられますか、して其許の御姓名は、何と仰せられま
 するや、僧イヤモウ、名前を尋ねられては恐縮を致す、實は淺山三
 五郎と申す暴飲れ坊主です、ハツと驚かれました重兵衛殿は、少し
 く背後に廻り、頭をお低げなすつたが、兼ね／＼親御より、この淺
 山三五郎といふのは、淺山一傳流の元祖と致して知られたる、實に
 當今に於て有名なる御仁であると云ふ事は、重兵衛殿も聞き及んで
 居られます、重兵衛殿は淺山先生でありましたか、誠に以て存せぬ事
 とは言ひながら、甚だ失禮を致しました三五イヤ、何う致して
 この時源三郎も共に飛退りまして、兩手を支へ源三は左様の大先
 生とも存じませず、無禮の段は平に御容赦の程を願ひたうござりま
 す三五、然う各々方のやうに、御丁寧なる挨拶では、甚だ痛入る、ア
 時に柳生殿、何方へ全体お出でになりますか、重兵衛、然れば、拙者別

〇七
に何處と言つて目的もござらぬが、ア中國から九州路の方を一つ
廻つて見やうと相心得ます、併し淺山先生、豫て承はり居ります
には、諸家方より尊公を望まれると雖も、御奉公もなさらず、斯う
してア御遊歴をなすつて在らっしゃいまするが、定めて何でござ
りませうね、國々をメツとお廻りなさいましたら、名人同士の劍道
の試合等も澤山あそばした事もあらうと思ひますが、何うか伺ひた
いもんで三五左様サ、ア随分武藝も好き、だが何分第一は酒です
何しろ大酒漢の事ではあり、武家公を致したところ、斯ういふ
勝手氣儘な坊主でありますから、逆も辛抱は出来ません、ア
只斯うしてアツクと氣根界に歩いて居ると云ふやうなことで、
ア數十年來斯うして流浪いて居りますから、随分試合も澤山いたし
た事があります、重兵左様でござりませう、後學の爲めに一應承はり
たうござります、今京都今出川に住居を致して居られます、吉岡又
三郎兼房先生、これは御有名な御仁でござります、先生はお立合

ひなすつた事がありませんか、三五ア、吉岡兼房、彼りやア何うも
いらい、なか、感心なもんだ、丁度昨年のなんでも春でした、
一應吉岡と試合つた事がありません、重兵ハ、ア、その砌りの勝敗は
如何でござりましたか、三五然れば、拙者負けた重兵、エ、……三五負
けた見事に負けました、重兵ハ、ア、左様でござりましたか、それ
ではお伺ひ申すが、越前の敦賀富岡の山中に、いま山籠をしてお在
でなさると云ふ、彼の伊東彌五郎友景入道一刀齋、此仁は中々有名
な先生といふ事を承はつて居りますが、お立合ひなすつた事があり
ますか、三五伊東ハ、ア、やりました、彌五郎はいらいな、彼の仁な
どは眞に劍術の神と云つても恥かしくない方だが、三年程前に出會
ひました、重兵ハ、ア、勝敗は如何でござりました、三五、拙者は
二本勝負を致しましたが、二本ながら見事負けました、傍で聞いて
居りました源三郎、驚いて仕舞ひました、重兵ア、豫て聞き及んでは
居ります、私は未だ會つた事はござりません、彼の木曾の乗鞍

ケ織の山中とやらに在でなまる塚原ト傳先生とお立合ひになりま
 したか三五、ムウ、小太郎か、小太郎先生にも會つた、素より以前
 別れてから、久しく會はなかつたが、丁度四年程跡に久々會つたこ
 どだ重兵、ヘエ、勝負は如何でござりました三五、然うサ、その時、如
 何ちや塚原、互ひに上泉の道場を出てから、永らく會はなかつたが
 久振でやらうぢやアないかと、立合つたナ、ところが負けました、
 重兵、エ、ッ……三五、イヤ拙者が見事に負けました重兵、ア、左様で、
 この邊の程近い處で、彼の尾張大納言様の御指南番役に、久田舎人
 といふ先生がおりますが、これは如何でござります三五、ム、彼仁
 も矢張り上泉の門弟だが、ア、何うも今は餘程老人になつて居る、
 けれども中々の劍客者だ、これも一昨年態々訪ねて行つて立合ひま
 した、負けましたナ、見事拙者が負けました、と、餘り負けたく
 言ふもんですから源三郎、ッ、吹出しました、重兵衛殿は傍で淺
 山先生の話を聞いて居らつしやつたが、不圖源三郎に目を付けられ

まして重兵、コレ、源三郎、源三、ハ、ッ、重兵、何故貴様は笑ふ、先生の
 お物語を聞いて居ながら、笑ふといふ奴があるか、失敬な奴だ源三
 へエ、何うも恐れ入りましたござります重兵、何うか淺山先生、御勘
 辨を願ひます、一年齡の長かない者は、ッ、イヤ下らない事を笑ふ者で
 ござりまして、彼れが無禮はお詫言を仕つることでござります、と、
 源三郎の無禮を詫びられました、心の裡では實に感心いたされま
 した、先程からの物語のうち、淺山先生が勝つたといふ事は一ヶ
 處もござりません、何處へ行つて立合つても負けたと云つて居ら
 しやいます、これが眞個の大先生の奥床しい所でござります、よく
 下手な奴は威張つて、己れが勝ちもせぬ事を、何處其處では勝つた
 なと申して、彼處では斯ういふ工合で不覺を取つたと云ふ如き、
 己れの失策は言はないで、只手柄話といふやつは、随分爲欲るもの
 でございます、何處其處で何本立合つて勝つたと言つた所が、それ
 を見て居たといふ者もなし、又何處其處で斯ういふ不覺を取つたと

言ッたところ、それを見たと云ふ者もなし、御自身さへ負けたと言ッて居れば、別段に先方に強を付けるといふ譯でもございませぬ。素よりこの淺山といふ仁は、中々の達人でございますから、然う負け通しに負けるものではないが、心の大きな仁です。勝つても負けたと言つて在らつしやるので、眞個のこれが劍客者なんぞさいます、その奥床しい所を重兵衛殿は御威心をなさいました。如何でございませう、幸ひ四邊に人もなし、誠に此處は寂々と致して、都合の好い場所と思ひます。一本お相手願ふといふ譯には参りますまいか。三五イヤ何うも結構、素より拙者も望む所でありませう。おやア一本やりませう。すると傍に居りましたる源三郎、誠に恐れ入りました。次第でござりますが、師に先立ちまして、若年の拙者、未だ修業中にはござりますが、斯かる大先生に一本でもお稽古を願ひましたら、生涯の私の徳でござります。何うか淺山先生にそのお

稽古の願へるやうに、如何でござりませうか。先生からお執成を願ひたいものでござりますが、重兵衛、そりやア何うも好い心懸だ。時に先生、御迷惑でもござりませうが、一ッ教へてやッて下さるとは出来ませぬ。三五イヤなか、其方の男は、年齢は長かないが、感心な男だ、己れから好んで稽古を願ひたいと言ふか、ム、ウ、ア今に此奴は物になるナ、ぢやア一本教へてやる、アお出で、源三有難うござります。と、早速鈴木源三郎に於きましては、頼巻玉襷、充分身支度を致しまして、兼ねて用意の襷の裡から、取出したる竹刀を掲げ、其處へ罷出でました。一傳齋は彼の腰に穿して居りましたる木刀を取りまして三五ヤア、御遠慮なしに打込んで来さッしやい」とヒタリッ中段に構へた。源三郎は大上段に振被りました。源三郎は、奥とお互ひに掛聲をかけ、位取りを致して、チ、ッ、ッ、と進んだが、源三郎は一傳齋が、ヒタリッと付けましたる木刀の鎧先が邪魔になつて打込む事が出来ませぬ。只「ム、ウ」と腕んで居

りまるとばがり、流石は一傳齋、体の配備鹽梅、餘程酸酢を致して居られますやうではあるが、鬼の毫で突いた程の隙もございませぬ、源三郎は竹刀を振りかぶった儘、身体練縮むばかりの有様に、少しも打込む事が出ません「エイ、ヤッ」とお互ひに聲を發して居りますうちに、源三郎は身体より熱湯の汗を流しまして、只振被った儘でございます、先程よりこの体を見て居られた重兵衛殿は「勝負見れた、源三郎引け、先程、ア、御苦勞でありました」この一言に一傳齋、應て木刀を引きまして「三五ハ、、、」と只笑つて居ります、源三郎はやうく、どこに禰願巻を取つて、一身体汗を拭きました、源三郎に何うも恐れ入りましてござります、御禮を申し上げることに相成りました、入替つたる重兵衛三郎、當時若手でありながら、天下の名人と謂はれた方なり、相手は淺山一傳齋、茲に武藝の極意を合ふといふ、御館塚の前に於て立合の一條ナマツと一息いたしまして。

第九回

さて双方充分身支度を致しまして、柳生重兵衛殿も相手は淺山一傳齋でございますから、決して油断は致しません、彼の源三郎の持つて居りましたる竹刀を受取りまして、重兵衛然らばお相手を願ふ、其處へお進みになりました、一傳齋は彼の木刀を中段に構へました、重兵衛殿は正眼といふので、互ひに双方、ツと詰寄りましたることにとざります「エイ、ヤッ」と聲が掛るとのみ、總体この名人同士立合となり、然る無暗にホカリ、と打合ふものではございませぬ、双方共に只々掛聲のみで、睨合つて居ります、鈴木源三郎は傍目も觸らず、一生懸命に見物を致して居ります、此方は少しも身動きもせず、お互ひに隙があらば打込まんと、只睨合つて居ります間、凡そ一刻餘りでございましたが、折々には掛聲が掛るとのみで、何のことはない、遣付けの人形の如く、

斬 番 六 十 三

少ども身体を助かしません。却つて立合なんかは、下手の方が見答へがおります。只「カリ」くと打合せするのですから、見て居ても面白うございます。別段に剣道に限りません。圍碁でも将棋でも矢張りその通りで、何段と言つて段打になります。一席の碁を圍みますするのには、或は七日又は十日もかゝつても、その勝負が着きませんが、平碁になりますると、見て居るうちに、何番でもその勝負が着きませぬ。又將棋とてもその通りで、平手な奴になりませぬれば、いま其處へさし始めたかと思ふと、勝負が直に着いて了ひます。が段打になつて見ると、なかく「容易に勝負の着くものではございせん、それとこれとは事異ると雖も、總て武藝などは名人同士が斯う腕合つて掛碁をかけて居りますと、第一その前を通ります馬でも棟縮で仕舞つて、歩くことが出来ぬといふ位なもので、何處に真味がありますか、その道に這入つた者でなければ、少ども分りませぬ、そのうちに稍々一刻ばかりも経ちますと「降参た」と

斬 番 六 十 三

いふ聲が掛りましたのが同時にございまして、双方スツと引きまゐると重兵衛、淺山先生、誠に重兵衛恐れ入りました三五イヤ、この一傳齋如きの及ぶ所ではござりませぬ、拙者も恐れ入つたることである。重兵衛左様ではありますまい、御身は吾れに勝を譲つて下さらうといふ思召しではあるが、到底重兵衛如きの及ぶ所ではござりませぬ三五「なかく」然にあらず、柳生殿に對して、吾れ等如き者は逆も及ばぬことである」と、お互ひに卑下を致してお在でなさいませぬ、實に他から見て居ても、立派なものでございます。源三郎は大きに威心を致しました、さて兩人は「先づ今日はこれにてお別れ申す、また御縁もあらばお目にかゝらん」と、茲に双方別れを告げると云ふことに相成りましたが、淺山一傳齋は東の方へ指して行つて仕舞つた、又柳生殿は源三郎を伴ひ、程なく街道筋へ出でまして、纏て尾州の城下へ乗込んで参りました、ところがあるがその當時尾張大納言義直公、兼ねて這回柳生重兵衛殿が江戸を立つて、東海道筋をば上方

の地へ乗込むといふ事は、何時の程とはなく、尾州路へも聞はまし
たのでございまして「當國へも重兵衛の來るは必定、斯かる名人の
乗込むといふのは幸ひであるから、見付け次第に當國に足を留めさ
して、我が家中の者にもその柳生流の極意を弘めさせん」といふ思
召しでございしますが、何分浪人者とは違ひまして、名にし負ふ將軍
家の御手を取つての指南番、一万石を御領りなさる柳生の長男、殊
に諸侯の御子息でございすから、先づそれだけにお手當も丁寧に
せんければならぬといふので、兼ねて見知人をは道中筋へ迎ひと致
して出し置いたることとございす、ところが迎ひの者は、宮の驛
に於て、重兵衛殿に出逢ひましたる事でありすから、禮を厚く致
し「主人義直、重兵衛殿をお迎ひ申せとのことでござりす、依つ
て是非共に尾州家へお出での程を願ひたい」と、丁寧なる所の挨拶
でございす、これに依つて重兵衛殿も参らぬといふ譯にも参りま
せんから、案内に件られまして、尾張の名古屋へ乗込んで参りま

した、兼ねて御家中の中根藤十郎といふ方のお扣屋敷をば、重兵
衛殿の旅宿に宛てまして、誠にその御手當も結構に行届いたること
とございす、先づ三四日は道中の疲勞休みを致した上、中根の案
内にて、名古屋の御城内へ御立越に相成りましたが、大廣間に於
て御對面といふことに相成り、その正面には尾張大納言義直公、お
側には大勢の近習が居列ひ居ります、お目通を致したる柳生三藏
先づ久々の御挨拶を申し上げたることにございす、義直ア、さて重兵
衛、這回は諸國漫遊の由を承知いたしました、何卒當國に参つたるか
らには、切めて兩三年は當地に留まり、武藝の程を家中の者に指南
を致してやつて呉れるやう、就いては予も指南を頼むことである
と丁寧なる御願ひでございす、この時重兵衛殿は威儀を正して、
重兵有難きお言葉にござりす、仰せの如く私も這回は諸國漫遊を
致したいといふ決心にて、江戸表を出でましたのであります、先
づ當地に暫時留まつてお稽古を致しますから、御前もその思召して

お習ひなさるが宜しい、長き師匠といふ者には就いて置きたいものであります、拙者などが當國に居りますのは、何のことはない、田野に麒麟の下ッたと言はうか、又掃海に鶴が降りたと言はうか、實に譬へ難くない位なるものでありますゆゑ、その思召しにて皆様方はお稽古をなさるが宜しい、いま世界に私はどの名人は豈もありはすまいと心得ますから、主君にもお喜び遊ばせ」との一言であります、お側に居列れる者は、顔を見合はして来れました「兼ねく重兵衛殿は慢心をして、御發狂をなすつたお方であるといふ事は聞いたが、未だにその氣狂も治らぬのか、これは餘程變だ」と皆々は思ひましたが、併し腕前にかけては、それだけ出来るに違ひないのことでございますから、ア何でも當處に留め置いて習ひたく思召したることでございます、依つて主公も却つてこれに争うては好くないと思はれまして、義直如何にも重兵衛、你的申す如く、田野に麒麟とよく申したことである、何卒暫く留まつて呉れるが可い重兵衛イヤ

委細畏まり奉つりました、拙者ぐらゐの天晴れな名人になりますると、妙なもの、氣の進んだ時でなければ稽古を致しません、その替りに氣が進んで参りましたら、何時でもお稽古を致します、どうか氣の進むまでこの儘お拾置きを願ひたい、私が稽古をすると言つたら、皆さん方はその胸箕で一生懸命に稽古をなさるが宜しい、義直「イヤその儀は如何にも承知を致した、皆の者左様心得よ」とここでお盃などを下され、様々の頂戴物もありまして、先づその日は彼の大手前御端なる、中根勝十郎のお屋敷へ、重兵衛殿は引取つて参られました、暫くこれに御逗留といふ事に相成りました、ところが尾州公の御膝掛りでございまして、尾州の若武士のうち大勢を入替り立交り附け置かれ、御食事等も結構なお手當で、美酒佳肴などを下し置かれるといふ事に相成りました、却つて重兵衛殿はこれを迷惑に思召し、只々お捨置きを願ひたいといふので、お断りを申し上げ、その後には門入源三郎と只二人、御逗留になつて居りましたが

宅に在らつしやるかと思ふと、源三郎を伴れてはナラくとも出掛
 けになつて、少しも稽古を致さうとは申されません。そのうちに二
 月ばかりといふものは経過いたしました。けれども何時稽古を始め
 るといふ事を申しませんから、主公の方から段々お急きになりま
 ると、「未だ」重兵衛の氣が進みません」どあつて、少しも稽古を
 仕やうとは申しません。全体何時まで柳生先生は氣が進まぬのであ
 らうと、家中の方も呆れて居る位でございます。ところが既に重
 兵衛殿は城中城外その他大抵この界隈は御見物に相成りましたが、
 何時までもこの地に足を留めるといふ思召しではない、御自身の目
 的は、何卒いたして九州路を渡遊いたしたいといふのでございま
 す。けれども江戸を立つて出掛けに九州へでも乗込む時には、後
 の大名も、これは公儀よりお手入ではないかといふので油断を致し
 ませんから、故意とこの邊にナラくとも御逗留して居られます。
 が、別段これといふお姫様もございませぬ。只源三郎に折々は武藝

の話なを致されるのみでございませぬ。重兵衛如何ぢや源三郎、予は退
 うこの地を發足いたしたいと心得るが、逆も尋常では發足すること
 が出来ぬであらう。源三左様でございませぬ、ア切めて暫時でもお稽
 古を遊ばしませんと、この儘御立退きに相成らうと思はせられた
 ればとて、屹度無理にもお差止めになるだらうと思ひませぬ。重兵衛、それ
 だから予も困る、寧ろ夜逃でもしやうか。源三御元、殿仰しやツちやア
 いけません、重兵衛殿は何うか致して出立をしたいと思いますと思つて在ら
 しゃるところへ或日の事でございます。案内を乞ふ者がありません。
 オア、頼まう、チロツと頼申すと、案内を乞ふ者がありません。
 そこで源三郎は玄關に出て見ますと、年頃三十恰好に相成ります
 る、顔色の淺黒い鼻の隆い男で、身には黒木綿の紋付を着用いたし
 小倉の袴を穿いて、チロツと大小刀を穿込み、藁草履を穿きまして
 頭髪は撥髮奴といふので、鬚先は横に散ばつて、下郎のやうな髪な
 男でございませぬ。源三何だ、いま頼むと言つたのはお前か。オア、一

眞平御免なせにまし、エー重兵衛さんは居りますか源三「ヤイ、何
てことを言ふ、重兵衛さんとは何だ」○重兵衛さんだから重兵衛さ
んといふんだ、仕方がないぢやアねか源三「控へる、野方途もない
事も申す奴だ、柳生重兵衛公の御旅宿なれば當家である、貴様は全
体何處から参つた」○乃公か、乃公は今表の門から這入つて来たん
だ、お前ぢやア分らねか、兎も角も重兵衛さんに「エッ」と會は
して呉んね、少し乃公「頼みたい事があるんだ源三「何と云ふ事を
言ふ、頼みたい事があると言つて、何の用ぢや、用事の譯を言へ、
○困るね、重兵衛さんに會つたら分るつて言つてるぢやアない
か、何うもつても用事を言はなくつちやアお前執次がないと言へば
仕方がない、重兵衛さんといふ仁は、大變剣が巧いといふ事を聞
いたんだがね、少し「ア教へて貰ひたいもんで、と言つて、なに
もその無理な事を教へて呉れと言ふんぢやアね、極く正味の所を
十日ばかり教へて貰つたらそれで好いんだ源三「コ、貴様は全体何

だつてそんな無法な事を言ふ、源三の極意に正味の何だのつて事
があるか、貴様は酒にでも泥酔つて来たナ」○オ、冗談言ひなさ
んナ、乃公「一生懸命になつて来てるんだ、マアエテ言はない
で、重兵衛さんに然う言つて呉んね源三「だつて、そんな馬鹿な事
が執次けるか」○何も別に馬鹿な事を言ふんぢやアね、劍術屋へ
出て来て、劍術を教へて呉れと乃公「言ふんだらう、これが米屋と
か酒屋へでも出掛けて行つて、劍術を教へて呉んね」と言つたら、
そりや「ア馬鹿と言はれやうが何と言はれやうが仕方がねか、お
前所の重兵衛さんは劍術屋ぢやアねか、だから然う言つて呉んね
ねと頼んでるんだ源三「左様な事は執次はならぬ」○何でならぬの
だならぬも、成らねぬもあつたものぢやアね、然う言つたら好い
ぢやアねか、可怪な野郎だナ源三「ヤ、野郎とは何だ」○野郎ぢ
やねか、手前は、ぢやア手前は女か源三「なんて失敬な事を言ふ、
○何でも可い、可怪な人間だねお前は、然う言つて呉んナと言

つたら」と頼りに玄關に於て争つて居りますから、奥の方にも聞は
 たものと見せまして、重兵衛殿は手を鳴らし、源三郎を御呼びにな
 りました。が重兵衛何だ源三郎源三何うも大變な奴が参りました、黒の
 紋付に袴を着けて、大小刀を穿して居りますが、頭髪の恰好を見ま
 すると、マア下郎にやア相違ござりませぬ、尊公の事を重兵衛さん
 く」と申しまして、劍術の極く正味の所をば、十日ばかり稽古を頼
 ひんだなと云つて、滅法界な事を申して居ります。重兵衛ハ、ハ、ハ、
 左様か、一答めてやるナ、何か望みのあつて参つたものであらうから
 兎も角も此處へ通してやれ源三長ましましてござります」と、源三
 郎は再び玄關にやつて参りまして源三「オ、オ、オ、お前亂暴な事を言
 つちやア可けないよ、お目通へ伴れてつてやるから、餘り無禮な事
 を言はないやうにするが可い。〇「そいつア有難いな、ぢやア行つて
 お目にかゝらう」と彼の男は源三郎の背後に附いて、應て奥室にや
 つて参りますると、重兵衛殿の居られます次の室に手を支へまし

て、取合の唐紙を開いた源三郎「エ、恐れながら申し上げます、此仁
 が即ち願つて参りました者でござります。重兵衛「コ、コ、コ、面を掻けい、
 其方が予に劍術を教へて呉れと言ふのか。〇「マア大將、お前さん
 が重兵衛さんだね。重兵衛如何にも予は兵衛である。〇「兼ねてお名前
 は聞いて居りますが、どうかマアこれから大將、心安く願ひせ。重兵衛
 ハ、ハ、ハ、罪のない奴だ、劍術を何が爲めに習ひたい、劍術を習
 つた上で、斯うもしたいといふ你的望みがあるのなれば、次第に依
 つては教へてやらぬ事もない、予はこの地に乘込んで参り、既に二
 月以上になるといへど、家中の者には勿論、未だ尾州公にさへ稽古
 を始めたことはないのだが、事と次第に依れば、其方には教へて遣
 さぬこともないが、如何いふ譯か言へ。〇「そいつア何うも有難
 い、實は私やアね、御當處のお勝手お賄方を勤めて居ります。原田三
 郎兵衛といふ者の中間で、爲助と申す者でござります、丁度主人の
 原田様のお屋敷にやア凡そ十二三年も奉公をして居りますが、大体

宅の旦那はね、御當家の御指南番役久田舎人先生の門弟で、當時五人衆の一人と謂はれて、マア劍術は五人の中で宅の旦那が一番上手な人ですね、どころがその舎人先生は、永らく病ッて居なざるので、マア後の御指南番は多分宅の旦那になるだらうと、世間でも噂をし私でもそんなに思つて居たのです、然るに丁度三年ばかり前にこの御城下へ來ましてね、堀端に道場を開いて居ますのは、何でも中国邊の浪人ださうですが、横山郷太夫とかいふ野郎です、大層この頃は弟子が増ひましたところから、その野郎が威張出しやアがつて、事に依つたら御指南番役にもなりてねと言ふんです、けれど宅の旦那が如彼して在らつしやつたら可いねと考へやアがつたものと見ゆ、實は一兩日前の事でした、縁日のことですから宅の旦那は御城下へマア植木を見に行きなすつたんだ、そいつを貴邸途中で郷太夫の野郎が待伏をして居やアがつて、無理に己れの屋敷に伴込んんで酒を侘めたところが、私の方の主人といふのは、別に

にこれといふ道楽はないんですがね、酒と來ては堪らないんで、飲出しますと二升でも三升でも飲ひんです、それを先方は知つて居ましたと見ゆて、無理に侘めて太多と飲ましたんです、その酔うた所を附込んで、強ひて道場へ引張り出しやアがつて、形だけを使ひたいと言つて、強ひて道場へ引張り出しやアがつて、形だけと言つて置きながら、木刀を出した、すると宅の旦那が言ふのにやア、木刀は真劍に類するものだから、怪我でもしては可いねといふのを無理に木太刀でやつたのです、そこで郷太夫が打込んだのを、宅の旦那が受けたんです、すると如何いふものかその木太刀が、真中から折れたんです、折れたものだからボカリと旦那が打たれたので、そいつをお前さん續打ちに無暗に打ちやアがつたんで、マア宅の旦那は眉間が割れる血は流れるといふ、大變な騒ぎになつたのだ、すると横山郷太夫の野郎が、宅の旦那の事をば色々に悪口をしやアがつたつた揚句、旦那をば道場から突出しやアがつたのです、そこで

且那は残念ながら、眉間の傷を抑へて、悄悄と宅へお歸りなすつたが、
サアそれからと云ふものは、頭も上らない位の大病、どころが丁
度私やア昨夜の事でした、且那は非常に唸つて在らつしやる、何分いまだ且
て見るといふと、且那は非常に唸つて在らつしやる、何分いまだ且
那は御新造はなし、他の奉公人は皆寝て居ましたから、私も心配で
堪らないので、且那如何いふものでそんなにお唸りなすつて在らつ
しやると云つて聞いて見ると、實は且那が立合つた事は、昨夜まで
知らなかつたのですが、且那の言はれるには、爲助、聞いて呉れ
これ、斯ういふ譯で、先方の出した木刀が折れたのだ、誠に不思
議な事もあるもので、赤檜の木刀を折るといふ腕前は、なか／＼多
くあるものではない、酔つて居たから、此方は氣が付かなかつたが
今考へて見るといふと、全くそれは桑の木で木刀を拵へて色着けを
したもので、檜の木刀と桑の木刀と打合つたら、屹度桑の方が折れ
るといふのは極つたことで、この中の立合は、吾れにはその唐桑色

着けの木剣を持たして、先方は檜の木剣を以て打込んだと云ふ事が
分つたけれども、今更復らぬ事だ、併し武士が眉間にこれだけの傷
を受けては、當分は御奉公が勤まらぬ、彼の時に酒さへ飲まなかつ
たら、斯ういふ間違はない、酒は禍の基、ア、残念な事だ、涙を
翻しての物語を聞いた時には、私やア堪りませんでした、これ、尋
常の勝負で負けたとか言ふんなら仕方なね、横山といふ奴はそ
んな拵事をしやアがつて、且那の眉間に傷を付けやアがつたから、
何うかしてこの返報をしたいと思ふんです、けれど、且那に話せ
ば止せと仰しやるに違ひないから、寧ろこれは久田先生の所へ行
て早習ひに習つた上で、返報をしてやらうと思つてね、直に久田先
生の所へ行つて、これ、斯様々々の次第ですから、何卒主人の返
報をして、その郷太夫といふ野郎の頭を真二つに割してやらうと思
ふんです、依つて劍術の正味の所を早教へに教へて下さいましと、
段々久田先生に頼みました、ところが下郎ながらもよく申して參つ